

アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動  
芸術的労働をめぐって

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科  
グローバル・スタディーズ専攻 博士課程（後期課程）

学位請求論文

高橋侑里

2021年11月

## 目次

### 序章

第1節. はじめに	5
1. はじめに	5
2. 調査背景	6
3. 調査方法 フィールド・ワーク/参与観察/インタビュー調査	8
4. フィールド・ワークでの滞在先	8
第2節. 方法論の模索 映像を観る/制作する	11
1. 「旅人」が描く民族誌	11
2. エスニック・マイノリティ表象に隠蔽された力学 観客たちの戦略を切り開くために	14
3. 映画制作活動とは 自らを表象する	17
4. モデル・マイノリティ神話	20
第3節. 戦後福祉政策の隆盛とエスニック・マイノリティ	22
1. 第二次世界大戦後における福祉政策の隆盛	22
2. エスニック・マイノリティの反応	22
3. 草の根運動からNPOへ	26
4. 商品化への抗い 諸価値の領域を切り開く	26
5. 生き残るための戦略	29
6. 芸術的労働としての映画制作/上映活動	29
7. 賠償政治	30
第4節. エスニシティ	33
1. エスニシティの概念をめぐって	33
2. エスニック・スタディーズ	35
3. 集合的記憶とエスニシティ	37
第5節. 映画祭	39
第1章. 非物質的労働: 解釈労働、想像的、創造的労働をめぐって	
第1節. 社会運動と起業活動をめぐって 労働的視点による介入	41
第2節. フォーディズムからポスト・フォーディズムへ	43

1. 移行の背景 非物質的労働をめぐるグレーバーの介入-----	43
2. 労働の概念をめぐる新たな議論的展開-----	45
第3節. 労働の前提を問い直す-----	48
1. 生産/再生産労働再考-----	48
2. 非物質的労働に対するアプローチ再考-----	51
第4節. 芸術家は労働者なのか？-----	54
1. 問題意識-----	54
2. 労働の概念と神学的伝統-----	55
3. 生産者主義から消費主義へ-----	56
第5節. 労働と現代アートの世界-----	57
1. 労働の概念と現代アートの世界-----	57
2. 現代アートの世界-----	58
3. 二極化された社会-----	58
第6節. 芸術的労働、解釈労働 (Interpretive labor, Interpretive Work)、想像的、創造的労働 (Creative Work, Creative Labor)-----	60
第7節. 価値と諸価値の抗争-----	62
第8節. 現代の仕事の定義と芸術家の労働-----	64
第9節. 各々がそれぞれの役割を担う映画制作の現場-----	66
第10節. 非物質的労働におけるコミュニズム-----	69
第2章. ポスト9.11に想起される日系アメリカ人の記憶 -四世タッド・ナカムラのドキュメンタリー映画をめぐって-	
第1節. 作品の背景と考察目的-----	71
第2節. これまでの日系アメリカ人研究と研究の方法-----	72
第3節. アジア系アメリカ人シネマとナカムラの映画制作活動-----	74
第4節. 監督、タッド・ナカムラと作品紹介-----	75
第5節. 想起される日系人の経験-----	77
1. 他者との出会い-----	77
2. モデル・マイノリティ」言説の外部-----	80
第6節. ポスト9.11における強制収容所の記憶-----	84
1. ポスト9.11における日系人強制収容所の記憶-----	84
2. ポスト9.11において60年代の運動経験を問う-----	88

第7節. 小括	92
第3章. ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』から問う日系アメリカ人の戦争の記憶	
第1節. 映画『ミリキタニの猫』の背景	93
1. ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』の成り立ちとミリキタニの紹介	93
2. これまでの日系人研究と本研究の位置づけ	94
第2節. 強制収容所と忠誠登録審査の経験を問い直す	98
1. 忠誠登録審査を巡る認識と問題	98
2. 近代国家と徴兵拒否	102
3. 不忠誠という問い	104
第3節. ミリキタニにとっての絵を描く行為とは	106
1. 抗い続ける戦術としての創作活動	106
2. 怒りと吊い	109
第4節. 可能性としての行為主体性 (agency)	110
第4章. 私たちを隔てさせるものは何か 他者との連帯をさぐる	
第1節. 映画鑑賞による連帯の発生	112
第2節. 映画祭空間の祝祭性	114
第3節. 映画祭：作り手がオーディエンスであり、オーディエンスが作り手となる	117
第4節. 歴史記憶が交差する空間 サンフランシスコ市慰安婦像建設の是非をめぐって	118
第5節. 日系人兵士をめぐるリハビリと解放の言説	122
第6節. 戦争動員が常態化した社会	125
第7節. 国家間の問題として終わらせないために	127
第8節. 他者へと連帯してゆく記憶	128
第5章. サンフランシスコ・ベイエリアにおける社会運動と起業活動	
第1節. IT産業と都市のジェントリフィケーション	132
1. フィールド・ワークにて浮かび上がった問題意識	132

2. 都市のジェントリフィケーションの影響	132
3. シリコンバレーが持つ場所性	134
第2節. 社会運動と起業活動	135
1. 社会運動と起業活動 137	135
2. テック・ハウスでのフィールド・ワーク	136
3. 「Google をぶっ潰す」起業家	138
4. 起業家は前衛主義になりうるか	139
第3節. 想像力、創造力はどこへ行ったのか	141
1. イノベーションが起きる可能性がある社会とは	141
2. 想像力、創造力 (Creativity)	142
終章.	
第1節. 序章について	145
第2節. 第1章について	146
第3節. 第2章について	149
第4節. 第3章について	150
第5節. 第4章について	152
第6節. 第5章について	154
第7節. これからの課題	155
参考文献一覧	157

序章.

第1節. はじめに

1. はじめに

本研究は、アジア系アメリカ人の歴史、とりわけ日系アメリカ人の歴史経験を描いたドキュメンタリー映画についての考察からはじまった。筆者は、2013年より、ドキュメンタリー映画が制作される背景を探る目的でサンフランシスコ・ベイエリアでのフィールド・ワークを行った。アジア系アメリカ人については、主に歴史学研究分野の膨大な蓄積がある一方で、アジア系アメリカ人シネマや表象分析についての考察は数にしては基本的には少ない。主流メディア、とりわけハリウッド映画におけるアジア系アメリカ人表象に対する考察は比較的多数発表されてきた<sup>1</sup>。しかしながら、なぜアジア系アメリカ人メディアについての考察がこれほど少ないのであろうか。理由の一つとして、アジア系アメリカ人メディア・シネマ自体の規模が相対的に小規模であることが推測することができる。しかし、これだけでは理由として圧倒的に不十分である。また、アジア系アメリカ人の歴史や文化の授業においてもかかるプレゼンスは比較的低く、映像作品は副次的な教材として使用される傾向にある<sup>2</sup>。主流メディアにみるアジア系アメリカ人の表象を分析、考察することは意義深いだが、これらの研究の前提にはマジョリティに対してのエスニック・マイノリティとしてのアジア系アメリカ人が設定されている。クリフォードの言葉をかりると、「マイノリティというような単語は、マジョリティの力とのあいだで境界づけられるロケーションを含意している」のである<sup>3</sup>。では、ハリウッド映画や主流テレビにおいて描き出されるアジア系アメリカ人表象ではなく、アジア系アメリカ人自身によって制作されたメディア、表象を考察の対象とすると、どのようなことが浮かび上がるのであろうか。かかる問いに対する暫定的な答えを模索するためには、複数の学問分野をまたぐこととなる。

---

<sup>1</sup> 例えば、村上由美子『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』、朝日新聞社、1993年がある。

<sup>2</sup> フィールド・ワークでの参与観察実施、2015年～2017、2019年の間にサンフランシスコ州立大学アジア・アメリカン・スタディーズの授業を複数回聴講した。また、日本における日系アメリカ人の歴史の授業についても凡そ同じことが起こっていた。この見解は、授業方法に対する批判では全くない。ここで指摘したいのは、映像メディアの周縁化された扱われ方である。

<sup>3</sup> クリフォード、ジェイムズ『ルーツ-20世紀後期の旅と翻訳-』、(毛利嘉孝、柴山麻妃、福住廉、有元健、島村奈生子、遠藤水城訳)、月曜社、2002年、134頁。

## 2. 調査背景

アメリカ合衆国カリフォルニア州に位置するサンフランシスコ・ベイエリアと呼ばれる一帯は、古くはゴールドラッシュ時代から現在に至るまで、世界中から人々が往来する西海岸の玄関口と呼ばれてきた。近代からポスト近代にかけて、現在進行形で容赦のない資本主義の影響による国際分業、紛争の影響を受け、土地や職を失い、強制的に移住を強いられ中央に向かわざる追えなくなった人々が往来する場所である。換言すると、なんらかの抑圧を受け、国、コミュニティといった元いた場所、社会関係から剥ぎ取られた(rip) 経験をした者たちが、もう一度どうにか自分の存在する場所、コミュニティ、社会をつくりあげようと結集している場所である。

筆者は、コミュニティと映像制作/鑑賞行為の関係に着目し、アジア系アメリカ人の一般の人々の歴史意識についての考察を深めるため、毎年2月に開催される第二次世界大戦時の日系人強制収容を追悼する「追憶の日」と、毎年3月に非営利団体、センター・フォー・アジア・アメリカン・メディア (CAAM, Center for Asian American Media) によって開催されているアメリカ国内最大級のアジア系アメリカ人映画祭、キャム・フェス (CAAMFest) でのフィールド・ワークを実施してきた。筆者は、「追憶の日」のボランティア活動参加をつうじて、主催団体、ニチベイ・ファンデーション (Nichi Bei-Foundation) のスタッフの方やボランティアの人々と知り合い、関係性を構築してきた。アジア系アメリカ人映画祭においても、映画祭に通いつづけるなかで映画監督の方たち、ボランティアの方、観客や主催者団体キャム (CAAM) のスタッフと知り合い、交流を深めていった。

ニチベイ・ファンデーション (Nichi Bei-Foundation) は、日系アメリカ人のスタッフによって運営されている非営利組織である。では、どのような人々がニチベイ・ファンデーション (Nichi Bei-Foundation) のボランティア活動に従事しているのだろうか。ボランティア活動に参加している人々の顔ぶれは、ほとんどが日系の人々とおもわれた。しかし交流を深めるうちに、日系人ではない人も参加していることや、彼らのボランティア活動への思いが一樣ではないことが明らかとなった。ある中国系アメリカ人男性は、ボランティアでカメラマンとして、日系コミュニティによって開催される数々のイベントやお祭りの写真を何千枚も撮影、選別したのち、ニチベイ・ウィーク (Nichi Bei-Week) 新聞の発行に間に合うように写真を送付している。彼の一週間のスケジュールは、コミュニ

ティ・イベントと新聞発行の期日を中心に組まれている。サンフランシスコのチャイナタウンにも非営利団体はたくさんあるのにも関わらず、なぜニチベイ・ファンデーション(Nichi Bei-Foundation)のボランティア活動をしているのかと尋ねたところ、「家がジャパン・タウンから近いから。」と答えてくれた。加えて、「慰安婦問題や南京大虐殺といった国家間の歴史問題は、ボランティア活動とはあまり関係ないよ。」と付け加えた。<sup>4</sup>このことから、ボランティアとして活躍しているのは必ずしも日系アメリカ人に限らないことがわかる。

また、「追憶の日 (Day of Remembrance)」当日、ボランティアとして参加していた大学生に話を伺ったところ、その大学生は「コミュニティ・イベントは大事なことだと思うけれど、このお金を使って、路上で困っているホームレスに食べ物や物資を配る方がいいと思う。」と、話してくれた<sup>5</sup>。事実、サンフランシスコの路上には、日本では滅多に見かけることもないようなドラック中毒者や赤ん坊を抱えているホームレスの女性が置き去りになっている。自分たちの歴史経験を共有するよりも、今にも路上で命が付きそうな者や、警察の職務質問に晒され続けられている者たちを助ける方が優先順位は高くあるべきではないのであろうかというわけである。この大学生は、コミュニティ・イベントは日系人にとって重要であるという認識すると同時に、日系人が置かれている社会的ヒエラルキー、つまりは凡そが中流階級であるが故に、なすべき社会的責務があるということに気づいているのである。

サンフランシスコ州立大学エスニック・スタディーズのアジア系アメリカ人についての授業では、ニチベイ・ファンデーション(Nichi Bei-foundation)でのボランティア活動への参加者を募集していた。当日、会場のセットアップや食べ物を配るといった手伝いを行うと、クラスの成績に加点されるという。ボランティア活動に参加した学生の中には、アジア系ではない出自の者もいた<sup>6</sup>。このような些細なきっかけを若い世代の学生に与えていくことによって、コミュニティと大学をつなぐための努力は継続されている。

---

<sup>4</sup> フィールド・ワークでのインタビュー調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2019年5月28日。

<sup>5</sup> フィールド・ワークでのインタビュー調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2017年2月25日。

<sup>6</sup> フィールド・ワークでの参与観察実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2017年2月18日。



### 3. 調査方法 フィールド・ワーク/参与観察/インタビュー調査

次に本研究の調査方法、とりわけ参与観察及びインタビュー調査について詳しく述べる。本研究は、参与観察及び質的調査から得たデータをもとに研究分析をおこなってきた。

2012年2月、筆者は、アメリカ・ロスアンゼルスで、初めてのフィールド・ワークを実施した。ロスアンゼルスでは、日系アメリカ人の家にステイし、日系社会の人々を紹介していただいた。ロスアンゼルスでの調査は、とくに第2章に関わるインタビュー調査をおこなった。2014年2月には、第3章に関わる調査データを収集するためニューヨークでインタビュー調査を実施した。次いで同月、調査場所をロスアンゼルスからサンフランシスコに移し、現地での初めての調査をおこなった。2014年から2019年まで、複数回サンフランシスコに訪問し、参与観察とインタビュー調査を実施した。フィールド・ワークの具体的な滞在先については、以下で述べる。また、参与観察とインタビュー調査に加えて、現地社会で知り合った友人たちとの共同生活をとおして、質的データを集めた。そうした調査過程では、格式張らない言葉を聞き取ることができた。

また、サンフランシスコでのフィールド・ワークでは、映画祭の上映会場のみならず、映画制作の場面にも加わった。また、映画祭や映画制作といった映画に関わる以外の場所にも、例えばアジア系アメリカ人の交流の場等に頻繁に参加した。

サンフランシスコでは毎日のように都市の高級化(ジェントリフィ・ケーション)や警察の暴力に対する抗議活動といった社会運動、集会が行われていた。筆者は、かかる運動の現場に度々足を運ぶことによって、現地社会が抱える問題や人々の意見を聞いてまわった。こうしたフィールド・ワークでは、調査に映画監督や映画祭の主催者団体のスタッフの方々に連絡を取り準備したうえで臨んだ。これに加えて、現地社会において偶然出会った人々から様々な意見や経験を聞くこともできた。

### 4. フィールド・ワークでの滞在先

筆者のサンフランシスコでの滞り場所は、本研究のフィールド・ワークを行ううえで重要なファクターの一つである。2014年2月にはじめて訪れた際は、知り合いがいなかったため街の中心部にあるホステルに宿泊した。2015年の2回目の調査では、シリコンバレーで起業を試みている若者たちが滞在しているテ

ック・ハウスを選んだ。テック・ハウスを選んだのは、当時現地に知り合いがあまりいなかったのに加えて、何よりもシリコンバレーと呼ばれる地域に集まる起業家/起業活動に興味を持っていたためである。

また、同時期に並行してサンフランシスコ州立大学、エスニック・スタディーズ研究科のアジア系アメリカ人・スタディーズの授業を度々聴講した。州立大学は、アメリカ国内で初めてエスニック・スタディーズが設置された大学である。筆者は、実際の授業を聴講し、アジア系学生と議論を交わした。それは、日本の研究室でアジア系アメリカ人について研究するプロセスとは異なり、彼らの経験から学ぶ、あるいは共に考えていく機会となった。

フィールド・ワークでは、サンフランシスコ市やオークランド市で、映画監督、アーティストや活動家たちから話を聞くなどし、徐々に交流を深めていった。2016年2月～3月にステイした場所は、知り合いの紹介をとおして知り合ったアーティスト/活動家が暮らすオークランド市にあるシェアハウスであった。シェアハウスといっても、それぞれのスタジオには台所、トイレ、お風呂が備わっており、小さなマンション全体を仲間たちで共有している住居である。

シェアハウスのあるオークランド市はイースト・ベイに位置している。1900年代初頭は港町として、カリフォルニア州随一の労働者の受け入れ地であった。そして60年代には、ブラック・パンサー・パーティーといった革命的な運動が展開され、現在に至るまで様々な闘争と芸術実践が互いに絡み合いながら刷新され続けられてきた場所である。サンフランシスコ周辺地域において都市のジェントリフィケーションが年々加速する昨今、オークランド市では、深刻なレベルでその影響を受けている。オークランド市はもともと労働者の街として発展してきた。アメリカのほとんどの都市において、人種による住み分けが社会問題になっているなかで、オークランド市は労働者階級かつエスニック・マイノリティの住民の割合が高く、経済的基盤が不安定な世帯が多い。多くの人々が、レントの急激な上昇により立ち退きを余儀なくされている。といった、オークランド市へのレント・コントロールの要請交渉や、抗議活動が継続されている。とりわけブラック・ライブズ・マターの抗議運動が盛んに繰り広げられてきた。

こうした様々な抗議活動に伴う芸術活動は、オークランドの街全体に様々なアートをもたらしてきた。街を少し歩けば、大小様々な建物の側面に描かれたカラフルなグラフィティを目にすることができる。イーストベイの玄関口にあたるウエスト・オークランド・ステーション(West Oakland Station)の駅のす

ぐ隣にある空き地には、ブラック・ライブズ・マター(Black Lives Matter)というメッセージが書かれている<sup>7</sup>。電車の乗客の視界に入るように意図的にその場所に書かれたのである。街全体として抗議活動が盛んに繰り広げられているオークランド市とその他のエリアのあいだには、地域格差と偏見が否定し難く存在している。

オークランドでフィールド・ワークをすすめるうえでイーストサイド・アート・アライアンス(Eastside Arts Alliance)は、重要な調査拠点の一つとなった。イースト・オークランド、フルーツベル/サン・アントニオ(Fruitvale/San Antonio District)地区に位置する非営利組織イーストサイド・アート・アライアンス(Eastside Arts Alliance)は、第三世界のアーティスト(Third World artists)、文化労働者(cultural workers)たちによって運営されており、地元コミュニティの組織化に尽力し、体系的な社会変革を目指した地域コミュニティの拠点としての役割を担ってきた。地域コミュニティの人々に加え、とりわけ南米出身のアーティスト/活動家たちは、頻繁にこのセンターに招かれ、共同でダンスやパフォーマンス・アートを披露している。

彼らのアート・パフォーマンスや展示は、植民地支配、奴隷制、資本主義、ジェンダー格差、ドメスティック・バイオレンス、国境問題、環境問題に至るまで多種多様な社会問題を扱っている。オーディエンスを受動的な存在にするのではなく、上演の際にはいつもオーディエンスを交えたディスカッションでの意見交換の時間が設けられており、誰もが意見を述べる機会を与えられている。また展示やパフォーマンスの料金は、決められておらず、寄付や投げ銭が採用されている。加えて、公演後には、アーティストたちによる手作りの料理が提供され、訪れた人々と共に軽食を共にするのが習わしである。かかる活動は、失業者や、貧しい子ども、ホームレスの人々に食事を提供しサポートし合うコミュニティ・キッチンと呼ばれるコミュニティ活動や60年代、ブラック・パンサーの活動で実践されていたフリー・ミール・プロジェクト(free meal project)とよく似ている。筆者にとってイーストサイド・アート・アライアンス(Eastside Arts Alliance)で活動するアーティスト/活動家たちとのシェアハウスでの共同生活は、オークランドが持つ場所性への理解を深め、人々の日々の営みや彼らの思想に触れる経験となった。このフィールド・ワークから、オークランドに暮らす労

---

<sup>7</sup> フィールド・ワークでの参与観察、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2016年2月25日。

働者階級の人々と、ベイエリアの他の地域に暮らすおおよそミドルクラスのアジア系アメリカ人との文化や思想の違いが浮かびあがった。

テック・ハウスでの滞在中、2015年3月1日、知り合いに誘われ、ベトナムの新年を祝うお祭りテト・フェスティバル(Tet Festival)に行くことになった。そこでオランダ-インドネシア系アメリカ人(Dutch-Indonesian American)の友人と知り合った。この出会いがきっかけになり、次のステイ先はイーストベイに位置するPleasant Hill(プレザント・ヒル)にある友人の家となった。そこはミドル・クラスの住宅街である。パンデミックの影響により渡米が困難になる2020年まで、この家を拠点として現地調査を継続的にこなってきた。こうして、友人の家でのこの共同生活をとおして、何よりも良かったことの一つは、友人と、さらには友人の家族との間に深い信頼関係を築けたことである。調査の方向性のみならず、調査者の人生観をも変えてしまうような出会いとなった。加えて、聞き取り調査では、通常聞き取ることが困難な深い語りや、かかる経験に伴う感情までシェアしてもらった。この調査は、調査者があらかじめ用意した問いかけに対して当たり障りのない範囲で答えるといった形式的なものに止まらなかったのである。加えて、アジア系アメリカ人の友人関係の広がりに伴い、調査対象となる場所は当初計画していた映画祭の上映会場や制作現場のみならず、日常的に開催されているアジア系アメリカ人の異業種交流会や各種パーティーへと及んでいった。アジア系の人々の社交場に入り、交流した経験は、映画祭を支える社会コンテクストを理解するうえでの助けとなった。

## 第2節. 方法論の模索 映像を観る/制作する

### 1. 「旅人」が描く民族誌

地域研究に代表されるように、長らく移住や移民に関する研究及び知識生産には、国民国家を議論の基盤とした方法が採用されてきた<sup>8</sup>。それらに対する反省、批判から、移民の送り出し国と受け入れ国、その両方からのトランスナショナルな枠組みから移民の政治経済、文化を検討する方法が採用されるようになった。例えば、東栄一郎(2014)による研究がある。東は、1868年から1945年の間に、日本人・日系人と呼ばれた人々が日本とアメリカという帝国間で政治経済、文化的な資源を獲得していった戦略を歴史として描き出した。そこから見出

---

<sup>8</sup> 地域研究に対する批判は、第2章「ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』から問う日系アメリカ人の戦争の記憶」で議論する。

されたのは、越境する人々のアメリカと日本という二つの帝国の間で形成される人種意識、ナショナリズムである<sup>9</sup>。しかしながら、いまアジア系アメリカ人や日系人について考えるときに、このような視角だけでは圧倒的に不十分である。トランスナショナルという枠組を用いるときに、複雑に絡み合う歴史的主体化のモーメントを取りこぼしている可能性は否定できないのである。

これまでとは比べものにならない速度での資本の運動、テクノロジーの発達、移動の利便化。一般的にグローバリゼーションとも呼ばれるこれらの現象は学問的基準の見直しを求めるようになったかのようにおもわれる。しかし、グローバリゼーションと名付けられた現象が突然現れたかのような新しい現象というには疑問の余地がある。富山は、ハリー・ハルトニアンがあらゆる場所と人々をのみこむ「新たな植民地主義」の拡大として地域研究が成り立たなくなっている事態が蔓延する中で、依然として地域研究が存在していると、指摘した。そして、そのような状況の中で、文化研究を営む困難さについて言及した<sup>10</sup>。これまで研究を成り立たせていた前提はすでに壊れていたのである。しかし、それでも文化の領域を確保しようとするならば、どのように思考すれば良いのであろうか。ポスト・モダン、グローバルといわれている政治経済が展開されるなかで、ジェイムズ・クリフォードは人々の生を広い意味で「旅」と捉えることによって、継続的な諸々の暴力と差異が蓄積するが状況を切り開こうと試みた。「これまでの諸前提では、真正な社会存在は、境界を画定された場所のなかで中心に位置づけられるか、位置づけるべきだと考えられた。—このような場所は「文化」という言葉がそのヨーロッパ的な意味を導きだす庭のようなものだった。」というクリフォードの指摘がある<sup>11</sup>。つまり文化という言葉は、境界が画定されることによって生じた場所（性）、その中心にはヨーロッパ性を帯びた文化があった。クリフォードは、グローバルという言葉が溢れだし、自由貿易といった経済活動の自由化とそれに伴う国民国家の衰退とそれに変わる新しい世界の到来を予期するやや楽観的すぎるともいえる評価、見通しに対して批判を試みたのである。

クリフォードが「旅」というメタファーを使って思考した試みは、ディアスポラの文化を書くという実践を切り開いただけではなく、これまでの人類学、地域

---

<sup>9</sup> 東栄一郎『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざまに 忘れられた記憶 1868-1945』、明石書店、2014年。

<sup>10</sup> 富山一郎「赤い大地と夢の痕跡」『〈複数文化〉のために ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』、複数文化研究会、人文書院、1998年、124頁。

<sup>11</sup> クリフォード、前掲書、2002年、12頁。

研究やそれに伴う移民研究が時代の権力作用と絡み合いながら生み出されてきた学問的制度や知識生産の方法に対する、反省、批判、検証、その変革を促すものとして受け止めなければいけない。人類学とその権威を保持してきた制約そのものが成り立たなくなっている状況を批判的に踏まえて、移動する人々の「旅」を「人間経験の一部と考えられることができたなら？」と問うたのである<sup>12</sup>。このクリフォードの問いかけは、これまで人々の動きを観察してきた地点、「中心」の場所を揺らがせる効果にもある。

すべての人が多少なりとも、たえず乗り換えの状態にある……。そこでは、あなたはどこから来たのですか、という問いよりも、むしろあなたはどこからどこへ行く途中ですか、という問いがふさわしいのです。<sup>13</sup>

かかる文章から見出されるべき見通しは、これまで「中心の場所」とされてきた覇権的な場所性と諸々の作用を脱中心化させていくことにある。

紛争、国際労働分業といった様々な政治経済的な要因に影響され、強制的にまたは自主的にバイエリアに移住・定住した者たちは、クリフォードの言葉をかりれば「旅人」と捉えられる。こうした人々はアメリカ国内になんらかの抑圧や制約を受け「ホームに帰属させられている」旅人なのである。本研究もまた、彼ら/彼女らを「旅人」と捉えることで、アジア系アメリカ人と規定されている人々に暴力的に与えられた人種・エスニシティのカテゴリー、そしてエスニック・マイノリティと規定する作用自体が持つ暴力に抵抗する一つの方法を模索する。

このように、人々の生を広い意味で「旅」と捉える試みは、クリフォードにおいては記述の問題と捉えられている。これまでの人類学とその実践において、インフォーマントは観察され、記述される側として措定されてきた。しかし、インフォーマント、つまりは記述される対象とされてきた人々が旅人であり書き手/記述者であるとすれば、これまでの設定に見直しが迫られる事態が生起するのである。

もし、いわゆるインフォーマントを書き手/記述者だと考えることに

---

<sup>12</sup> クリフォード、前掲書、2002年、12頁。

<sup>13</sup> クリフォード、前掲書、2002年、51頁。

よって事態が少しでも変化するならば、彼女もしくは彼を“旅人”だと考えることもまた、同じような効果をもたらすのではないのでしょうか<sup>14</sup>。

アジア系アメリカ人によって、彼ら/彼女らのために制作されたドキュメンタリー映画、そしてその作品が共有される映画祭は、旅人としての彼ら/彼女らが主体的に自らの民族誌を描き出す、そして共有するといった実践である。クリフォードの言葉「そしてもし、現代の移民の人びとが、政治経済の諸力のなかで無言の受動的な存在として現れるのではないとすれば、私たちは、広い範囲にわたる「旅の物語」に耳を傾ける必要があります（これは、ブルジョア的な意味での「旅行文学」とは異なります）。」<sup>15</sup>をかりると、同化主義や多文化主義の継続と重なり合いながらもずれてゆくディアスポラの文化のモーメントを改めて、彼ら・彼女らによる民族誌、つまりここではドキュメンタリー映画に見出していく作業をしなければならない。それは、明らかにハリウッド映画に描き出されるアジア系アメリカ人の表象を分析する作業とは異なるのである。

## 2. エスニック・マイノリティ表象に隠蔽された力学 観客たちの戦略を切り開くために

エスニック・マイノリティとメディア表象に関する研究の一つに「エンコーディング/デコーディング」論がある。この考察は、英国バーミンガムでカルチュラル・スタディーズの設立に貢献したスチュワート・ホールによって、メディアにおける表象主体をめぐるスクリーン論への批判として登場した<sup>16</sup>。ホールによる「エンコーディング/デコーディング」論は、第三世界映画が果たしている役割を、単に存在するものを映し出す装置、つまり表象の外側を変換することではなく、アイデンティティの内部から主体を新しく構築する表象の形態として捉えた。そして、大衆メディアに対してオーディエンスは単なる受動的な観客ではなく、抵抗的な主体になりうるとした。また、レイチョウは、視覚メディアとしての映画と精神意識との関連性に着目し、映画という形式が衝撃を伴う視覚媒体、内的投影を招くとし、非西洋文化のポストコロニアルな第三世界において自

---

<sup>14</sup> クリフォード、前掲書、2002年、35頁。

<sup>15</sup> クリフォード、前掲書、2002年、52-53頁。

<sup>16</sup> 新嶋良恵「マス・メディア表象研究におけるカルチュラル・スタディーズの意義-スチュワート・ホールの文化的アイデンティティ理論をてがかりに」慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 No. 64、2014年、86-87頁。

我意識を生む可能性について言及している<sup>17</sup>。その後、アメリカにおけるカルチュラル・スタディーズ及びオーディエンス理論では、期待された理論的広がりは見られなかった。また新嶋は、エスニック・スタディーズ（アジア系アメリカ人研究）において、かかるホールの理論を用いた主体化について、そのメカニズムの解明には至っていないとする暫定的な結論を下している<sup>18</sup>。

第三世界におけるイラン映画がもたらす間-文化的な効果に関わってナフィシーは、1970年代アルチュセール派（Althusserian）イデオロギー論に従った観客理論家たちが提唱する、従順な観客を想定している第一世界シネマ（First Cinema）に対して、より参加型である第三世界シネマ（Third World Cinema）は観客と交渉していると述べた<sup>19</sup>。だが、ここで問題となることは、第一世界と第三世界という区分であり、前提である。このように映画（シネマ）自体に付随する属性をあらかじめ第一世界か第三世界と画定してしまうことによって、なにかが見失われているのではないであろうか。把握されるべき状況は、もっと複雑で異種混濁的であるのではないであろうか。加えて、レイ・チョウの指摘によると、「第一世界」映画研究が「一般理論」によって理解されているのに対し、非「第一世界」映画が「特定文化」として整理されている状況は、「認識状況的序列が西洋と非西洋との対立」と重なっているとしている。続いて、「人類学の比喩的再評価が含む意味と映画の社会学的重要性とを、合体させることはまだできていない」と述べている<sup>20</sup>。

第三世界シネマ（Third World Cinema）としてのアジア系アメリカ人映画は、特定文化としてカテゴライズされてきた。かかる平面は、アメリカ社会の人種規範、すなわちマジョリティ/マイノリティという力学、エコノミーに関わる問題を併せ持っているということになる。いずれにしても重要なのは、理論か、それとも特定文化かと二元論的に還元し了解するのではなく、映画祭ではオーディエンスによる能動的な観るという行為において主体が生成されるモーメントが発生していると受け止めることである。そしてまた、映画鑑賞行為は、受動的な存在としてのオーディエンスが商品化のフローに接続されるとされてしまうと

---

<sup>17</sup> チョウ、レイ『プリミティヴへの情熱—中国・女性・映画』、（本橋哲也、吉原ゆかり訳）、青土社、1999年。

<sup>18</sup> 新嶋、前掲論文、2014年、88頁。

<sup>19</sup> Naficy, Hamid, “Receiving /retrieving Third (world) Cinema: alternative approaches to spectator studies and critical history,” R. Guneratne, Anthony and Wimal Dissanayake (ed.), *Rethinking Third Cinema*, Routledge, 2003, p181.

<sup>20</sup> チョウ、前掲載書、1998年、50-51頁。



いう一般的な想定をくいやぶり、歴史の想起をとおして自分たちの歴史的経験を吟味し、コミュニティを絶えずつくりだしていくクリエイティブで集団的なプロセスである。そこでは、人種/エスニシティ、階級、性差、宗教といった既存のカテゴリーによって自らの社会的存在をある程度規定されることを余儀なくされ、加えてアメリカ主流社会への同化や規範への同調を絶えず促されてきたアジア系のオーディエンスが、能動的に観るといふ集団的なプロセスにおいて、とりわけアジア系に押し付けられてきたモデル・マイノリティ神話の外部に自らの自我像を発見するモーメントが発生する。映画鑑賞をとおして、自らの外部、無意識の領域へアプローチし、これまでとは異なる視点で自らを省みることが可能となり、アメリカの人種的な分割統治によって不可視化されてきた歴史や自らが置かれている状況への理解が深められていく。またこうした自己理解の深化は、人種やエスニシティを超えた緩やかな連帯へと接続されていくのである。それは、運動現場にしばしばみられるようなイデオロギーが大声で叫ばれ、説教的に諭されるなかで、納得を強いられるケースとは異なり、何よりも能動的な観る行為によって他者へと連帯していくのである。

映画祭では、アジア系やアジアの歴史に関連した主題の映画が主に上映されているのだが、そこには移民/移住経験、教育、食文化、音楽、ダンス、環境問題、LGBT に関わる内容等、といったように複数のトピックが絶えず交差している。映画鑑賞とは、自分の一部と誰かの一部とが出会い、接触する機会となるのである。この意味で、映画祭は、アジア系としての緩やかな連帯がはじまるのみならず、幾つもの文化や社会問題への関心がよせられ、人種やエスニシティといったカテゴリーに必ずしも還元しきれない他者との緩やかな連帯がはじまる契機なのである。さらに集団で映画を観るといふ行為は、コミュニティ形成を促すと同時に、商品化への抗いに接続される。それは、資本のご都合主義によって、彼らのイメージが分割されて切り売りされてきた状況に対する抗いである。

加えて、アジア系の映画は、映画制作や上映費用に関わる資金面からみると、商業映画に比べ甚だしく不利な状況に立たされており、絶えず商品化へのプッシュ作用を受けているのである。例えば、コミュニティの歴史に重きを置き、コミュニティのため尽力した人物についてのドキュメンタリー映画制作のためにファンドを募るよりも、アジア系出身で国政に参加した政治家とかかる功績を讃える映画の方が、ファンドが集まりやすいのは明らかである<sup>21</sup>。一つの理由と

---

<sup>21</sup> フィールド・ワークにおける友人たちとの対話から、アメリカ合衆国、サンフランシスコ

しては、後者の方が、資金がふんだんにある企業からファンドを得やすいからである。ドキュメンタリー映画制作のためのファンド集めに労力がかかるのは、言うまでもない。映画制作において、こうした一見些細にみえる方向性の違いが、場合によってはコミュニティの方向性を左右し、長期にわたって多方面に影響を及ぼす最も重要な要素の一部であることは間違いない。なぜならば、アジア系の映画制作は、コミュニティの状況を反映する鏡のような役割であると同時に、集団での鑑賞によってコミュニティ意識の形成に寄与しているからである。映画配給により、生産と消費を第一の目的として循環させているハリウッドのような商業映画とは異なり、かかるアジア系の映画には、生産・消費の一連の循環から外れる回路が準備されているのである。換言すると、経済的価値には還元されない諸価値が増殖するプロセスの領域である。ここでいう諸価値とは、それぞれのモーメントによりグラデーションを持ち合わせ一言で言い表すことは不可能であるが、コミュニティ、家族、祖国、愛情といった人生や生活に不可欠な要素であることは言うまでもない。このような価値増殖のプロセスを持つアジア系映画には、アメリカ社会の分割統治によって、押し付けられてきた人種/エスニシティといったカテゴリーにかかる価値をも変容させていく力があるのである。

### 3. 映画制作活動とは 自らを表象する

アジア系アメリカ人によるドキュメンタリー映画制作/上映映活動とは、多木の言葉をかりると「意味の不確定な膨大な領域」から自分たちの歴史的経験を紡ぎだし、映像作品化し、コミュニティで鑑賞し経験を共有するといった一連の集団性を帯びた作業である。これは、一つにはホームにとどまることを強制され、自分たちについて語る言葉を奪われた者たちの戦術である。現実から自分たちの経験を紡ぎ出し、知を確保する作業に関わって、次の多木の言葉を参照したい。

現実の世界がある。そして私たちは、世界についていろいろなことを考え、それを言語化し、知として作りあげる。ところが、現実世界と知とのあいだはかならずしも直結していません。むしろこのあいだに意味の不確定な膨大な領域があり、この領域が「表象」の領域であると

---

コ、2019年7月20日。

考えられます。このなかにはほとんどすべてのものが入っています。<sup>22</sup>

かかる意味の不確定な膨大な領域は、置き去りにされてきた者たちの取るに足らない日常空間と重なり合っている。この取るに足らない日常を構成してきたのは、地政学的に分割されたヘゲモニーによる支配的な言説でもある。アメリカ社会において、依然として人種あるいはエスニシティといった特徴による差異化が社会的な効力として働いている状況は否めない。支配的な言説空間に抗う過程において、アジア系アメリカ人研究といったエスニック・スタディーズは、有色人種やマイノリティが置かれている不利な状況を可視化し、学問の制度へ参入させることに貢献してきた分野である。また、植民地支配、奴隷制、戦争といった国境を超えて展開してきた歴史に加え、社会福祉政策といった州レベルでの問題、マイノリティと規定された人々が日常生活の中で直面する差別、マイクロ・アグレッション (micro aggression) を含めた、マクロからミクロの視点まで幅広く包括した学問分野でもある。

60年代より盛んに行われるようになったエスニック・スタディーズにおけるアジア系アメリカ人のフィルム・アクティビズムに関する分析では、研究者が監督となり作品を作り上げ、大学で上映するといった自分自身の活動も分析対象に含んできた。こうした活動は、上で述べた映画祭と重なり合っている。研究者であると同時にアーティストとして活躍する者たちは、大学と映画祭、そしてコミュニティの架け橋となるメディアーターの役割を果たしている。多木のいう表象とは、単なる領域というよりこうした活動で生起するのではないだろうか。

また、こうした活動により生起した表象をアジア系アメリカ人の文化、すなわち特定文化の文脈に引きつけてすぐさま解釈し、囲い込むのではなく、むしろ必要なのは、支配的なナラティブが絡み合いつつも生成途中にある状況に着目し、言葉を与えていく作業こそが必要なのである。そこには、植民地支配、戦争といった地政学に関わる過去の遺産を引きずり、幾重にも重なり合う軋轢が存在していると同時にそれでも新たな局面を切り開こうとする者たちによる協働があり、開かれる社会の兆しがある。クリフォードによる、以下の文章は、かかる生成途中にある状況を言い表している。

---

<sup>22</sup> 多木浩二、今福竜太（編）『映像の歴史哲学』、みすず書房、2013年、25頁。

私たちはいまや、新たな地図の出現を目撃しているのです。すなわち、支配的な国民国家へ不均等に同化している、力強い、ディアスポラ的エスニシティが共存している境界域の文化領域です。<sup>23</sup>

また、こうして彼らが切り開く文化領域とは、アジア系アメリカ人による映像制作/上映活動による生成と重なり合っているのである。日系人でいうならば、日本にルーツを持つという点が国家暴力、戦時の強制収容の根拠としてあてがわれ、社会網 (social web) から剥ぎ取られ、戦後もなお徹底的に彼らの民族性は否定されてきた。そうした迫害、排除の対象となってきた者たちによる映画制作、自らを表象する行為とは、奪われた彼らの歴史的経験、文化、言葉を過去遡及的につくり直す作業であると同時に、何よりもそれは未来に投げかけられるべき自己像を創造するという点において極めて重要な集団的協働なのである。映画祭において集団で映像を観るという行為によって、新たに創造されたイメージが共有され、オーディエンスのそれぞれの身体に浸透するモーメントにおいてリアリティがもたらされているのである。

こうした新たな自己像の創造・共有によってもたらされる作用は、予示的政治 (Prefigurative Politics) の様相を併せ持つ。グレーバーは、予言が社会理論よりも先行して存在してきたと同時に、革命思想も批判的社会理論もその起源は予言にあるとし、何よりも新たな社会をつくりだしてきた点について以下のように述べている。

彼らは世界に関する隠された真実を啓示する人々であり、その中にはまだ実現していない出来事についての知識も含まれるかもしれませんが、必ずしもそうである必要はありません。革命思想も、批判的社会理論も、その起源は予言にあると言えるでしょう。同時に、予言は明らかに政治の一形態でもあります。それは、預言者が常に社会正義に関心を持っていたからだけではなく、社会運動、さらには新しい社会を創造したからです。<sup>24</sup>

---

<sup>23</sup> クリフォード、前掲載書、2002年、52頁。

<sup>24</sup> 筆者による翻訳。Graeber, David *Revolutions in Reverse: Essays on Politics, Violence, Art, and Imagination*, Minor Compositions, 2011, P99.

映画制作活動をとおして、過去に暴力によって迫害されてきた者たちの経験は、未来を先取りする予言となってスクリーンに映し出されるのである。映画制作に関わる者たちは、かかる意味において予言者の役割を担っているといえる。つまりは、ネガティブに脚色され、分割されたイメージを是正するだけにとどまることはなく、自分たちが欲する社会を先取りし、映像メディアにおいて表現しているのである。スクリーンに映し出される歴史的事実が真実か否かという点は、それほど重要ではない。そもそもドキュメンタリー映画にまつわる一般的な想定として、客観性や真実という理想がつきまとっているが、それは神話である。かかる映画制作において必要なのは、彼らの視点から創造し直すことにあるのだ。

#### 4. モデル・マイノリティ神話

ところで上で述べたように、アジア系アメリカ人たちが自らを表象する活動について詳しく考察するにあたって、「モデル・マイノリティ」神話に言及しなければならない。「モデル・マイノリティ」は、60年代以降主流社会からアジア系アメリカ人に向けられた「勤勉で、忍耐強く、よく働く、優秀なアジア人」といった言説、イメージであり、実際に彼らの思想や行動に影響を与えてきた。かかる言説の背景には、白人を人種ピラミッドの頂点としたアメリカ社会において、アジア系に向けられた「優秀なアジア人」というイメージに対してアフリカ系やラテン系の人々は、しばしば「福祉政策の不当受給者」というイメージが押し付けられてきたことがある。60年代に有色人種といったマイノリティと規定された人々に対して行なわれた政府の保護政策に対する、新保守主義からの批判による影響が考えられる。加えて、現在の「勤勉に働き成功を収めた、模範的なマイノリティ」言説は、60年代の大量消費社会を時代背景とし、良き消費者であるアメリカ市民が想定されている。キムは、このような社会的状況下で付与されたアジア系の位置を「バッファー・ゾーン (Buffer Zone)」と呼んだ<sup>25</sup>。

「モデル・マイノリティ」という言葉やイメージは、60年代以降にアメリカの主流メディアによって頻繁に用いられるようになった。しかしながら、「モデル・マイノリティ」言説は、60年代突如広がったというより、19世紀を通して、アメリカや英国の黒人奴隷制度、世界各地で繰り広げられた植民地支配の展開

---

<sup>25</sup> Kim, Elaine H. "Korean Americans in U.S. Race Relations: Some Considerations", *Amerasia Vol* 23, No. 2, 1997, pp. 69-78.

と密接に関わっているのである。この時期、アジア諸国を出身とする人びとの国際的人種的労働分業が促進され、彼らは労働力としてイギリス領やアメリカ領へと流入していった。ロウによると、とりわけイギリス領トリニダードでアジア人（中国人）がアフリカ人労働者の代わりに契約労働者として雇われた。アジア人（中国人）は、「英国人と黒人との人種的バリア」として想定された<sup>26</sup>。また、アメリカにおいて、反抗的な元奴隷としてのアフリカ系労働者と異なり、「おとなしくて忠実な」中国人として位置付けられていった。

中国人「苦力」は、白人の自由な市民と黒人の奴隷という人種的階層秩序の中で、過渡的な中間点という御都合主義的な形象として構築され、この時期における自由と奴隷化の間のどっちつかずな分割線を定義するためにも、また曖昧にするためにも利用されていたのである。<sup>27</sup>

上に述べた、現在の「模範的なアジア系」というイメージと、19世紀、人種的分割労働市場の形成過程にあらわれたイメージは、どちらも白人（男性）をピラミッドの頂点に措定した支配構造と、それを利用した人種的分割労働市場の形成と関わっているのである。よって、「モデル・マイノリティ」イメージの形成は、歴史的に人種的分割労働市場の形成と深く関わっていることが浮かび上がる。また、60年代以降「模範的なアジア系」というイメージが登場した背景には、「自己責任」「個人主義」といった新自由主義的な価値観と、「家族の価値」、「異性愛主義」といったアメリカの伝統的価値観のリバイバルが結節されている<sup>28</sup>。

本稿では、「モデル・マイノリティ」言説に対して、アジア系アメリカ人、日系アメリカ人のドキュメンタリー映画が生み出している抵抗について考察する。コミュニティや映画祭での上映活動を加味し、映像媒体がもたらす効果についても述べる。

---

<sup>26</sup> ロウ、リサ「グローバル近代におけるアジア系とアフリカ系のディアスポラ」浜邦彦（訳）、『ディアスポラと社会変容 アジア系・アフリカ系移住者と多文化共生の課題』（武者小路公秀監督、浜邦彦、早尾貴紀編）、国際書院、2008年、52頁。Lisa Lowe, *The Intimacies of Four Continents*, Duke Univ Pre, 2015, p24.

<sup>27</sup> ロウ、前掲載書、2008年、54頁。Lowe, *Ibid*, 2015, 27.

<sup>28</sup> 新嶋良恵「アジア系アメリカ人表象にみる新保守主義：モデル・マイノリティ表象をめぐって」、慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要、社会学心理学教育学、人間と社会の探求、No. 72、2011年、10頁。

「モデル・マイノリティ」言説に関わって、第2章ではナカムラによるドキュメンタリー映画制作に即して、日系コミュニティの若者たちの葛藤について論じる。

第3章ではドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』に即して、第二次世界大戦時の忠誠登録における徴兵拒否者の記憶に関して、忠誠登録者及び称賛されるべき二世兵士に対して忠誠登録拒否者としてのミリキタニについて論じ、この映画とミリキタニが日系としてのあるべき像に収まらないがゆえにもたらされた新たな関係性について論じる。

第4章では、慰安婦像建設の是非をめぐる政治空間と日系人兵士の歴史記憶のあり方の関連性について指摘すると同時に政治主体として被害者にも加害主体にもなり得るアジア系アメリカ人の位置を踏まえたうえで、過去の戦争記憶と戦争責任が現在のアジア系のポリティクスにいかなる影響をもたらしているかについて論じる。

### 第3節. 戦後福祉政策の隆盛とエスニック・マイノリティ

#### 1. 第二次世界大戦後における福祉政策の隆盛

1950年代から1970年代にかけての公民権運動、それに続くエスニック・マイノリティによる社会運動の背景にある社会構造の変遷をふまえたうえで、現在に至るアジア系アメリカ人の映画制作/上映活動の意義を探るために、時を第二次世界大戦後に戻さなければならない。第二次世界大戦後、北西ヨーロッパや北米では、経済復興と社会の安定を名目に、ケインズ主義的な福祉国家政策を採用した。市場経済に対する国家の介入的役割が承認され、戦後の福祉国家の枠組みが自由市場経済から総需要管理の混合需要経済へと変化した。国際的に米ソを中心とした冷戦体制が確立し、通貨管理、IMF・GATTシステムに基づく自由貿易体制が構築された。<sup>29</sup>

#### 2. エスニック・マイノリティの反応

この時期、アメリカ国内の失業率は少し回復していたが、人種的不公平や社会経済的不平等に対して、エスニック・マイノリティが強い異議を唱えていたので

---

<sup>29</sup> Jessop, Bob *The Changing Governance of Welfare: Recent Trends in its Primary Functions, Scale, and Modes of Coordination*, Social Policy & Administration Vol. 33, No. 4, 1999, pp. 349-350.

ある。エスニック・マイノリティグループの中でも程度の差はあるが、彼らの反応は、自分たちが社会福祉の恩恵を十分に受けていないことを示していた。社会福祉は彼らの要求に応えられていなかったのだ。なぜならば、この時期の福祉国家政策は、まずもって国家と国家の経済の安定を目的としていたからである。ボブ・ジェソップは以下のように述べた。

KWNS（ケインズ主義福祉国民国家）は、歴史的に特異な（そして社会的に構築された）マトリックスの中で経済・社会政策が追求される限りにおいて、国民的であった…。地方や地域の国家は、主に国家レベルで組み立てられた政策の中継役として機能していた。第二次世界大戦後に設立された様々な国際レジームは、主に国民経済と国民国家の安定を取り戻すことを目的としていた。国家は、市場原理の作用を促進し、修正する役割に加えて、市民社会を形成し、市民が持つアイデンティティを形成する上で支配的な役割を担っていた。<sup>30</sup>

このように、政府による KWNS の政策は、大量消費をとおして国民国家、国民経済という枠組みの強化、そして市民社会並びに善良なアメリカ市民のアイデンティティ形成を促進させようとした。当時アメリカ社会でのエスニック・マイノリティの社会運動の盛り上がりは、これに反発した人々の意識の表れを反映していたのである。公民権運動に触発され、アジア系アメリカ人は社会的正義を掲げ、意見を表明し始めた。大学キャンパスでの活動、コミュニティでの自助グループの形成、労働者の組織化といった様々な方法での団結をすすめ、路上での大規模なデモ行進を展開させた。かかる抗議活動は、これまで抑圧されてきた意識、日系人でいうならば強制収用所の経験によってもたらされた二流市民意識を打ち破るべく展開されていった。世代間にあったヒエラルキーを払いのけるように再組織化されたコミュニティにおける団結、自分が何者であるか考え、表現しはじめた結果として、アジア系アメリカ人による芸術・文化は繁栄した。この点については、第2章で詳しく述べる。

映画制作/上映運動を含む 60 年代のアジア系アメリカ人の運動は、現在もコ

---

<sup>30</sup> Bob Jessop, “The Changing Governance of Welfare: Recent Trends in its Primary Functions, Scale, and Modes of Coordination”, *Social Policy & Administration* Vol. 33, No. 4, 1999, pp. 349-350.



コミュニティの活動として継承されている。マエダは、アジア系アメリカ人の運動を再考して、以下のように述べている。

アジア系アメリカ人の運動を再考するという事は、何よりもまず、その中心的な枠組みが公民権ではなく、権力と自己決定の問題であることを確認することである。アジア系アメリカ人の公式的な平等権を追求するだけではなく、人種差別や経済的搾取をなくすために、社会を根本的に再構築することが求められたのです。<sup>31</sup>

「自己決定」と「コミュニティ・コントロール」は、黒人が自分たちのコミュニティや生活に影響を与える機関で権力を握ることを求めたものです。<sup>32</sup>

アジア系アメリカ人の運動は、アフリカ系アメリカ人の運動から影響を受け、アメリカ国民としての公民権よりも、民族自決において人種主義と経済的搾取を根本から終わらせようとした運動であった。つまりは、法的権限を超えて、人々が平等に暮らすことができる社会を構想していたのである。例えば、当時ブラック・パンサー・パーティの影響を受け、貧しいアジア系アメリカ人や他のエスニック・マイノリティをケアするための「サーブ・ザ・ピープル・プログラム (Serve-the-People programs)」が設立されたことは注目に値する。上で述べたように、現在においてもなお60年代の活動は引き継がれており、オークランドの文化活動現場で、食事提供が続けられている。マエダは以下のように述べている。

サーブ・ザ・ピープル・プログラムは、アジア系アメリカ人のゲッターに必要な社会サービスを提供するものでした。しかし、これらのプログラムは、単にサービスを提供するだけではなく、アジア系アメリカ人の貧困層に対して、既存の政治システムが彼らのニーズに関心がなく、提供できないことを示し、彼らが自分たちで問題に対処するのを助け、

---

<sup>31</sup> Maeda, Daryl Joji, *Rethinking the Asian American movement*, Routledge, 2011, p4. 筆者による翻訳。

<sup>32</sup> Maeda, *Ibid*, 2011, p6. 筆者による翻訳。

革命の必要性を指摘することを目的としていた。<sup>33</sup>

かかるプログラムの実践は、州や地方自治体といった既存の政治システムが彼らを助けはしないという事実気づかせるという点において、重要な起点となったことがわかる。繰り返すが、当時の福祉政策は、エスニック・マイノリティを対象としていなかったのである。加えて、アジア系コミュニティに影響を与えてきた活動家の一人、グレース・リー・ボグズ<sup>34</sup>はドキュメンタリー映画『アメリカン・レヴオリューションナリー：ザ・エヴォリューション・オブ・グレイス・リー・ボグズ』(*American Revolutionary: The Evolution of Grace Lee Boggs*)のなかで、1960年代の運動について次のように述べた。

ブラックパワー活動家は、黒人が長年にわたって米国の革命闘争の先頭に立ってきたことを認識しています。彼らの闘争は、経済発展のためではなく、人間同士のより良い関係のために行われてきたからです。<sup>35</sup>

既存の経済的価値に還元できない人間関係の構築は、何よりも人々による革命的闘争である。当時のエスニック・マイノリティ運動は、経済問題そのものよりも「セルフ・エンパワメント (self-empowerment)」に重きを置いていた点において、マエダの示唆と同じである。また、エスニック・マイノリティに課せられた負担、不平等は、単一の要因に還元されるものではなく、人種差別、経済的搾取、植民地主義、性差別など、複数の要因と暴力が絡み合っ構成されている。複数の要因によってもたらされた抑圧状況に対抗するにあたって人々は、他の抑圧された者たちとの連帯および、多分に問題がある既存の社会構造とは別の社会に向けた組織化を選んだのである。

### 3. 草の根運動から NPO へ

---

<sup>33</sup> Maeda, *Ibid*, 2011, p52. 筆者による翻訳。

<sup>34</sup> Grace Lee Boggs (1915.06.27~2015.10.5) は、中国系アメリカ人活動家、哲学者、フェミニスト。アジア系アメリカ人運動の中心人物の一人として活躍し、没後においてもなお影響を与え続けている。韓国系アメリカ人、Grace Lee 監督による Grace の半生とデトロイトでの社会運動を記録したドキュメンタリー映画、*American Revolutionary: The Evolution of Grace Lee Boggs* (2013) がある。

<sup>35</sup> 筆者による翻訳。Lee, Grace *American Revolutionary: The Evolution of Grace Lee Boggs*, Cherry Sky Pictures, 1 hour 22 minutes, 2013.

第二次世界戦後、冷戦体制の確立に伴い、ジョンソン政権は、福祉国家として「偉大な社会」、「貧困との闘い」をスローガンに掲げ、公民権法案の成立、社会保障制度の拡充を目指した。しかし、かかる政権は、社会福祉費やベトナム戦争の軍事費による財政圧迫に反対するサイレント・マジョリティの台頭によって勢力を失っていった。政治経済的な目安としては、保守勢力の勝利といわれている。保守勢力の勝利と呼ばれているこの時期に、一体どのような社会変容がおきたのであろうか。政治経済が急速に新自由主義へと傾いていった時期、とりわけサンフランシスコ市では、非営利団体（NPO）が多数設立され、公共部門の行政サービスの多くを民間組織や非営利団体（NPO）が担っていった<sup>36</sup>。すなわち、このように保守的勢力が勢いづくなかで、公共財の民営化が推し進められていったのである。かかる新自由主義の漸進と商品化の流れは、映像制作/上映運動に影響を及ぼした。60年代、アメリカ政府の福祉政策の対象にならなかった者たちは、コミュニティの草の根の活動として映画制作/上映活動を開始し、非営利団体を設立し始めた。

#### 4. 商品化への抗い 諸価値の領域を切り開く

アンジェリスによれば、資本の原始的蓄積の特徴として指摘された囲い込み（enclosure）は、資本の連続的な出来事である<sup>37</sup>。囲い込みとは、経済的価値増殖によって、あらゆるものを民営化・商業化することである。金融資本主義において顕著となってきた囲い込みによって、ありとあらゆる方法で文化的形態、知的財産、地球環境コモンズに至るまで、商品化がすすめられている。ハリウッド映画や公共放送において、誤解を招くようなステレオタイプ化されたイメージが生産され、エスニック・マイノリティの存在、文化や歴史は商品化され、文化的搾取の対象とされてきた。またそれは、彼らを彼らたらしめている存在、身体が暴力的に剥ぎ取られ、圧倒的不平等なアレンジメントによって分割、再分配されたイメージがスクリーン上に流用された事態である。

---

<sup>36</sup> 「サンフランシスコ市では、1976年11月2日に行われた住民投票の結果、同市の公共部門における諸行政サービスの多くが民間組織へ委託されるようになった。これにともない、公的サービスの供給を請け負う側となったNPOが、都市政策の重要な主体として影響力を有するようになった。」小田隆史「サンフランシスコ市における移民街区の保全と再建のガバナンス-制度と主体の変化に着目して」、季刊地理学 62巻1号、2010年、12-27頁。

<sup>37</sup> Angelis, Massimo De *The Beginning of History: Value Struggles and Global Capital*, Pluto Press, 2007, p82.

このような抗い難い流れのなかで、アジア系アメリカ人による映画制作/上映運動は展開されてきたが、アメリカ国内のエスニック・マイノリティのみならず、60年代、世界のあちこちで、抑圧された者たちによって始動した「第三世界映画」というプロジェクトは、映画制作/上映活動と革命活動が重なり合う領域において活動し始められた。例えば、フランスでは、ジガ・ヴァルトフ集団が戦闘的映画という概念を提唱した<sup>38</sup>。こうした活動の根底には、抑圧、疎外されてきたエスニック・マイノリティによる運動は「主体になれない。そうであるがゆえに生成能力に開かれている」という想定がある<sup>39</sup>。さらには、「いわゆる内部と対立する外部ではなく」、つまりはマジョリティ対マイノリティの構図や多文化主義の一部には還元不可能である彼らの存在には、行動の領域内部において外部を生成していく可能性があるとした。それは、自らを表象していく映像制作のプロセス、集団で映像を観るというモーメントにおいて生起しているのである。彼らの活動が展開されている限り、かかる可能性は生成中である。主体として認められない者たちによるかかる活動は、諸価値をもたらし、市場と国家を軸として稼働している労働価値を変容させる。つまりは貨幣的価値に還元できない労働の領域が生成されていると考えられる。

60年代に草の根の活動として開始されたこうした一連の映画制作/上映活動に関わる文化・芸術活動は、ネオリベリズムの漸進により、さらなる商品化への圧力がかかるようになった。よって、かかる活動を社会運動として捉えるのみならず労働と不可分な活動として捉える必要がある。これまでのアジア系アメリカ人のシネマや文化活動に関する研究は、その多くが表象分析と社会運動の側面に焦点が絞られてきた<sup>40</sup>。しかし、本研究では、労働、資本との関係性を射程に入れて考察する。つまり、文化・芸術活動に関する貨幣価値に還元される/されない領域にまたがった労働の領域を問う。

労働と不可分な関係にある文化・芸術活動を考察するにあたり、芸術と政治と

---

<sup>38</sup> 鶴飼哲、田崎英明、平沢剛、「ドゥルーズ『シネマ』をめぐって」、萱野稔人（編集）『Vo102 ベーシック・インカム/ドゥルーズ『シネマ』』、以文社、2007年、134頁。ジル・ドゥルーズ（原著）、宇野 邦一、江澤健一郎、岡村民夫、石原陽一郎、大原理志（翻訳）、『シネマ2時間イメージ』、法政大学出版局、2006年。

<sup>39</sup> 鶴飼哲、田崎英明、平沢剛、前掲載書、2007年、p135-136。ジル・ドゥルーズ（原著）、財津理、齋藤 範（翻訳）、『シネマ1運動イメージ』、法政大学出版局、2008年。

<sup>40</sup> 例えば、Xing, Jun *Asian America Through the Lens History, Representations, and Identities*, AltaMira Press, 1998 や、Hamamoto, Darrell Y. and Liu, Sandra *Counter visions: Asian American Film Criticism, Asian American History & Culture*, Temple Univ Press, 2000 がある。

社会構造の観点を織り交ぜた視点が必要となる。グレーバーの分析によると、現代アートの世界において、少数の天才的芸術家によって創作された希少的価値が付いた芸術作品は、ヒエラルキーをつくりだし、高値で取引されてきた<sup>41</sup>。その一方で、コミュニティに基盤においたエスニック・マイノリティ、アジア系の文化・芸術活動は、「自発的であり、誰もが参加でき、皆アーティストになれる」という前提が共有されてきたと同時に、市場のロジックとは相入れないとみなされる傾向にあった。というのは、60年代からアジア系アメリカ人の芸術活動は、資本主義国家と人種差別に抗する運動として位置付けられ、アイデンティティを求めた人々の主体的なコミュニティを基盤にした草の根のボランティア活動として捉えられてきたためである。当初、現在のような運営基盤である非営利組織はまだ存在しておらず、小さな集団で活動していた。例えば、現在のキャム（CAAM, Center for Asian American Media）の前身であるナッタ（NAATA, National Asian American Telecommunications Association）は、バークレーで、ロニー・ディング（Loni Ding）と地元のアーティスト、活動家、数人での寄り合いから始まった<sup>42</sup>。当時の活動は、スポンサーからの圧力や要求に合わせる必要性が極端に少なかったのである。かかる意味において当初の活動は、グレーバーが提唱するコミュニズム、すなわち「各人はその能力に応じて貢献し、各人にはその必要に応じて与えられる」という原則に従って人々が行動する状況に限りなく近かったと考えられる<sup>43</sup>。労働領域と不可分な関係を持ちつつも、協働において稼働している現在の映画制作/上映活動の状況について、参与観察か

---

<sup>41</sup> Dubrovsky, Nika and Graeber, David *Another Art World, Part 1: Art Communism and Artificial Scarcity*, 2019.

<https://davidgraeber.org/articles/another-art-world-part-i-art-communism-and-artificial-scarcity/>

<sup>42</sup> 現在のロスアンゼルス・アジア・パシフィック・フィルム・フェスティバル（Los Angeles Asian Pacific Film Festival）を主催するビジュアル・コミュニケーション（Visual Communications）は、ロバート・ナカムラ（Robert Nakamura）、デュアン・クボ（Duane Kubo）、アラン・オオハシ（Alan Ohashi）、エディ・ウォン（Eddie Wong）によって始められた活動にその前身があった。<https://caamedia.org/history-timeline/>

<sup>43</sup> グレーバー、デヴィッド『負債論』、酒井隆史（監訳）、（高祖岩三郎、佐々木夏子訳）以文社、2018年、142頁。Graeber, David *Debt: The First 5000 Years*, Melville House, 2011, 94-95. 共産主義とコミュニズムを同一視してはならない。「コミュニズムは強力な感情的反応を呼び起こしうる言葉であって、もちろん、主な理由は、それがコミュニズム[共産主義]体制と同一視されてしまう傾向にある。ソヴィエト連邦およびその衛星国家、そして今日でも中国やキューバを支配する諸々の共産党が、じぶん自身の体制を「コミュニスト[共産主義的]と規定したことがないのは皮肉である。それらの自己規定は「社会主義」である。」

ら得たデータに即して、第1章で詳しく論じる。

## 5. 生き残るための戦略

容赦のない文化生産を取り巻くネオリベリズムの漸進は、コミュニズムに基づき組織化されていた映画制作/上映活動にいくつかの変更を迫っていった<sup>44</sup>。換言すると、アジア系の活動は、徐々に買収、商品化されていく側面が増加したのである。かかる事態を反映して現在では、映像制作/上映活動のために必要な資金をコミュニティの寄付ではもはや十分に賄えないため、資金をスポンサー企業等に頼らざるをえなくなった。こうした変更に伴い、草の根のボランティア活動は、非営利団体へと強制的にあるいは戦略的に変貌することによってその生き残りの道を切り開いてきた。現在のアジア系の映画制作/上映活動には、草の根の活動から継承した要素を多分に見受けることができるが、また同時に商品化のプッシュ力は、彼らの活動の隅々に影響を与え、変更を余儀なくされている事実を否定することはできない。また、一部の天才と呼ばれている芸術家を除くと、ポスト・フォーディズムの経済状況からいって芸術家はプレカリアートの状況に置かれている。換言すると、彼らの芸術・文化活動に対して、資本がさらに包摂と商品化を漸進させており、結果として、抵抗運動と労働過程が不可分の状況に置かれていると了解せざるをえない。この状況に対し、ポスト・フォーディズム的な社会状況と労働の質的変容を考慮すると、芸術的抵抗運動として位置付けられた従来の研究視角では十分とは言えない。ここから導き出すべき議論展開は、かかる芸術活動を運動の側面からのみならず芸術的労働として捉え、考察することである。

## 6. 芸術的労働としての映画制作/上映活動

現在のアジア系アメリカ人による芸術的労働としての映画制作/上映活動は、金融資本の包摂に抗うと同時に資本を戦術的に利用して、自分たちの文化を生産しようとする政治・経済的闘争の側面を持ち合わせている。彼らの文化生産は、資本による包摂を伴いながらも、解釈労働 (Labor of Interpretation) をとおして生産様式の変容をもたらす可能性に開かれるが故に、社会変革の可能性を担っている。ポスト・フォーディズム的生産様式に関

---

<sup>44</sup> ここでいうコミュニズムとは、いわゆる共産主義ではなく、グレーバーが提唱するコミュニズムを意味する。

する議論に関わって、映画制作/上映活動に関わる芸術的労働を解釈労働の視角から捉える。解釈労働とは、暴力を基盤とした構造的な不平等な社会において、被支配層にいる人々が支配者たちについて想像し、気を遣うことが強制される労働形態を示す<sup>45</sup>。かかる労働現場では、常に想像力の偏極構造が再生産される。加えてこうした環境下での労働は、主観的経験として疎外がもたらされる。典型例としては、ケアを中心とする女性が担ってきた労働の多くは多大な想像力を必要とするが、労働として必ずしも認められず、しばしば無賃金労働が強いられてきた。そこで本研究では、主流社会によって商品化、ステレオタイプ化された自己像の描き直し、歴史の再解釈としての映画制作活動を想像力と創造力を伴った解釈労働として芸術的労働の視点から捉える。通常、被支配者であるアジア系アメリカ人は、常に支配者について解釈させられる立場に置かれるが、反転して、映像制作/上映活動をとおして、被支配者が抑圧・疎外され押し付けられてきた自己像と、忘却される可能性を伴った歴史経験を再解釈する。かかる再解釈行為は、彼らの民族性についての再価値付けの可能性を伴っており、資本のロジックによって階層化された美的価値を軸にした現代アートとは異なるオルタナティブな価値付けを可能性とするのである。またこうした映画制作/上映活動は、社会運動と労働の領域の側面を持ち合わせており、必ずしも経済的価値に還元されない領域、つまりは歴史の再解釈、人間関係の構築、及びコミュニティ形成をもたらす、既存の労働の概念を問い直すと同時に、かかる領域を押し広げるのである。労働の概念についての問い直しについては、第1章で論じる。

## 7. 賠償政治

新自由主義の広がりに伴う急速な非営利団体化の他に、アジア系アメリカ人の文化活動を考えるための前提として、賠償政治の広がりについて言及しておかなければならない。依然として戦争や紛争が各地で繰り広げられるなかで、近年、「賠償政治」という言葉が広まりをみせている。背景の一つとしては、国際社会や国連などによるナチスドイツをめぐる戦後補償を中心とした働きかけにとともに、過去の戦争による被害への賠償、補償への関心が高まっていったことがある。とりわけアメリカにおける賠償政治の系譜を政治経済的方面からの

---

<sup>45</sup> グレーバー、デヴィッド『官僚制のユートピア テクノロジー、構造的愚かさ、リゼリズムの鉄則』、酒井隆史（訳）、以文社、2017年、94-96頁。

考察を試みたトーパーは、「賠償政治の拡大は一方では多文化主義やアイデンティティ政治の拡散、他方では犠牲者の権利に対する関心の拡大と、多かれ少なかれ時を同じくして起こった。これらの比較的新しい公的秩序のパラダイムが挑戦した理念は、前世紀半ばの先進工業社会におけるフォード主義的生産工程と手を携えて歩んだ、分節化されていない大衆という理念であった。それに対して、賠償政治は特別の配慮と関心に値する集団としての抑圧された犠牲者の先頭に立った。」と、述べている<sup>46</sup>。換言すると、フォード主義的階級政治への理想から、これまで権利を剥奪・侵害されてきた人々へ、かかる政治的関心が移ったのである。また、過去を問い直す賠償政治の広がりに関わる時代背景には、世界各地でのホロコーストの補償に対する関心の高まりがあった<sup>47</sup>。フォード式生産システムにかげりがみられ始め、脱工業化社会へと傾き出すなかで、一見近い未来に楽観的な見通しをもたらす賠償政治と多文化主義の広がり、アメリカのアジア地域における冷戦体制の確立・維持と重なり合ってきた。アジア系アメリカ人のリドレスを求める動きは、アメリカ国内にとどまらず、日本を含めた国家や国外の企業に対しても向けられるようになった。またこうした動きは、アメリカによるアジア地域支配に新たな関係性を生み出すと同時に、アジア系アメリカ人に新たな政治性をもたらすことになった。

60年代のアジア系アメリカ人運動の目的の一つは、ハイフン付きのアメリカ人、すなわちアジア系アメリカ人の主体性をアメリカ社会で獲得することにあった。同じく60年代から70年代にかけて、運動の高まりを機に日系アメリカ人たちは、戦時の強制収容に対する補償運動を展開していった。かかる運動の公的な結果として1988年、戦時の日系人強制収容は、アメリカ憲法上の違反に当たるとして賠償・補償に関わる「市民的自由法」を勝ち取った。リドレス請求にあたって、日系人たちは戦略として、日系人が被った被害よりも、アメリカ憲法上の違反をリドレス請求の根拠として押し出した。トーパーの指摘によれば、日系アメリカ人への戦後補償は、アメリカの賠償政治の歴史を振り返ると例外的である。1988年に制定された「市民的自由法」には、「日系アメリカ人」とい

---

<sup>46</sup> トーパー、ジョン『歴史的賠償と「記憶」の解剖 ホロコースト・日系人強制収容・奴隷制・アパルトヘイト』（藤川隆男、酒井一臣、津田博司訳）、法政大学出版社、2013年、27-28頁。

<sup>47</sup> ホロコーストや第二次世界大戦の殺戮への対応として、国連によって人権の理論的枠組みが見直されるなど国際的な働きかけが活発化した。トーパー、前掲載書、2013年、78頁。



う言葉が一言も入っていなかったのである<sup>48</sup>。これは、実質的には日系人を強制収容させた「大統領行政命令 9066 号」に、日系人という言葉が何も記載されてなかった事実を想起させる。これらの事実は依然として、エスニック・マイノリティに与えられている権利は、アメリカ憲法、法律の内部にはないことを示唆している<sup>49</sup>。

アメリカ政府から日系人に対するかかる法的手段での解決は、何をもたらしたのであろうか。80 年代、シアトルでの日系人補償運動に関する調査を行なった竹沢は、当時主流派であった同化論的展望に反して、運動を遂行するなかで日系としてのエスニシティが強化されたと結論づけた<sup>50</sup>。では、補償運動での勝利は、他人種との関係において、どのような効果をもたらしてきたのであろうか。フジタニは、アジア系に向けられた「模範的マイノリティ」言説は、黒人やその他の有色人種の活動の抑制に利用されたと指摘した<sup>51</sup>。フジタニの指摘は、多文化主義と賠償政治が絡み合う状況で、かかる政治的采配が不均等に行使されていることを示唆する。この場合、「模範的マイノリティ」言説と賠償政治の結節点には、人種分割支配へ向かうベクトルが準備されていたのである。

バイエリアに住むアジア系アメリカ人にとって慰安婦、強制収容所の経験といった第二次世界大戦時における被害と賠償の問題を考えると、賠償政治の広がり、どのような影響をもたらしたのであろうか。先ずもって、賠償政治の広がり、もはやこれまでのアメリカ国内のアジア系アメリカ人のポリティクスは限界であることを示した。そして、新たな局面は、アジア系アメリカ人の位置やかかる知識形態に対して見直しを促した。アジア系アメリカ人は、アメリカ国内ではエスニック・マイノリティとして従属的な位置であると同時に、アメリカ人でもあるというその存在の政治的位置の困難さが伴う。中村は、かかる主体性の困難さについて以下のように述べている。

アメリカ・マイノリティの二重性、すなわち彼・彼女らがアメリカ国内の被差別主体である一方で、他世界との関係性では加害主体にもな

---

<sup>48</sup> トーピー、前掲載書、2013 年、132 頁。

<sup>49</sup> 本稿第 3 章において、強制収容の記憶と戒厳令状態のなかでの抵抗について論じた。

<sup>50</sup> 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷』、東京大学出版会、1994 年、240-241 頁。

<sup>51</sup> Fujitani, Takashi, White, Geoffrey M., Yoneyama, Lisa *Perilous Memories: The Asia-Pacific War (S)* (North Carolina: Duke University Press 2001, 251-255.

りうること。<sup>52</sup>

アメリカ国内でのアジア系の政治経済的影響力の上昇と、冷戦の終結、不均等な同化圧力、加速するグローバリゼーションとそれに抗する流れといった錯綜するなかで、アジア系アメリカ人が自分たちの歴史を想起することによって如何なる政治性を持ち込むのであろうか。第4章では、とりわけ慰安婦問題と強制収容所をめぐって、第二次世界大戦の戦争経験が戦争責任として再び問われたアジア系アメリカ人社会の政治的空間に着目し、考察をおこなった。

#### 第4節. エスニシティ

##### 1. エスニシティの概念をめぐって

これまでのエスニシティの概念をめぐる議論において代表的なのは、言語や宗教を指標にした実体論 (substantialism) による客観主義的アプローチと、いわゆるエスニック・アイデンティティ概念に帰着した関係論 (relationalism) による主観主義的アプローチのふたつである。前者の議論は、指標の設定の恣意性、後者の議論ではアイデンティティ意識の状況依存性が問題視されてきた。かかる理論的分岐を受けて福島は、そもそもエスニシティを一般化する試みは理論的誤謬であるとし、エスニシティが問題となるさい、つまりは民族的差異が実態を伴った政治、軍事的な対立や迫害が起こるプロセスについて、「様々な差異の中の特定の差異がアクティベートされ、ハイパーサイクルの中に巻き込まれる過程によって生じるものである」と述べている<sup>53</sup>。しかしながら、もっと根の深い問題は、決定的な軍事衝突や暴力が引き起こされる場合以外であっても、エスニック・マイノリティに差異が知覚される場合には絶えずかかる暴力を感知せざるおえないところにある。つまり、少数派エスニック・マイノリティと規定されてきた者たちに向けられた暴力は、ある特定の状況・期間に関わらず、潜在的に潜伏していることを見逃してはならない。9.11 やパンデミックといった社会的危機に顕著に現れた差別やヘイトクライムは、潜在的に社会に蓄積された

---

<sup>52</sup> 中村理香『アジア系アメリカと戦争記憶—原爆・「慰安婦」・強制収容』、青弓社、2017年、119頁。

<sup>53</sup> 福島真人「差異の工学-民族の構築学への素描-」、東南アジア研究 35 卷 4 号、1998 年、302-305 頁。ここでいう「差異のアクティベーション」とは、「つまりある問題が生じたとき、その問題の原因が数ある差異に由来するのではなく、ある特定の差異に由来するのだと、回帰的に指摘される過程である。」

暴力が実態を持った差別や偏見として社会的現実において現象化した結果である<sup>54</sup>。遡及的に80年代の日系人強制収用所に対する補償運動について考えると、かかる運動の法廷での勝因は、戦時の国家的暴力の過ちを憲法違反として認めさせた点にある。しかしながら、この勝利は、国家的暴力や制度的差別（institutional racism）を社会の根底から取り除く保証をすることでは断じてないのである。もし、解決済みの過去の事象として捉えるならば、それはいつも傍にある暴力を見逃してしまうことに他ならない。換言すると、国籍、市民権の取得などといった法的権利や制度の獲得は、エスニック・マイノリティが標的となる潜在的な暴力の消失を意味しない。重要なのは、法や制度を超える暴力が常態化していることを認識、問題化することである。例えば第二次世界大戦下における日系人強制収容所の経験を、戦時のヒステリーとして了解してはならないのである。そのように了解してしまうことは、かかる暴力の脅威を現在から切り離し、過去のある時期の出来事として区切ってしまうことにつながりかねない。平時においても、かかる暴力を感知せざるをえない者たちは、常に自分が何者であるか問われる状態に押し留められているのである。

ロサンゼルスでフィールド・ワークを実施した際、日系アメリカ人の女性の自分の歴史や自分を取り巻く社会について語る言葉は矛盾に満ちたものであった。彼女が発する、自己にまつわる「日系人はね」、「アメリカ人はね」、「日本人はね」という錯綜した語りは、日系人に関する知と認識のあり方の再考を促す。「日系人はね」と発せられる時の日系人とは一体誰のことで、そのすぐ後で続けられる「アメリカ人はね」という時の「アメリカ人」とは一体誰のことなのだろうか。その時、語る「私」はどのような位置にいて、日系人、アメリカ人、日本人といういくつかの分類を引き受ける私という主体はどのような言葉で説明されるべきだろうか。この彼女の矛盾した語りを、自己の所属について二つの国の間で引き裂かれるアイデンティティ・クライシスなどの説明で終わらせることはできない。主観主義的アプローチによる状況依存的なエスニック・アイデンティティとして了解し、終わらせるわけにはいかないのである。これは暴力が潜在的に待機する社会において彼らが自らや、自らを取り巻く社会について、いかなる認識を持つかに関わる問いであり、従って、その認識を構成する知の問題であ

---

<sup>54</sup> 昨年、2020年と比べると、2021年ロスアンゼルスにおいてアジア系へのヘイトクライムは76%増加したという。 <https://www.latimes.com/california/story/2021-10-20/1-a-county-sees-significant-increase-in-anti-asian-hate-crimes>

る。映画制作/上映活動において、アジア系アメリカ人は、歴史経験を吟味するプロセスをとおして、自己理解を深める効果をともなう。かかるプロセスには、主観主義的アプローチによる状況依存的なエスニック・アイデンティティでも、客観主義的アプローチのいずれにも完全に当てはまらないエスニシティの領域が確保されると考えられうる。

## 2. エスニック・スタディーズ

ところで知の問題に関わって、アジア系アメリカ人に関する歴史、文化は 60 年代にサンフランシスコ州立大学においてエスニック・スタディーズが設置されるまで、公教育のプログラムから除外され、国家にとって都合が悪く、忘却されるべき歴史として扱われてきた。設立から 50 年以上経過した現在においてもなお、かかるプログラムの存続はしばしば危機に直面している。2016 年 2 月 26 日、サンフランシスコ州立大学側はエスニック・スタディーズへの来年度からの予算削減案の表明に対して、学生ユニオンを中心とした抗議活動が展開された。以下は 2016 年 2 月 26 日、サンフランシスコ州立大学でおこなわれた抗議運動、エスニック・スタディーズ・スチューデント・プロテスタント・フォー・バジェットカット・(Ethnic Studies Student Protestant for Budget Cut at San Francisco University 25, Feb, 2016) のフィールド・ノートである<sup>55</sup>。

筆者は、友人のフェイスブック (Facebook) での投稿を読み、ディフェンド・エスニック・スタディーズ・アット・エス・エフ・ステイツ (Defend Ethnic Studies at SF State!) が、行われることを知った。予算削減についての話は、当大学、エスニック・スタディーズで教鞭を執るウエスリー先生から聞いていたが、このミーティングが行われることについては知らなかったため、投稿を読んですぐに翌日の朝の予定を変えた。9 時から始まるので、オークランドの友人の家から 2 時間ぐらいかかるであろう。ベイエリアでは、移動に時間がかかる。9 時前に到着できると思ったが、デイリーシティからのシャトルバスが来なくて、到着するとすでに 9 時を過ぎたところだった。

ディフェンド・エスニック・スタディーズ・アット・エス・エフ・ステイツは、サンフランシスコ州立大学、セブン・ヒルズ・コンフェレンス・センター (Seven Hills Conference Center) で行われるようだが、詳しい場所がわからなかった

---

<sup>55</sup> フィールド・ワークでの参与観察、サンフランシスコ州立大学、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2016 年 2 月 25 日。

ので、とりあえず大学についてエスニック・スタディーズの建物に行った。建物の玄関にはとっても大きな黄色の張り紙があり、そこにはエスニック・スタディーズの建物からセブン・ヒルズ・コンフェレンス・センター (Seven Hills Conference Center) への行き方がカラフルなポスターとカラーチョークで書かれていた。大雑把な地図で、州立大学に慣れていない私にとってはさっぱりわからなかった。これからプロテストに行く学生と少し話し、あとを追ったが、それらしき建物はなかった。諦めて、別の方向に向かった。エスニック・スタディーズの建物の付近から、よく見ると地面にカラー・チョークでセブン・ヒルズ・コンフェレンス・センター (Seven Hills Conference Center) への道筋が案内されていた。そこには、道順だけではなく、様々なメッセージが書かれていた。

「私はエスニック・スタディーズを信じています (I Believe in Ethnic Studies)」、「3月の連帯 (March in Solidarity)」、「エスニック・スタディーズを救え (Save Ethnic Studies)」、「1968年を覚えていますか？過去から何も学びませんでしたか？ (I Remember 1968 Did We Learn Nothing FROM Our Past?)」 「愛され、誇りに思う (Loved & Proud)」、「ヘリテージ=アイデンティティはエスニック・スタディーズを救う (HERITAGE=Identity Save Ethnic Studies)」

また、エスニック・スタディーズ・ミーティングと書かれたポスターが道標として貼られていた。

会場には、予想していたよりもずっとたくさんの方がすでに集まっていて、メインの会議室から人が溢れていた。人混みを掻き分けて、会議室の窓際まで行った。窓は開けられていて、そこから会議室の様子を覗き込むことにした。会議室は学生で満杯であったが、それぞれが一人でも多く入れるように空間を詰め、工夫していた。会議室には無駄なスペースがほとんど残されていないかのように、学生たちが見事に収まっていた。立ち見をしている学生のうち何人かは、マイノリティ・コンシャス・マター (Minority Conscious Matter) と書かれたボードを持っていた。学生は、予算削減に反対するメーリングリストに登録を呼びかけたり、このプロテストに関するビラを配ったりしていた。

アジア系、ブラック、ラティーノの学部生、院生がマイクを持ち、学長たちに向けてステイメントを述べていった。一文ごとに掛け声や拍手が響き渡る。こんな連体感のある集会に参加したのは初めてだった。会場の外で、少し騒がしい際には、注意する者もいた。どのくらい前もって抗議の用意がされてきたのかはわ

からない。制限された時間、空間のなかで、一つの目標に向かって時間と空間を作り上げているのである。拍手やリアクションは、スピーカーへの応援であり、またスピーカー以外の参加者のできる限りの力添えであり、大学の方針に反対する表現方法の一つである。

「私たち、学生はみている。教員たちはみえていますよ。コミュニティはみえていますよ。皆があなたたちをみえていますよ。」というコールが何度も繰り返された。学長やアドミニストレーターの入退場の際は、集まった者たちが並びはじめそこに列を作り出した。退場のさい、「恥を知れ！恥を知れ！恥を知れ!…」というコールの合唱が鳴り響いていた。

このように、エスニック・スタディーズには60年代の運動、およびエスニック・マイノリティの学問を立ち上げる人々のレガシー (Legacy) が受け継がれている。遺産とは、次の世代に、集団で、コミュニティと共に、どのように生きるのか、どのような選択をするのか、どのように考えるのか、どのように暮らすのかということと共に創り上げ、実践することではないか。加えて、フィールド・ワークをとおして出会い、ベイエリア滞在中に深く関わったアジア系の友人たちの多くが、サンフランシスコ州立大学エスニック・スタディーズ出身者であった。またこの抗議運動は、大学の自治、つまりは予算カット阻止、公正な予算配分の要求におさまらず、地元コミュニティに深刻な脅威となっている警察の暴力によってラティーノとブラックの若者たちが殺害されたことへの抗議に接続されていた。抗議集会や学生によるミーティング場所には、必ず当時警察の暴力で犠牲となったアレックス・ニトー (Alex Nieto)、マリオ・ウッズ (Mario Woods) の肖像画が描かれた旗が立てられていた。加えて、警察による不当逮捕から被疑者を擁護する役割であるサンフランシスコ市のパブリック・ディフェンダーを長年務めたジェフ・アダチ (Jeff Adachi) が応援演説に駆けつけていた。エスニック・スタディーズの役割の一つは、地元コミュニティと協働し、エスニック・マイノリティに向けられた暴力を社会問題として可視化することであった。

### 3. 集合的記憶とエスニシティ

上で述べたようにエスニック・スタディーズは、エスニック・マイノリティたちによる絶え間ない闘いによって存続されてきた。かかる闘いは、彼らの存在意義に関わる歴史を確保するというミッションでもある。同時に、60年代からアジア系アメリカ人コミュニティでは、自分たちとは何者かを問い、歴史を探る試

みが開始された。彼らにとって、自身や家族のスティグマを帯びた歴史経験を吟味する作業は容易ではないことは想像するに難しくない。ジレンマや痛みを抱えつつも、創造的作業に取り掛かかった彼らが見出した表現方法の一つが、映像制作であった。そして重要なのは、かかる映像制作/上映活動が集合的記憶と密接に関わっているという点である。福島によると、民族的概念が問題なのは、民族的要素が対立の根拠とされるがゆえに、以後もその影響が続くという点にある。

一旦起動したハイパーサイクルは、それが終焉しても、ある種の歴史的な記憶を残す。言い換えれば、民族という概念には、それに関連した集合的な記憶という問題がついてまわる<sup>56</sup>。

この意味で集合的記憶とは、排斥の対象になったエスニシティ集団の集団性維持のメカニズムにとって重要な要素として機能しているのである。集合的記憶と日系人のエスニック・アイデンティティに関する竹沢の見解によると、70年代、「苦しみの共有感」をとおして、日系人強制収容所の記憶は個人から集団の記憶となった。そして、80年代にアメリカ的イデオロギーに基づき展開された補償運動によって、日系人の罪や恥の意識は完全に消えることはなかったが、これを通じて日系人としての誇りを持つようになった三世もいた<sup>57</sup>。

60年代のアジア系アメリカ人運動、80年代の補償運動をとおしてエンパワーメントした日系人であったが、エスニック・アクティベーションと暴力の脅威は、社会に潜在的に存在している点に留意しなければならない。エスニック・マイノリティに向けられた暴力は絶えず待機しているのである。ゆえに、集合的記憶を彼ら自身によって作り直す過程が重要となるのだ。つまりは、圧倒的な国家暴力によって過去に社会的コンテクストから剥ぎ取られた集団が、自ら映画制作/上映活動によって自らの歴史を奪い返し、社会の一員としての存在を取り戻していくという意味で極めて重要な活動なのである。かかる活動過程において、規定化され押し付けられてきた、あるいは暴力によってアクティベートされてきたエスニシティではなく、彼ら自身が何者であるかを-エスニック・アイデンティティと呼ぶならば-見出しているのである。またかかる過程において見出される自己-エスニック・アイデンティティと呼ぶならば-は、多文化主義やカラーラインの一部としてすぐさま位置付けるべきではなく、極めて経験的なもの

---

<sup>56</sup> 福島真人、前掲論文、1998年、304頁。

<sup>57</sup> 竹沢泰子、前掲書、1994年、192頁。

として受け止めなければならないのである。

## 第5節. 映画祭

本研究では、サンフランシスコ・インターナショナル・アジア・アメリカン・フィルム・フェスティバル (the San Francisco International Asian American Film Festival) を調査対象とした。アジア諸国および、アジア系アメリカ人の歴史や文化に関する映画を扱った映画祭には、主にサンフランシスコ・ベイエリア周辺に暮らしている様々な歴史的背景を持つ人々が集まる。毎年、3月に開催されるかかる映画祭は、10日間で150作品が上映され、延べ15,000から20,000人が訪れている<sup>58</sup>。主な映画祭の開催場所の一つは、ジャパントウン (Japan-Town) の中心部に位置する映画館、カブキ・シアター (Kabuki Theater) である。また市役所近くのアジア美術館 (Asian Museum) で開催されたオープニング・ナイトは、アジア系のヒップホップ・ミュージシャン、DJによるビートで会場が盛り上がる空間に、映画祭の関係者、監督やキャストから映画愛好家、コミュニティの人々が一同に集まる社交の場となった。メイン会場としてのカブキ・シアターの他には、とりわけLGBTBの権利擁護活動が盛んにおこなわれてきたカストロ地区にあるカストロシアターに加えて、様々な抗議運動が活発に行われ、運動とアートが交錯するイースト・ベイに位置するオークランド市にあるオークランド・ミュージアム (Oakland Museum) で映画上映が行われた。映画祭には、一括りにアジア系といっても様々なコミュニティに属する人々が集まり、多種多様なトピックを扱った作品が上映される。文字どおり映画に関わる祭り、パーティーである。パーティーは、参加者たちにとって一時的に別の日常生活、非日常空間を生み出す契機になりうると考えられないだろうか。かかるイベントが、いかに創られているのかについては、第4章でさらに詳しく述べる。

電子機器の進展と普及によって、映画鑑賞のために映画館に足を運ばなくてはいけなかった時代はとうの昔におわっている。また、映画祭の開催は、資本のバックアップがない限り、そう簡単には行えない。それにも関わらず、毎年開催されるアジア系アメリカ人の映画祭は、人々による協働により開催され続けている。

映画祭のために、映画祭に関わる人々があらゆる日常の中でその準備を行な

---

<sup>58</sup> 2021年のアジア系アメリカ人映画祭は、パンデミックの影響により映画館での開催は見送られたが、オンラインとドライブ・イン・シアターとの併用で開催された。



っている。というのも、この映画祭で上映される映画のほとんどは、大きな資本によって支えられている商業映画ではなく、比較的小規模な集団からなるアジア系アメリカ人によって制作されるインディペンデント映画である。アジア系の人々は、日常的に映画制作に関わる様々な作業を友人たちと交流し、助け合いによってすすめている。例えば、ある時は撮影用のビデオカメラを持って現場に駆けつけたり、またある時は制作中の短い動画をソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）やメールで共有し、意見を出し合ったりしている。制作から上映までには数多くのプロセスがあるが、そこに興味や時間のある人が順番に関わっていくのである。これは、企画、脚本、撮影といったそれぞれのプロセスについて、いちいち会議を開き、審議を行い、挙げ句の果てには権限を持った者たちに決定権が委ねられている、ハリウッド映画の制作プロセスとは異なるのである。これについては、第1章で詳しく述べる。

アジア系アメリカ人という集団性をあらわすカテゴリーには、言うまでもなく歴史的なあるいは状況的な無数の差異、序列や障壁が存在する。軋轢や分断があるなかでも異種混濁的なアジア系の人々がつながりをつくり出し、映画作品の完成に向けて協力し合っていく。映画制作及び、その後の上映会に関わってあらわれる集団性やコミュニティは、アジア系アメリカ人の集団性が、遂行的なプロセスとして立ち現れる瞬間なのである。それは、制度としてあらかじめ用意された、あるいは学問的整理のために用いるアジア系アメリカ人とは、その集団性において重なり合いながらも、異なっているのである。この意味で、集団性とは記述的ではなく行動的であり、現実のなかにあるのである。

## 第1章. 非物質的労働：解釈労働、想像的、創造的労働をめぐって

### 第1節. 社会運動と起業活動をめぐって 労働的視点による介入

本研究では、序章、第2章から第4章にかけてアジア系アメリカ人による映画制作/上映活動及びアジア系アメリカ人社会のポリティクスについて、そして第5章では社会運動と起業活動について検討する。文化、芸術に関わる領域と起業活動というのは、よくある一般的な理解においては、より良い社会に向けて尽力する活動と、かたや金銭的利益を追い求める活動として、正反対の性質の活動として理解される傾向にある。一見無関係に見える両者の活動ではあるが、ポスト・フォーディズムにおける労働の視座において捉えることによって、近似性が浮かび上がるであろう。かかる活動領域は、非物質的労働に関わっており、解釈労働 (Interpretive labor, Interpretive work)、想像的、創造的労働 (Creative Work, Creative Labor) が一つの論点となる<sup>59</sup>。

ポスト・フォーディズムにおけるエスニック・マイノリティの芸術活動は、現在、非営利組織といえども、その多くが資本と不可分な関係にある運営形態に関わって展開されている。換言すると、社会運動領域への資本の漸進であり、芸術活動が労働の領域と不可分な関係性にあると捉えなければならない。こうした事態の背景には、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行による労働の質的変容があると考えられうる。そこで、エスニック・マイノリティによる社会運動を芸術的労働として捉えることによって、従来の研究では、民族やコミュニティにおいてのみ検討されてきたために、捉えきれなかった活動の側面を浮かび上がらせることを試みる。

序章で少し言及したように、労働の領域と不可分な関係性にあるアジア系アメリカ人の映画制作/上映活動に関わる芸術的労働を解釈労働の視角から捉える。解釈労働とは、暴力を基盤とした構造的な不平等な社会において、被支配層にいる人々が支配者たちについて想像し、気を遣うことが強制される労働形態を示す。そのため、社会の上位にいる人々は解釈労働を必要とはしない<sup>60</sup>。加えて、グレーバーの解釈労働の概念を受けて高は、以下のように述べた。

---

<sup>59</sup> Interpretive labor, Interpretive work, Creative Work, Creative Labor と明記しているのは、かかる労働領域が必ずしも貨幣的価値に還元されない活動であるとしていることから、このように表記している。

<sup>60</sup> デヴィッド・グレーバー『官僚主義のユートピア テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』、酒井隆史 (訳)、以文社、2017年、94-96項。Graeber, David *The Utopia of Rules s: On Technology, Stupidity, and the Secret Joys of Bureaucracy*, Melville House, 2015, p68.

他人の立場を想像して共感しようとする努力は人間が人間に接するにあたってもっとも基本的でありながらもっとも重要なことであるためだ。

解釈労働は人間関係支える根幹ということができる。<sup>61</sup>

つまり他者理解とは、自然になされるわけではなく、そこには人々の積極的な他者を理解しようとする努力がなされたときに初めて達成するのである。アジア系アメリカ人による映画制作/上映活動について解釈労働の視点から捉えると、まず映画制作は、商品化・ステレオタイプ化された自己像を描き直し、歴史を再解釈する、つまりは歴史を書き換えるという解釈労働の側面がある。加えて上映活動においては、鑑賞行為は、コンテンツをとおして、自己、他者や社会への理解を深めるという点において解釈労働を伴っていると考えられる。また、第4章で詳しく述べるが、受動的な存在と措定されがちなオーディエンスは同時に、制作に関わる能動的な作り手となる。つまりは、かかる活動領域は、制作側と観客側の双方のプロセスにおいて、解釈労働を伴うのである。こうした彼らの活動は芸術的労働であり、想像力と創造力を伴った解釈労働なのである。

また、第5章で詳しく述べるが、シリコンバレーで起業を試みる者たちの労働は、そのほとんどが認知労働に関わる領域の労働であると同時に、新しい製品やビジネスモデルを模索、開発するという点において創造的労働であると捉えることができる。また、彼らのほとんどは個人事業主であり、収入のほとんどを投資家による投資に頼っているため固定収入はなく、加えて労働ビザの制限を受けている者も多い。よって、自由を求め、夢を抱きやってきた起業家を取り巻く労働環境は不安定である。かかる環境において、どうにかサバイブしようとする起業家は、労働のあり方を模索し、苦闘する労働者という側面を持ち合わせている。

一見相容れない関係にあるアジア系アメリカ人による映画制作/上映活動とシリコンバレーの起業家は、前者を解釈労働、想像的、創造的労働の性質を併せ持った芸術的労働と捉え、後者の労働における想像的、創造的労働の側面に着目したうえで、非物質的労働に関わらせて検討すると、両者の間に繋がりを見据えることができるのではないであろうか。次の節では、非物質的労働について詳し

---

<sup>61</sup> 高乗権、今津有梨『哲学者と下女一日々を生きていくマイノリティの哲学』、インパクト出版会、2017年、130頁。

く検討していく。第 5 章では、改めて社会運動であり且つ芸術的労働であるアジア系の映画活動と、ベンチャーキャピタルからの資金獲得を目指し、商品開発起業活動の共通項をさぐると同時に、社会変革への可能性となりうる想像力、創造力についての考察をおこなう。

## 第 2 節. フォーディズムからポスト・フォーディズムへ

### 1. 移行の背景 非物質的労働をめぐるグレーバーの介入

フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行に伴い、変容する労働を検討する試みにおいて、イタリアの社会理論家たちが中心となって、非物質的労働の概念が導入、検討されてきた<sup>62</sup>。この章では、非物質的労働の概念に対するグレーバーによる介入を主軸とし、ポスト・フォーディズムの労働の変容について検討していく。まずは、労働と生産様式について時代の変遷を踏まえて説明する。

1910 年から 1920 年代にかけて、人間の労働を科学的に管理しようとする労働管理体制が徐々に確立され、かかる労働者管理方法はフォード式及び、テイラー主義とよばれるようになった。この時期から、工場労働者は模範的な労働者像として絶えず想起されてきた。長らくフォーディズム的経済活動を支えてきたのは、生産性及び賃金の上昇にあったとされているが、1973 年の変動相場制移行と時期を同じくして、マクロ経済的な観点から言えば、フォーディズム期に象徴されるようなテレビ、エアコン、車といった生活に必要とされる耐久消費財にかかわる生産、販売、消費といった生産的経済サイクルに陰りが徐々に現れた。つまりは、北米やヨーロッパといったいわゆる経済先進国において、耐久消費財に軸をおいた生産的経済体制では、これまでと同じような利潤が得られなくなったのである。その原因の一つとしては、生産コストを抑え、低賃金労働が可能となる発展途上国への工場労働の輸出が挙げられる<sup>63</sup>。一般的な見解によると、フ

---

<sup>62</sup> Lazzarato や Hardt & Negri を中心としたイタリアの社会理論家たちの研究をみよ。Michael Hardt, Antonio Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2001. Maurizio Lazzarato, "Immaterial labor" In Virno, Paolo, Michael Hardt, *Radical Thought in Italy, A Potential Politics*, University of Minnesota Press, 2006, pp.142-157.

<sup>63</sup> この点に関してグレーバーは、工場労働の輸出先であるインドの雇用構造の全般的傾向からみると、工場関連の割合がそれほど増加しておらず、サービス業の割合の上昇が見受けられる、というデータを示している。デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブクソどうでもいい仕事の理論』、(酒井隆史、芳賀達彦、森田和樹訳)、岩波書店、2020 年、199 頁。Graeber, David *Bullshit Jobs: A Theory*, Simon & Schuster, 2018, pp147-148.

オーディズムの衰退要因は労使関係の変容、技術開発、グローバル化の漸進といった複数の要因が絡み合っているとされている。しかしながら、単に工場の海外移転が問題ではないと捉えたグレーバーによる工場労働者の利潤が中間管理職に剥奪されていく観察は示唆的である<sup>64</sup>。つまりは、実際の工場において、利潤が増加していくと同時に実際に機械を動かす労働者ではなく、スーツを着た労働者が増加し、挙げ句の果てには工場の閉鎖、海外への工場の移転に至ったのである。

先進国におけるこうした工場労働の衰退と同時に、第三次産業といわれるコンピュータ、情報、通信部門産業が勃興した。そこで、資本はかかるフィールドでの労働にイノベーションを要請するようになった。こうした産業の発展と、生産体制と労働の質に関わる変遷を受けて、時代は「ポスト・フォーディズム」の時代へと移行したと評価された。そこで展開される労働の特性としては、とりわけ「フレキシビリティ」、「コミュニケーション」、「クリエイティブ」が挙げられる。そして、これらの特性をこれまで以上に発揮することが求められる労働を「非物質的労働」と捉え、検討されてきた。

かかる背景には、フォーディズム期の同品種大量生産から、少品種大量生産体制への漸進的な移行によって、労働者は消費者側からの多様な市場のニーズの要請をこれまで以上に敏感かつ迅速に対応することが期待されるようになったことが考えられている。かかる労働環境においては、これまでの物理的に身体を正確に動かすことが求められたフォード式労働から、市場や顧客からのより詳細なニーズに応えるというコミュニケーション能力に重点が置く労働が重視されるようになったのである。また、かかる労働の状況は、サービス経済といわれるようになった。ここで注意したいのは、サービス経済という概念は、サービス部門、つまりは主に情報関連の仕事の増加を分析するために用いられたと捉える<sup>65</sup>。一方で、情報関連の労働が登場する以前から存在していたサービス部門の労働者の割合は、昔とあまり変わっていない点について留意する必要がある<sup>66</sup>。

ポスト・フォーディズムの労働は、とりわけコミュニケーションが労働の要素

---

<sup>64</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、59-60頁。Graeber, 2015, *Ibid*, pp43-44.

<sup>65</sup> IT 専門家、コンサルタント、事務員、会計士などをさす。グレーバー、前掲載書、2020年、200頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p149.

<sup>66</sup> 「1990年においてすら、ウェイターや床屋、販売員などによって構成される労働力の割合は、かなり少なかった。一世紀以上にわたっておおよそ20%を維持したまま、顕著なまでの安定を見せているのである。グレーバー、前掲載書、2020年、200頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp148-149.

の一つとなり、労働者の情動面が労働の現場において今まで以上に要請されるようになったと分析されてきた。かかる労働現場の変遷を踏まえて、物質的には認識できない労働の側面を積極的に捉えようと、感情労働という概念が導入された。非物質的労働についての考察を先導したイタリアの社会理論の一派、マルチチュード派の一人であるマラッツィは、コミュニケーションを駆使し、顧客や市場の情報を読み取り、対応することが労働過程における主要なファクターとなった状況を踏まえ、労働はまさに言語行為であるとした<sup>67</sup>。

フォーディズムにおいて労働者の身体を規律化させる労働管理から、「フレキシビリティ」、「コミュニケーション」、「クリエイティブ」を主軸に置いた、より感情、認知、精神を動員する労働形態へと移行した。加えて、こうした労働管理に関わる物理的身体次元から精神次元への移行に着目することによって、情報処理の視点から知的活動の解明を試みる認知科学的なアプローチが注目されるようになった。認知科学とは、心理学、人工知能、言語学、脳科学、人類学、哲学に跨る複合的な学際分野から構成されている。フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行に伴って、労働過程において動員されるのは、労働者の身体的次元に収まらず、より精神や心を中心としたサービスを行う要請の増加に伴って、認知科学の視点から、資本主義の変容を捉えようと導入されるようになったのである。また、人工知能開発に用いられてきた認知科学は、脳科学分野に関わる分析と相互に関連し合っており、かかる語集が認知労働、認知資本主義概念に多くの影響をもたらしてきた<sup>68</sup>。

## 2. 労働の概念をめぐる新たな議論的展開

アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは、スピノザのマルチチュード概念を援用し、ポスト・フォーディズムにおいて、革命的主体になりうるマルチチュードの概念を練り上げた<sup>69</sup>。ネグリとハートによって提唱されたマルチチュードの概念に対する批判は諸説ある<sup>70</sup>。グレーバーによると、かかる概念が練り上げられた背景の一つには、ネグリによるレーニン主義から派生した革命階級を構成

---

<sup>67</sup> マラッツィ、クリスティアン『資本と言語—ニューエコノミーのサイクルと危機』、水嶋一憲(監修)、柱本元彦(訳)、人文書院、2010年。

<sup>68</sup> 山本泰三(著作、編集)、他12名『認知資本主義—21世紀のポリティカル・エコノミー』、ナカニシヤ出版、2016年、5頁。

<sup>69</sup> Hardt, Negri, *Empire, Ibid*, 2001.

<sup>70</sup> 遠藤孝「アントニオ・ネグリのマルチチュード」、中央大学社会科学研究所年報、第21号、2016年、179-180頁。

するのは、常にプロレタリアートの最も進んだ部門でなければならないという想定があった<sup>71</sup>。つまりは、ネグリが念頭に置いた新たな革命層とは、イタリア労働主義の潮流において、当時最も進んだ産業の担い手になると想定された層は、コンピューター分野に関わるエンジニアたちと、「家事労働に賃金を」をスローガンに立ち上がったフェミニストたちであった。つまり、ネグリの議論は、かかる両者による来たる革命を予感していたのである。また、マルクスの『経済学批判要綱』において、一般的知性は固定資産の内容において議論されていたが、ネグリは一般的知性を再解釈し、公私に区分されない共、コモン (Common) として捉えたのであった。これに対して崎山、井上は、以下のようにネグリによるマルクスの積極的誤読を指摘した。

「認知資本主義」論者たちは、「一般的知性」を労働手段たる機械から切り離し、それを個々の労働者の方に、その頭脳の方に見るのである。

72

ところで、中心を持たず拡張していくネットワークを軸に増殖する一般的知性、集团的知性、群集知は、しばしば脳の機能を比喩的に捉えることによって、脳科学的ニューロサイエンスとの接近において検討されてきた。それは、ヒエラルキーをつくらずネットワークの増殖過程において拡張し、創造されてゆくとされた<sup>73</sup>。例えば、中心を持たないネットワーク形態は、企業文化の組織化といったところにまで理論的アナロジーが展開された。つまりは、垂直型のヒエラルキーに依拠した管理体制、すなわちこれまでの部下と上司といった関係から、お互いに関かれた関係性にあることがこれからの会社風土であることが望ましいとした風潮である。例えば、新興の情報 IT 産業などでは、まるでこれまでの堅苦しい企業文化など時代遅れだと言わんばかりに盛んに宣伝されてきた。しかしながら、これはただの宣伝文句であり、自らの企業をよくみせようとする一種のブランド化の一つの戦略である。実情は、ヒエラルキーがないどころか、CEO

---

<sup>71</sup> David Graeber, “The sadness of post-workerism,” *Revolutions in Reverse: Essays on Politics, Violence, Art, and Imagination*, Minor Compositions, 2011, P88.

<sup>72</sup> 崎山政毅、井上康「新たな段階の架空資本の解明に向けた理論的準備 (その1)」、『立命館文学』(658), 11-28, 2017年、107頁。

<sup>73</sup> 山本泰三「非物質的労働の概念をめぐるいくつかの問題」、四天王寺大学紀要 第52号、2011年、72頁。

や上層部の報酬や待遇をその他の社員と比べるまでもない。所得分布で全体の上位 1%の超富裕層が富を独占しているのは周知の事実であるが、パンデミックの影響を受けさらに悪化の一途を辿っている<sup>74</sup>。また、グーグル(Google)、ヒューレット・パッカード(Hewlett-Packard)、インテル(Intel)、リンクイン(LinkedIn)、ヤフー(Yahoo)を対象にしたテック企業におけるアジア系アメリカ人の雇用統計では、プロフェッショナル・ジョブ(Professional job) 27%、エクゼクティブ ポジション(Executive position)14%に対し、白人の場合はプロフェッショナル・ジョブ(Professional job)62%、エクゼクティブ ポジション(Executive position)80%を占めた。よって、マネージャーやエクゼクティブといわれるリーダーシップが必要とされる割合が低い実態が明らかであり、レイシズムの影響が少ないフラットな組織化が成功していないことを示している<sup>75</sup>。したがって、ポスト・フォードイズム下における、企業の非中心的ネットワークに広がる組織化を積極的に評価分析したこれまでの見通しは、やや楽観的すぎたといえる。

加えて、企業組織のあり方のみならず、実際の情報 IT 産業が稼働している労働現場と分業体制に及んでも、非中心的ネットワークの組織化は成功しているとは言えない。つまりは知的かつ創造的労働の場面においても転倒した分業体制が現れた。グレーバーは、尻拭いの仕事(ダクト・テーピング)<sup>76</sup>という概念の一つの実例として、ソフトウェア・エンジニアの仕事を挙げている。それは、最もやりがいのある技術開発といった仕事は無償でソフトウェア・エンジニアだけでなく熱狂的な者たちによる協働によりオンライン上で行われており、他方、無償で行われた技術を補填するための尻拭いの仕事(ダクト・テーピング)が存在している。つまりは、創造的ではない仕事をソフトウェア・エンジニアが

---

<sup>74</sup> 連邦準備制度理事会の報告を参照せよ。

<https://www.federalreserve.gov/releases/z1/dataviz/dfa/distribute/chart/#quarter:127;series:Net%20worth;demographic:income;population:all;units:levels;range:2006.2,2021.2>

<sup>75</sup> <http://blog.angryasianman.com/2015/05/where-are-asian-american-executives-at.html?fbclid=IwAR0Eja1KOCctBP1Skpa6hCSF5BuvUFskjguJmroIjBgyCmsY9cF9STn0p1E&m=1>

<sup>76</sup> グレーバーがブルシット・ジョブを5つに分類した。取り巻き(flunkies)、脅し屋(goons)、尻ぬぐい(duct tapers)、書類穴埋め(box tickers)、タスクマスター(taskmasters)がある。尻拭いの仕事(ダクト・テーピング)とは、「組織に欠陥が存在しているためにその仕事が存在しているにすぎない、雇われ人である。グレーバー、前掲載書、2020年、50-82頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp28-53.



有償で行うという構図が出来上がっているという<sup>77</sup>。2021年現在、世界中で大ヒットしている、オンラインゲーム、ロブロックス(Roblox)の開発をめぐって子どもを含む熱狂的ゲーマーたちを搾取していることが社会問題となっている<sup>78</sup>。

こうした事象の側面に着目すると、非物質的労働に関わる議論を展開したマルチチュード派と呼ばれるネグリとハートによる『帝国』で予見された熱狂的ゲーマーやコンピューター・マニアたちが、インターネット・テクノロジーを駆使し、新たなコモンを創り出すことで新たな社会秩序の展開が予見されてきた。しかし、実際には企業活動のマネジリアリズムの働きによって、サイバー空間に本来ならば存在しているはずの余白やクリエイティビティが資本による包摂による締め付け、さらなる商品化によって切り詰められているのである。

序章で映画祭における集団での映画鑑賞は、とりわけ商品化への抗いとなると論じたが、次にインターネット空間と映画との観点から述べることにする。アジア系の映画監督たちの映画作品の管理方法はさまざまである。例えば、大学や高校で教育目的に上映される場合には、数週間単位で映画の上映権を有料化し、あるいはビデモ(Videmo)などの動画サイト内でキーを設けアクセスする権限を制限するなどし、映画作品の管理をおこなっている。しかし、なかには短い映画の予告編トレイラーだけではなく、映画作品そのものをユー・チューブ(YouTube)に投稿されている場合もある。投稿することによって、世界中のネットユーザーによって視聴される機会が可能性として担保される。しかしながら、ユー・チューブ(YouTube)等に投稿した場合、よほどの再生回数がカウントされない場合、ユー・チューブ(YouTube)に作品を無償提供している状態である。こうして、制作のコアを担当してきた映画監督、カメラマンやキャストだけではなく、コミュニティのたくさんの人たちが関わり、長期間にわたって制作されてきた膨大な仕事の結晶でもある映画作品が、グローバル企業の利潤の生産へと接続されるのである。

### 第3節. 労働の前提を問い直す

#### 1. 生産/再生産労働再考

これまでのテイラー主義やフォーディズムについての分析は、生産の効率化

---

<sup>77</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、285-286頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp218-219.

<sup>78</sup> <https://wired.jp/2021/08/22/on-roblox-kids-learn-its-hard-to-earn-money-making-games/>

を最大限に高めようとする資本家によるトップダウンで徹底的に規律化された管理は、労働者の振る舞いや動作にいたるまでコントロールし、過度な規律化によって労働者のコミュニケーションを切り縮めた労働として解釈されてきた。他方、ポスト・フォードイズム以降は、工場の海外移転に伴い、先進国において多様化する市場のニーズに応えるため、コミュニケーションを軸においた労働の変容の顕著化が特徴づけられるようになった。このように、工場労働、身体動作への規律化に主軸を置いたフォードイズムから、精神、情動をコントロールし、資本の要請が脳内にまで及ぶとした認知資本主義、ポスト・フォードイズムへの移行が通説化してきた。しかしながら、実際に稼働している社会は、先進国であろうと、認知資本主義労働だけで稼働するわけがないのである。むしろ、認知資本労働に関わる労働者は、全体のほんのわずかなエリートと呼ばれる層にすぎないのである。

産業構造の変遷を受け非物質的労働の概念が練り上げられてきたが、上で述べたように、かかる概念と現実の間にある齟齬を否認しない。現実の労働を再考するためには、グレーバーはその多くを女性が担ってきた再生産労働 (reproductive labor) とかかる概念の自然化についての見直しが何よりも必要であると主張した<sup>79</sup>。これまでフォードイズムを特徴、定義づけてきた工場労働、工場労働者たる前提自体に見直しを迫る事態として受け止める必要がある。グレーバーによると、私たちが男性の工場労働者をすぐさま想起してしまう歴史的背景には、従順な働き手として工場に雇われた女性と子どもから職を奪われた男性労働者による反乱に加えて、ナポレオン戦争時に巻き起こったラッドイト運動があり、かかる反乱を抑えるために、成人男性が優先的に工場労働者として雇われるようになった経緯がある<sup>80</sup>。もう一つの理由としては、労働組合の組織化が主に工場労働者によってなされるようになったという歴史的経緯がある<sup>81</sup>。かかる歴史的経緯により、学問研究においても同様に、工場労働者＝男性という公式がはびこるようになったのである。こうした影響は、なによりも女性の仕事とされるケアに関わる労働の不可視化を招いた。グレーバーは、女性の労働と認識されてきた労働領域を押し広げるように以下のように述べた。

---

<sup>79</sup> Graeber, *Ibid*, 2011, P89.

<sup>80</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、305頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p235.

<sup>81</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、305頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp234-235.

すなわち、ほとんどの労働者階級による労働が、それをやるのが男性であれ女性であれ、実際には女性の仕事と基本的にみなされるものに類似しているという現実がみえなくなっているのである。つまり、労働とは、槌で叩いたり、掘削したり、滑車を巻き上げたり、刈り取ったりする以上に、人の世話をする、ひとの要求や必要に配慮する、上司の望むことや考えていることを説明する、確認する、予想することである。

82

また女性の仕事とみなされている仕事が一層認識されづらくなった事態は、とりわけ生産/再生産労働をめぐる議論が深く関わっている。生産労働と、一般的に女性の仕事と認識されてきた領域の仕事、「人の世話をする」といった再生産労働 (re-productive labor) が、区分されるようになった経緯について振り返ることは重要である。何故ならば、フェミニズム研究からの異議があったにもかかわらず、マルクス主義経済学から派生した議論において、依然として変わらず生産/再生産労働という区分を前提にした議論が展開されてきたのである。あるいは、かかる区分自体がなくなる、意味をなさなくなる契機としての社会革命についての議論を練り上げるかのいずれかが議論の潮流であった。

マルクス主義の議論の前提とされてきた生産/再生産労働の区分ゆえに了解されてきた問題の一つには、資本主義経済において生産的労働は余剰価値をうみだすと認識されている点にある。つまりは、労働が貨幣的価値として変換されることを意味する。他方、再生産労働は将来の労働者を準備するための労働とされているので直接的な利潤を生み出さないとされている。換言すると、再生産労働がすぐさま貨幣的価値として変換されないことを意味する。こうして、人間の生命を維持する、人の世話をするといったことに関わる領域の労働は、賃金が発生しない労働 (unpaid labor) として理解されてきたのだ。専業主婦といった役割を果たしている人物には直接の給与の支払いはなされないのが当たり前となっている事実がこれを証明している。かかる通説化に対して問いを投げかけ、マルクス主義の議論の前提とされてきた生産/再生産労働の区分から問い直し、資本主義的社会構造が動かしがたく自明な世界であると想定した多くのマルクス主義者の世界観から外れる思考法を模索し始めなければならない。そうでなければ、生産/再生産性、余剰価値、交換価値、利潤といったある意味で機械的な

---

<sup>82</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、305-306頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p235.

認識において社会を再び考察してしまうのである。そして、実際にはもっと複雑で錯綜しているがゆえに豊かな社会を分析視角によって切り縮め、多くの可能性を取りこぼすことが再び繰り返されてしまうであろう。

グレーバーの議論は、マルクス主義の議論の前提とされてきた生産/再生産労働の区分が登場するようになった経緯を丁寧に解明し、神学的要素と家父長制的な規範が絡まり合うことにより、生産という概念が構築されてきた経緯を解明する。つまりは、生産と再生産という考えを可能にしたのは、もとをたどれば、聖書の創世記と男女の役割分担を掛け合わせた操作によるものであるという。そこでは、男性的視点から書かれた聖書創世記において、「女性の出産」と「男性は汗を流してパンを得る」を等しいものとして捉えられていた<sup>83</sup>。女性の出産には、出産に至るまでに、長い複雑な社会関係の構築があり、そのうえで、赤ん坊の生物的な成長過程があるといった実にさまざまな要素が合わさり、最終的に赤ん坊が生まれてくる。そうであるにも関わらず、かかる人間と社会関係をつくりだす重層的な過程を考慮していない男性的視点においては、「無から完成された赤ん坊」が突然女性の身体から生まれてくると認識する。こうして、女性による「出産」という行為は、自然化されるのである<sup>84</sup>。そうして、生殖や家事労働といった領域の人間と社会関係を作り出す労働は、将来、野菜といった商品を生産する労働主体を育むための過程として認識されてきた。それに対して、一般的に誰もが生産的だと想定する仕事は、男性の仕事、労働としての認識が普及した。こうして、人間と社会関係を作り出す労働は、生産的であるとされる商品生産に劣るとされてきたのである。それと同時に、これまでマルクス主義議論の土台となってきた「生産」と「再生産」という区分、認識が自明となり定着していったのである。

## 2. 非物質的労働に対するアプローチ再考

「コミュニケーション」がポスト・フォーディズム、非物質的労働のコアとなる要素の一つとして捉えられてきた。なぜならば、かかる労働は、物質的な生産物をもたらすよりかは、労働者の感情を動員し、労働過程における相手のニーズを読み取るといったサービスを提供する比重が高い労働であると捉えられてい

---

<sup>83</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、289頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp221-222.

<sup>84</sup> Nika Dubrovsky and David Graeber, *Another Art World, Part 2: Utopia of Freedom as a Market Value*, 2019. <https://davidgraeber.org/articles/another-art-world-part-2-utopia-of-freedom-as-a-market-value/>

るからである<sup>85</sup>。それゆえ、マルチチュード派は、労働の過程の多くが言語行為にあるとした。しかし、機械技術、情報技術の進化に関わらずとも、どのような労働過程においても、コミュニケーションは常に必要とされてきたのではないであろうか。そうやってしまうのは、あまりにも短絡的かもしれない。しかしながら、私たちの労働の生産性に対する想定が、車や野菜といった物質的生産物を作り出すといったところにあまりにも収斂しすぎたため、非物質的労働の概念を練り上げる者たちは、なぜか普遍性を持った「コミュニケーション」という要素に焦点を絞る必要性に迫られてしまったと考えられよう。これから期待される展開は、非物質的労働に関わるこれまでの議論の道筋をさらに発展させるのではなく、「コミュニケーション」を言語的な共産主義と捉え直すことによって、これまでとは別の展開が開かれる可能性を浮かび上がらせることである。

上で先に述べたように、ポスト・フォーディズムにおける労働を検討する際には、主に「コミュニケーション」が労働の特徴として捉えられ、かかる要素が非物質的労働の概念としての輪郭を形成してきた。グレーバーは、多くの研究者が非物質的労働とよぶ仕事に対して、「労働自体が非物質的であるからではなく（そんなはずはない）、非物質的なものを生み出す労働だからである。」と、述べた<sup>86</sup>。加えて、グレーバーは、非物質的労働概念を提唱した者たちは、まさに物質的か非物質的であるかという区分、かかるロジックの根拠を、物質的基盤とイデオロギー的上部構造から構成されるとしたマルクス主義に依拠してしまっていると指摘した<sup>87</sup>。続けて、そこには、労働の結果として物質的な生産物が現れるという想定には、この世界を細かく管理し、所有しようとする意識の働きが重なっているという<sup>88</sup>。現在の唯物論者たちは、上部構造に対応したより抽象的で、精神的とされている法律や詩といったものの生産も物質的なプロセスである点を指摘したにも関わらず、非物質的労働概念の提唱者はかかる指摘を素通りしてしまった。彼らは、どうしてこのような時代遅れな根拠を持ち出したのであろうか。それは、フォーディズムからポスト・フォーディズムへ移行した時代にお

---

<sup>85</sup> 皮肉なことに、どれほど通信機器の性能がアップデートされようが、機械やAIにとって感情を駆使する必要があるコミュニケーションは人間には勝らないことは明らかになりつつある。かかる労働は、企業内で主に女性に振り分けられてきた仕事であり、つまりは解釈労働、感情労働の領域である。

<sup>86</sup> Graeber, *Ibid*, 2011, p90.

<sup>87</sup> Graeber, *Ibid*, 2011, pp90-91.

<sup>88</sup> David Graeber, *Turning Modes of Production Inside Out: Or, Why Capitalism Is a Transformation of Slavery*, *Critique of Anthropology* Vol26, No.1, 2006, p71.

いて、物質的生産に依拠したフォーディズム概念に根深く残る想定を取り除くことができなかつたと推定することができる。マリオンは以下のように述べている。

ポスト・フォーディズムという語でさえもヘンリー・フォードと彼の自動車の生産と消費のモデルといった概念に関係しているのです。グラムシが言うには、フォーディズム、あるいは現代経済にとってのメタ役割モデルとしての自動車産業というものは、一つのイデオロギー的転回なのであり、それは生産と資本蓄積にはただ一つの理解の方法しかない信じ込ませるのです。<sup>89</sup>

非物質的労働の議論の筋道を立てる際に、提唱者たちは物質的か非物質的、生産か消費といった従来の想定、議論の土台を問い直す必要があつたのである。換言すると、非物質的労働をめぐる概念は、フォーディズムの遺産を引きずっている。よって、生産と消費、そして労働の成果が必ずしも貨幣価値として計算されるだけにとどまらず、人間や社会の関係性の構築として労働を再考していく必要がある。また、オステンによる以下の問いかけは示唆的である。

非物質的労働という用語は労働についての工業的概念に認識論的に根をおろしているとお考えでしょうか？つまり身体をコントロールし、時間と生産の流れを最適化し、効率性を組織し、万物を商品化へと押し流してしまうような概念です。また、もしそうだとすると、この非物質的労働という用語をこうした古典的な発想から解き放ち、資本蓄積を思考枠組みとするだけではなく、非労働、ケアワーク、社会的なものの生産などを反映する用語として発展させることはできるでしょうか？<sup>90</sup>

非労働、ケアワーク、社会的なものの生産、人間や社会の関係性の構築を射程に入れ労働を考えるにあたり、次に芸術的労働についての考察をはじめることにする。

---

<sup>89</sup> ブライアン・ホームズ、マリオン・フォン・オステン（聞き手）「文化的問題の諸空間」、(森元斎、酒井隆史訳)、萱野稔人（編集）、『VOL 03 Volume One : Anti-Capitalism / Art Volume Two: No! G8』、以文社、2008年、47頁。

<sup>90</sup> ホームズ、オステン、前掲載書、2008年、48頁。

#### 第4節. 芸術家は労働者なのか？

##### 1. 問題意識

サンフランシスコ・ベイエリア東部、オークランドにある芸術活動による社会啓発活動をおこなっている非営利団体で芸術家として働いている友人を紹介した時のことであった。家に帰った後、私の友人は「それで彼女はどのようにして生計を立てているの？」と、私に尋ねてきた。「オークランドにある非営利団体で働いているらしいよ。」と私は答えた。「それでアーティストでどのようにして食べているの？どこからお金を得ているの？」と、友人は続けた<sup>91</sup>。私は、詳細について知るはずもなく、返答に困った時のことを覚えている。どうやら友人は、芸術活動が彼女の本職(Day Job)であることに、納得がいかないようであった。彼女にとって、アーティストを本職とし生計を立てることを可能とする人物とは、例えるならばサンフランシスコのダウンタウンで展示会が開けるほどの実力を持ち、アーティストとして高い評価を受けていないと納得に値しないということなのか。芸術で生計を立てることは、どうしても大変だという認識があるのだろうか。この友人はサンフランシスコ出身で、芸術活動が盛んな環境に慣れ親しんできたのにも関わらず、当時なぜそんな質問を筆者に投げかけたのかよくわからなかった。どうやらこの疑問を解くためには、芸術家に関する認識だけにとどまらず、私たちが労働をどう捉えているのかという問い、すなわち労働についての私たちの想定をもう一度考察することが必要であるようだ。

芸術家についての一般的な想定について考えてみることにする。まず、芸術家になるような人物には生まれ持った才能があり、その類稀なめぐまれた才能ゆえに芸術家として世に出て認められる存在になり得るのだという一般的な想定があると考えられうる。加えて、芸術家はお金のためではなく、もっと高尚なる目的のために創作活動をおこなっていると想定されているとも言えるだろう。また、芸術作品は、美しさ、優美といった何ものにも変えがたい唯一無二の価値を有しており、それゆえ人間の創造性を結晶化したものだという認識があるという傾向にある。よって芸術作品は、簡単に貨幣的価値に変換するべきではないと、考えられうるのではないであろうか。しかし、実際には芸術家も労働者であり、生活のために芸術作品を作って、それを売ることによって生活の糧にしている。加えて、他の生産物のように貨幣価値にすぐさま変えるべきではないという想定

---

<sup>91</sup> フィールド・ワークにおける筆者と友人たちとの対話から、アメリカ合衆国、サンフランシスコ市、2016年2月26日。

があるが、一部の芸術作品は恐ろしいほど高値で取引されている。芸術家に関する私たちが抱いている想定は、一般的に食べていくために仕事をするという労働者に対する想定とは異なっている点を留意しておきたい。労働者としての芸術家の考察をすすめる前に、労働者についての一般的な概念について、改めて考察していく。

## 2. 労働の概念と神学的伝統

改めて労働、労働者について、問い直す作業が必要である。労働とは、何か？ 何をすることによって仕事、あるいは労働は、労働とみなされうるのであろうか。ますます仕事中心の生活を強いられている現代社会において、労働にまつわる現代の一般的な定義やモラルは、一体どのように形成されてきたのであろうか。グレーバーは、論説記者によって論じられた労働の概念は、神学的伝統と労働に関わる人間の本質についての想定が反映されていると指摘した。

その伝統において労働は、呪うべきであるとともに祝福すべき神聖な義務とみなされ、人間は可能なかぎりその義務を免れようとする本性的に罪深く怠惰な存在であると考えられていた。<sup>92</sup>

この文章が示すように、私たちの労働に関わる価値観は神学的な要素を含んでおり、経済学はもとをたどれば、その多くが宗教的概念に由来している<sup>93</sup>。また、私たちの社会では、どんな仕事でも無いよりもある方が良いとされている。加えて、仕事をしないものは、怠惰で存在意義がないとまで見なされうる傾向にある。社会的意義がある仕事は低賃金で、特に存在しなくても困らない仕事には高い報酬が与えられるという、逆転した社会に暮らしている。どうしてこんな社会になってしまったのであろうか。かかる歴史的経緯を探ったグレーバーは、現在に至るまで影響を及ぼしている労働に関する想定について、労働の価値に内在する神学的伝統及び、仕事についての概念を提唱したトマス・カーライルの「仕事の福音 (Gospel of Work)」に言及した。

---

<sup>92</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、255頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp194-195.

<sup>93</sup> 経済学の領域は、もともと神学の一部である道徳哲学に起源がある。よって、労働、かかる価値の概念も神学的な影響を受けている。グレーバー、前掲載書、2020年、255頁。Graeber, *Ibid*, 2018, P195.



労働は物質的な欲求を満たす方法ではなく、生の本質と捉えるべきである。いわく、神は故意にこの世界を未完成なまま創造なされた、なんとなれば、その神の仕事が未完成なまま創造なされた、なんとなれば、その神の仕事をおのれの労働をもって完成するよう、神が人間に機会を授けられたのだ、というわけだ。<sup>94</sup>

すなわち、もし仕事が高貴なのであれば、最も高貴な労働には報酬を与えるべきではない、なぜなら、かような絶対的な価値に値段をつけるなど実に低俗ではないか、と（「すべての高貴な労働に対する「賃金」はいまだ天にあり、他のどこにもない」）。<sup>95</sup>

労働はそれ自体が価値であり、なおかつ価値の唯一の生みの親である。

<sup>96</sup>

こうした労働の価値に関わる想定は、時代の変遷にもかかわらず、依然として現代の私たちの労働の概念に根深い影響を及ぼしている。社会的価値が高い仕事には、低い報酬をとるという逆転した社会現象を肯定できるのは、このためである。

### 3. 生産者主義から消費主義へ

とりわけ 80 年代ごろから消費主義は、主要な概念の一つとなり、生産者主義に関わる議論を徐々に影に追いやっていった。グレーバーは、生産者主義から消費主義への移行の経緯について、アメリカの歴史を遡ることによって述べた。それまでの人々の労働観という、道徳的モラルを念頭に置いた生産者主義が支配的な社会であった。しかし南北戦争後、1890 年代、官僚制的企業資本主義の勃興期において、生産力の拡大に伴う科学的管理法の導入によって、これまで熟練工として働いていた者たちに対する管理が開始された。そして、熟練工は工場労働者へと徐々に転換された。かかる転換により、「生産者主義とは反対に、労働ではなく資本こそが富をつくり繁栄をつくるのだ」<sup>97</sup>というイデオロギーが普

---

<sup>94</sup> グレーバー、前掲載書、2020 年、297-298 頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp228-229.

<sup>95</sup> グレーバー、前掲載書、2020 年、298-299 頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p229.

<sup>96</sup> グレーバー、前掲載書、2020 年、302 頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p233.

<sup>97</sup> グレーバー、前掲載書、2020 年、303 頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p233.

及されるようになった。こうした労働管理のあり方の変換と、生産規模の拡大が後押しした結果、生産者主義から消費主義への転換が引き起こされたのである。また、「富の源泉が労働ではなく資本にある」としたイデオロギーの普及は、生産者主義から消費主義への転換とが同時期に引き起こされたことを留意すれば、現在のポスト・フォーディズムにおける労働の概念に影響を及ぼすこととなった蓄がこの時期の北米において誕生していたと理解することができる<sup>98</sup>。

## 第5節. 労働と現代アートの世界

### 1. 労働の概念と現代アートの世界

消費主義に取って代わられた生産者主義ではあるが、かかる要素を併せ持つカール・ライスの「仕事の福音 (Gospel of Work)」という観念は、現在社会の労働の概念への影響を多分に与えている<sup>99</sup>。つまりは、当時から現在に至って、私たちの労働の概念には、かかる神聖な要素を含んでいるが故に、社会にベネフィットをもたらす仕事に高い報酬は必要ではないという想定が根付いている。世界、社会によい影響を与えられる社会的価値が大きい仕事は、受け取る対価は少なくても当然であるというわけである<sup>100</sup>。ところでかかるロジックを、芸術を取り巻く世界において考えてみることにする。すると、芸術作品によって人々を幸せにするといったように、社会に有益な影響をもたらしている芸術家には、高い報酬を支払われなくてもよいということになる。同様に、高尚で、美しく人々を魅了する価値があるとされる作品には、高い貨幣的価値がつかなくてもよいということになる。しかしながら、現代アートと呼ばれる領域で活躍する芸術家の作品には、高値がつけられている。こうした状況は、ロマン主義の遺産が引き継がれた現代アートと金融資本主義の融合の過程の結実が引き起こされたと推測することができる。以下で詳しく説明することにする。

---

<sup>98</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、302-304頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p233.

<sup>99</sup> 産業革命と機械革新による生産力の増加が顕著であった南北戦争後、1890年代ごろ、トマス・カーライルが「仕事の福音 (Gospel of Work)」をとなえたように、当時は、労働自体に価値があるとされていた。つまりは、生産者主義的な道徳に根ざした労働観が支配的であった。それに対抗したドゥーカスとデュレンバーガーは、アンドリュー・カーネギーのエッセイにちなんで「富の福音」を持ち出した。「仕事の福音 (Gospel of Work)」に対して、「富の福音」とは、「労働ではなく資本こそが富をつくり繁栄をつくる」とイデオロギーである。グレーバー、前掲載書、2020年、303頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p233.

<sup>100</sup> カーライルは、仕事を賛美しているが、仕事に幸福があることを否定している。グレーバー、前掲載書、2020年、316頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p244.

## 2. 現代アートの世界

芸術活動を取り巻く世界、今日現代アートと呼ばれる領域に関わる世界は、解放の夢と排除の構造を併せ持ち成立している。つまりは、誰でもがアーティストであるべきだと、一方は、そうではないという相反する側面から成り立っているのである。かかる背景には、ロマン主義の影響がある。グレーバーによると、ロマン派の遺産には二つの側面があり、両者は拮抗状態にある。

ロマン派の遺産には2つの概念があります。1つは、たとえ集団的な方法でしか実現できないとしても、天才は人間の本質的な側面であるという一種の民主的な概念であり、もう1つは、本当に重要なものは常に個人の英雄的な天才の産物であるというものです。アートの世界は基本的に、一方の亡霊をぶら下げて、最終的にはもう一方の亡霊を積極的に主張しているのです。<sup>101</sup>

つまり簡潔に言い表すとすれば、ロマン派の遺産とは民主的な側面と独善的で個人主義的な側面からなる。そして現代アートの世界の状況を考慮すると、独善的で、個人主義的な側面が前面に押し出され、今日の状況を支配していると判断することは妥当であるといえる。

## 3. 二極化された社会

現代アート作品は、とりわけニューヨーク、ロンドン、パリといった世界の主要都市にある美術館で展示され、ダウンタウンの金融街に隣接する高級でスタイリッシュな画廊で展示、売買されている。よって、金融経済を支配する富裕層や金融投資家が、現代アートの世界の主導権を握っているといっても過言ではない。このような状況下においては、一般の人々、労働者にとって、現代アート作品とは、高価で容易に手に入らないものであり、美術館での展示を楽しむ対象となる。こうして現代アート作品は、かかる美的価値を頂点としたヒエラルキーを私たちの社会内部に持ち込み、容易にアクセスできない一般の人々と富裕層の間に分断とヒエラルキーをもたらす。グレーバーは、こうした現状を捉えて、

---

<sup>101</sup> Nika Dubrovsky and David Graeber, *Another Art World, Part 1: Art Communism and Artificial Scarcity*, 2019. 筆者による翻訳。

<https://davidgraeber.org/articles/another-art-world-part-i-art-communism-and-artificial-scarcity/>

私たちの無意識のうちに現代アートの世界が持ち込んでいる美的価値が社会に強烈な影響を与えていることについて次のように述べている。

現代アートは、すべての意味づけや文化表現を包括する、より大きな美的価値の構造の頂点に位置するものであり、それゆえに、運転手やメイド、炭鉱夫、電話セールスマンが、自分の人生や関心事が興味のないもの、重要ではないものだと言われ続け、心に響く美的形態や文化表現が二流、三流の地位に追いやられてしまうような、より大きな社会的関係の構造を再生産する重要な役割を担っている。<sup>102</sup>

この文章が示すように、グレーバーによる現代アートの世界についての考察は、たんに芸術作品や表象について分析、解説するといった作業に収まらず、社会関係、社会構造との関わりにおいて現代アートがもたらす影響にまで射程が広げられている。文化表現についての美的価値を頂点とし社会を階層化する効果をもった現代アートであるが、かかる影響は一般の人々の意識の中へ拡大、侵食している。よって、その影響下において暮らす人々は、無意識のうちに現代アートと比較し、自分たちの感性は劣っていると思うようになってしまう傾向にある。加えて、かかるヒエラルキーの構造下に置かれた一般の人々は、総じて作り手ではなく、鑑賞者であり、非生産者、消費者として、受動的な存在としてのポジションに止まることになる。また、パッケージ化された文化コンテンツを大量に世に送り出す消費主義は、受動的な消費者を増やし、かかる傾向を一層強める要因となってきた。

現代アートの効果によって、芸術とは人間の創造性の最も純粋な表現であり、創造性が究極の価値であるという想定を人々の間に浸透させてきた。グレーバーによると、以前の天使の階級や階層を奇妙に思い起こさせるように、現代芸術が、芸術の領域のヒエラルキーの頂点に位置し、芸術に関わる規則原理、形態やジャンルを統括する働きを促してきた<sup>103</sup>。現代アートの世界が構築された社会的背景を探る一つの手がかりとしてグレーバーは、フランスの社会学者アラン・カイエの「芸術的な天才は、構造的に工場システムと補完関係にあった」という示

---

<sup>102</sup> Dubrovsky and Graeber, *Another Art World Part 1*, 2019. 筆者による翻訳。

<sup>103</sup> Dubrovsky and Graeber, *Another Art World Part 1*, 2019.

唆に言及している<sup>104</sup>。それは、産業革命とほぼ同時期に、孤立した天才的な芸術家が登場した経緯を明らかにするものであった。つまりは、産業革命を期に、生産力の拡大により大量の工場製品が工場から顔の見えない産業労働者によって生産された。購入した消費者は、大量に生産された工業製品について、どこで、誰が作ったのか、といった諸々の情報を一切知ることはない。よって、工業製品は、特定の作者がいない作品同然として扱われ、匿名である。他方、天才的な芸術家の頭脳からインスピレーションが溢れ出した結果、人々を魅了することができ、とてつもなく美しく、ユニークで、高尚な現代アートの芸術作品がつくりだされると了解されてきた。美術館に訪れる者は、作品が制作された背景や作品が表現する意味に収まらず、芸術家の経歴に至るまでなんでも知ろうとする。何故ならば、芸術家の経歴までもがかかる芸術作品の価値の一部となっているからである<sup>105</sup>。こうして、現代アートを巡る世界において、天才的な芸術家による美的、創造的価値を備えた芸術作品は、神聖化される。よって、一部の天才芸術家の作品は、ますます特権的、個人主義的な性質を帯び、アートの世界は希少性を伴う美的価値とヒエラルキーを基盤として構築されるようになった。一方で、芸術には革命的可能性があると考えられうる。つまりは、人類の存在を正当化するほどの効果をもち、美的価値とヒエラルキーをつくりだし社会関係に影響をもたらした現代アートが示したように、芸術それ自体には社会構造、社会関係を変えてしまいうる潜在的可能性を持ち合わせているのである。

#### 第6節. 芸術的労働、解釈労働 (Interpretive labor, Interpretive Work)、想像的労働、創造的労働 (Creative Work, Creative Labor)

現代アートの世界を支える構造とかかるロジックは、自由という名のもと規制緩和がすすむ金融市場のロジックと重なり合っている。実際、現代アートのギャラリーや展示会などその多くは、世界都市、金融街の近くに集中しており、少数の天才的芸術家によって創作された作品は、高値で取引されている。ミュージアム・オブ・ケア (Museum of Care) 開催のオンライン読書会において参加者の一人は、ニューヨークを例に挙げて、現代アートと金融が支配する世界と、かか

---

<sup>104</sup> Nika Dubrovsky and David Graeber, *Another Art World, Part 2: Utopia of Freedom as a Market Value*, 2019.

<https://www.e-flux.com/journal/104/298663/another-art-world-part-2-utopia-of-freedom-as-a-market-value/>

<sup>105</sup> Dubrovsky and Graeber, *Another Art World Part 2*, 2019.

る世界に抗う人々による芸術的労働、想像的、創造的労働 (Creative Work, Creative Labor) の関係性について述べた。

私がニューヨークに住んでいた頃、コンテンツが島内を移動しているの是一目瞭然でした。ハーレムやワシントンハイツでは、音楽やグラフィティ、世界中に配信されるファッションなどが作られ、ロウアー・マンハッタンでは、保険や法律文書、財務報告書などが作られていました。一方で、高級住宅地のエセ・アーティストたちは、クリエイティブ・エリートのみをしていました。<sup>106</sup>

ロウアー・マンハッタンのオフィス街では、公私の区別が薄れた官僚主義と金融経済が統合された企業官僚主義形態のもと無味乾燥なペーパーワークを増殖させる企業活動が繰り広げられている。この社会経済状況をグレーバーはブルシット・ジョブ化とよんだ。つまるところ、想像力が不必要な官僚的な仕事には、暴力と愚かさだけが残されているのである。一方、ハーレムといった昔から文化活動が盛んなエリアでは現在でも絶えず人々の創意工夫と協働により、芸術が生み出され続けている暴力と愚かさが軸となった社会に対して、被抑圧者は抑圧者について解釈することを強制される状況に置かれると同時に、解釈労働によって絶えず世界をつくり変えようとしているのである。

サンフランシスコにおいても同様に、シリコンバレーと呼ばれているベイエリア南部に広がる一帯では、情報機械産業のオフィスを中心にソフトウェアやサービスの開発がすすめられ、かかる勢いに便乗した金融投資家やヘッジファンド、ベンチャーキャピタルの融合によって金融商品化した世界が広がっている。一方、シリコンバレーからみて北部エリアにあたるサンフランシスコ市内のチャイナタウン、ジャパン・タウン、イーストベイに位置するオークランド市では、芸術活動が盛んに繰り広げられ、彼らのルーツやエスニシティに関わる映画祭といった祭りや地元コミュニティによるブロック・パーティーが各エリアで開催されている。金融商品化、同質化していく世界に対して抗い、集団的に文化を絶えず作り上げていく営みとしての芸術的労働、解釈労働、想像的及び創造的労働が絶えず展開されている。金融資本主義社会の中で、数字の羅列、記号の氾濫と書類仕事が増殖していく現実に対して、文化活動によってもう一度、記号や

---

<sup>106</sup> Museum of Care Reading Group Assembly, Zoom meeting, January 11, 2021.

貨幣に回収されず、売買を至上命令とはしない別の社会をつくりなおそうしている。同時にそこでは、貨幣価値に還元されない別の価値生産、つまり諸価値が発生しているのである。こうした彼らの集団的な芸術活動、文化生産は、現実には労働の領域と重なり合うと同時に、賃労働の領域として収まらない領域が絶えずうみだされているのである。こうした状況下で行われるアジア系アメリカ人による映画制作/上映活動は、制作全般に関わるコストに対して、観客動員数を確保し、利益を見込んで制作するという経営ルールを軸とした産業として成り立っているハリウッド映画産業とは大きく異なる。

彼らの芸術的労働、解釈労働、想像的、創造的労働は、賃労働の領域と不可分の関係にありながらも、賃労働の領域として収まらない領域を持っている。彼らの労働形態は、賃労働/無賃金労働を行ったり来たりしている。無賃金労働がわるいわけではない。むしろ賃金が発生しない労働は、逆を返せば資本に搾取されない労働なのである。すなわち、かかる労働とは貨幣価値によって変換されるものではない。そして重要なのは、かかる賃労働の領域として収まらない領域は、諸価値の領域であるという点である。

彼らの芸術的労働、解釈労働、想像的、創造的労働は、コミュニティ形成と深く関わっている。アジア系アメリカ人は1960年代のエスニック・ムーブメントを発端に、社会から押し付けられたカテゴリーではなく、自分たちによる自己定義を模索しはじめた。しかしながら、歴史的に構築され、また時代遅れとなっているにも関わらず、社会的、生物学的に押し付けられてきた人種や民族といったカテゴリーは、現在に至ってもなお人種/民族集団形成と社会的認識に影響を与え続けている。かかる歴史的、社会的遺産に抗い、自分らの集団を絶えずつくりあげていくプロセスは、芸術、文化生産をおこなう芸術的労働であり、解釈労働、想像的労働及び創造的労働の領域であると同時に、ポスト・フォーディズムにおける労働の質的変容として受け止めなくてはならない。また、解釈労働、想像的労働及び創造的労働は、暴力と愚かさが漸進する社会を払いのける役割を担っているのである。

## 第7節. 価値と諸価値の抗争

そもそも価値の領域には、統一した尺度における体系はなく、また客観的な尺度の設定は不可能に近い。しかしながら、価値は人々の観念として、社会生

活において機能している。グレーバーは、明確な定義が存在しない価値領域について次のように述べている。

だれもが望ましいと合意するなにごとにかあてられる言葉があったとしても一たとえば「真実」、「美」、「愛」、「デモクラシー」一、その本当の意味についての合意は存在しないものである（奇妙なことにこれは貨幣にさえもあてはまる。貨幣とはなにかにかんして経済学者の意見は分かれているのである。）<sup>107</sup>

私たちは、価値という言葉から、金やお金を真っ先に思い浮かべてしまいがちである。つまりは、貨幣価値について考えてしまう傾向にある。加えて、私たちの周りには、市場の存在ありきの貨幣的価値で表現された財やサービスで溢れかえっているが、それでも貨幣価値によって表現することができない領域の価値、つまりは諸価値の領域にある効果が私たちの生活を豊かにしていることはいままでもない。

価値について簡潔に説明することにする。まず価値には、市場価値によって比較可能であり、価格がつけられる単数形の「価値 (value)」と、市場価値によって比較不可能な価格がつけられない複数形の「諸価値 (values)」がある。また、かかる「価値 (value)」と「諸価値 (values)」という観念が実際の私たちの生活において、どのように作用しているかについてグレーバーは以下のように説明している。

基本的に、経済的事象が俎上にあげられるときは「価値」が語られる。その経済的事象とはなにかというと、通常、対価が支払われる仕事、ないし金銭取得を主要な動機とする行動にかかわる人間の努力全般を意味している。諸価値が語られるのはこれが該当しない場合である。<sup>108</sup>

諸価値とみなされる領域での労働に賃金が支払われることは通常ない。換言すると、とりわけ子育て、教育、介護といった家族の世話は、「諸価値 (values)」に関わるため、不払い労働の領域にカテゴライズされてきた。芸

---

<sup>107</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、256頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp195-196.

<sup>108</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、266頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p203.



術制作もしばしば諸価値の領域とみなされる。続けて、経済的価値に置き換えられないがゆえに、諸価値には価値があるという説明をグレーバーは以下のよう述べている。

実にまさにこれ〔数量化不可能であるということ〕こそ、その〔諸価値の〕価値にとって鍵となるとすらいうことができよう。商品は、他の商品と比較することができるまさにそのことによって経済的「価値」をもつ。それと同様に、「諸価値」は、なにものにも比較することができないそのことによって価値があるのである。諸価値は、それぞれにかけがえなく、尺度しえないものとみなされている。要するに価格のつけられないものとみなされているのである。<sup>109</sup>

よって、不払い労働(unpaid labor)の領域にも関わる「諸価値(values)」とは、経済的価値に置き換えられないため、価値があるのである。話を芸術作品に即して、考えていきたいとおもう。そもそも芸術作品は、美しさといった他の作品と比較不可能で、数量化が不可能な諸価値において価値があるとみなされている。しかしながら現実には、芸術作品は、数量化可能な価値に置き換えられている。つまりは貨幣に交換され、芸術作品は売買されているのが現状である。現代アートのように高値での取引を可能にしたプロセスとは、ロマン主義の遺産によってもたらされた芸術作品の希少性と、金融資本のロジックの合流にあると考えられうる。

つまり芸術作品は、数量化可能な貨幣価値とは異なり、美、インスピレーションといった要素において諸価値があるとされているのだが、かかる希少性を求め、お金で交換しようとする人が現れるのである。こうして、金融資本、金持ちと芸術との合流点がここに現れるのである。言い換えると、諸価値(values)としての芸術作品は、価値(value)つまり貨幣によって買収される。言うまでもなく、このゲーム自体は、市場の形成がそもそもなければ成り立たないわけである。つまりは、市場のロジックから外れる道を見出さなければ、このゲームから逃れられないのである。

## 第8節. 現代の仕事の定義と芸術家の労働

---

<sup>109</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、267頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p204.

グレーバーによると、現代社会における仕事の定義についての核心的側面については以下の二つのポイントがあるという。

①仕事はふつうであれば誰もすすんでやりたいとはおもわないものであるという定義である（だから罰なのである）。②私たちは仕事を仕事それ自体を超えたなにごとかを達成するためにおこなっているという定義である（だから創造なのである）ところが、この「超えたなにごとか」を「創造」として把握すべきなのかといえ、それは自明ではない。・・・つまり、何かを「創造している」ということのできない仕事が、仕事のうちのほとんどなのである。<sup>110</sup>

かかる仕事の定義に照合してみると芸術家の労働は、①「誰もすすんでやりたいとはおもはないものである」という箇所には該当しない。芸術家がすすんで作品を制作しているならば、それは労働とみなされないのかもしれない。次に、②を検討すると、芸術作品を創造しているという点で該当しているということになる。かかる二点からの検証からは、現代社会の一般的な労働の定義とはズレがある点が明らかとなるが、芸術家の労働についての決定的な答えとはなっていない。加えて、企業官僚制資本主義と金融資本主義が漸進し、ブルシット・ジョブの増殖が顕著となった社会状況において、グレーバーは労働の価値について次のように述べている。

労働の価値は生産するものにあるとか他者に供与する便益にあるとはみなされなくなるのにもとない、労働の主要な価値はますます自己犠牲にあるとみなされるようになる。<sup>111</sup>

つまりは社会的価値を見出しにくい現在の労働状況において、自己犠牲の度合いが高まれば、比例して報酬も高くなるということである。反対に労働が楽しいならば、報酬が低くても妥当であるとみなされている。こうした状況が当然とされる社会認識が、ブルシット・ジョブの増殖を支えている。さて、一般的にものを書いたり、作ったりする過程は、生みの苦しみがあると、よく形容されると

---

<sup>110</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、289頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p221.

<sup>111</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、318頁。Graeber, *Ibid*, 2018, p246.

同時に、楽しみの要素も含んでおり、また芸術の追求は諸価値の領域にカテゴライズされる芸術家の労働をいかに考えていけばよいのであろうか。

実際、芸術家たちは、作品を売って得た金で生計を立てているが、お金のために芸術作品を作っていると気づかれてはいけない。ここに一般的な労働者との違いがあるように考えられる。そこには、芸術家はお金のために、あるいは生計を立てるために芸術作品を作っているのではなく、もっと高尚な価値のために作品をつくっているという想定がどこか支配的であるように考えられる。だからこそ、芸術家は彼らの仕事をとおして、様々な価値を生む可能性を秘めており、かかる実験ができると考えられてしまうのであろう。実際、オーディエンスを虜にするような派手でエクセントリックな展示やパフォーマンスは、世界中の美術館や展示会で行われている。しかしながら、ベンヤミンによるファッションについての論考、つまりは定期的に流行が作りだされているだけで根本的な変革は起きていないと捉えた議論を援用したグレーバーは、現代アートにおいて既存の境界やジャンルを乗り越えようとする芸術的試みはほとんどすべて失敗に終わっていると批判した<sup>112</sup>。つまりは、どれだけ派手でエクセントリックにみえるパフォーマンスであろうが、そこには既存の秩序を転覆させるような兆しはないと捉えているのである。

前衛芸術家たちを振り返ると、より前衛的な作品をつくりだそうとする者がいたが、最終的にはその多くが自分たちの活動をとおしてより疎外のない生活を模索した<sup>113</sup>。ところで、アジア系アメリカ人の映画制作活動は、一見すると資本主義社会アメリカにおいて、つまり構造的には文化生産の商品化から逃げられない環境におかれていることは否定できない。しかしながら、かかる労働を芸術的労働と捉え、必ずしも貨幣的価値に還元されない人間、社会的関係の構築、集団的組織化の力といった論点から検討すると、社会変革のモーメントを見いだすことができるのである。次の節では、映像制作の現場に焦点をおいて、人間、社会関係の構築過程を論じていくことにする。

---

<sup>112</sup> Graeber, *Ibid*, 2011, p14.

<sup>113</sup> デヴィッド・グレーバー（著作）、栗原康（翻訳）「前衛主義のたそがれ」、萱野稔人（編集）、『VOL 03 Volume One : Anti-Capitalism / Art Volume Two: No! G8』、以文社、2008年、37頁。

## 第9節. 各々がそれぞれの役割を担う映画制作の現場

アジア系アメリカ人映画に関わって、監督、カメラクルー、音響、プロモーションを担う人々の労働、芸術的労働をどのように考えることができるのであろうか。一般的にインDEPENDENS映画とカテゴライズされる映画制作は、ハリウッド映画界のような完全なる巨大なマーケットを稼働させている商業主義的映画産業とは大きく異なり、ほとんどがギリギリの予算でどうにか完成までこぎつけているのが現状である。そのためファンド集めに苦戦して、完成予定が数年伸びてしまうといった事態は頻発している。映画制作の予算は逼迫しているため、クルーの労働のほとんどは、不払い労働およびボランティアとなっているのが現状である。換言すると、彼らの労働とは、支払い労働と不払い労働の領域に跨る労働であり、そこには企業官僚制組織のなかで組織のヒエラルキーを優先した、クリエイティビティが発揮されづらく、個人の意見が採用されにくい環境とは大きく異なる。その現場とは、基本的にはそれぞれが、それぞれの能力に合った役割を自然と担い、よい意見があると積極的に採用されていく、本来あるべきである環境、組織の形態が彼らの現場にはある。例えるならば、ハリウッド映画産業を一般的に民主主義国家において普及している選挙投票から政治家を選出する間接民主主義とすると、インDEPENDENT映画の状況は、顔のみえる範囲での意見交換するプロセスを大切する合意形成を基本とした直接民主主義の原則を適応した活動である。そこでは、仲の良い友人たちとともに、水平的組織化において映画制作プロセスが稼働しているのである。クルーは比較的少数であり、かつ形式だった組織が存在しないがため、お互いの意見を尊重することが可能となっている。つまりは、トップダウンによる意思決定や命令がなく、上司の顔色を伺うためにエネルギーを費やすことや、無駄な付度が限りなく存在しない環境なのである。これはまさに、クリエイティビティを発揮するために最も大切な要素であるといえる。一方、企業官僚制が蔓延したハリウッド映画産業では、企画を立てるのにもエクゼクティブといった役職がつく上役が長々と会議を開き、時間とアイデアを無駄にし、実際のクリエイターたちがクリエイティビティを発揮できる余白がなくなってしまっているのが現状である<sup>114</sup>。

サンフランシスコ・ベイエリアで現地調査をしていると、予期せぬ形でアジア系の友人から映画制作に関する情報が入ってくる。また、私自身がその現場

---

<sup>114</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、240-248頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp182-188.

にたまたま居合わせるという運びになることがあった。映画制作と聞くと大変大掛かりで、ちょっとはそとでは実現しないように思うかもしれないが、ベイエリアでは日常的に映画制作活動が営まれている。興味深いことに、映画制作のはじまりは、些細な個人の願望や閃きから始まることが多いようである。実際に私の友人界限で起こった話によると、脚本を書きたい衝動にかられたある男性が、執筆し始めた。その話を友人たちにカフェやレストランの席で話すと、そこから数日後、瞬く間に、脚本の趣旨にも興味を示しており、カメラ・ワークが得意で映画作りに興味のある別の友人を紹介したのであった。仮に、カメラや音響、アクティング等にかかわる経験や自信がないとしても脚本に興味があって映画制作に参加したければ、何らかの役割を担当することが可能である。例えば、映画制作におけるスケジュール管理には、責任が伴うが、映画に関わる専門的、あるいは技術的な経験がなくても、クルーにシェアするカレンダーを作成していく作業であれば、比較的簡単にいつでも始めることができる。私は、現地で映画制作に飛び入り参加した経験がある。ダンス・シーンの撮影の際に、通行人がカメラに入らないようにするための交通制御をおこなった。また別の機会では、美術大学で教鞭を執り、かつアーティストとして世界を股にかけて活躍している友人の家兼スタジオにたまたま寄ることになった。その友人が、映像シーンのカットに迷っているから、どちらのシーンがいいか意見を聞かしてほしいと、私に尋ねてきた。当時、芸術に対して私のような素人に意見を尋ねてくれたことは、大変驚きであった。芸術の知識の有無やバックグラウンドに関わらず接してくれていたのである。つまりは、制作過程に関わって、ヒエラルキーがない関係性が成り立っていたのである。また、この友人は、アジア系映画祭の一つであり、サンフランシスコ・ベイエリアで毎年11月に開催される、ディ・アイ・シー インターナショナル・サウスイースト・アジア・フィルム・フェスティバル(The I-SEA, International Southeast Asia Film Festival)<sup>115</sup>の主催者の一人である。

加えて、プロモーションを担当している別の友人は、短編の映画トレーラーをフェイスブック(Facebook)やインスタグラム(Instagram)といったソーシャ

---

<sup>115</sup> ディ・アイ・シー インターナショナル・サウスイースト・アジア・フィルム・フェスティバル(The I-SEA, International Southeast Asia Film Festival)は、ディアスポリック・ヴィエトナムーズ・アーティスト・ネットワーク(Diasporic Vietnamese Artist Network)によって開催されている。東南アジアに関わるディアスポラの歴史、アイデンティティ、創造性に焦点を据えた作品が上映されている。

ル・ネットワーキング・サービスにアップロードし、映画のフライヤーをどこでも持ち歩き、ひたすら配るといったことを実践していた。プロモーション活動は、ネットワーキング拡張を促すコミュニティ形成にとって重要な仕事の一つである。またそれは、社会的人間関係の構築であり、社会的価値に関わる領域の仕事となる。さらには、資金調達に尽力する彼らの活動について、地元コミュニティで顔が利く有力者に話を持ちかけ、企画を盛り上げていくことが、協力者や助成金を得るために重要な仕事であるようであった<sup>116</sup>。サンフランシスコ・ベイエリアには、非営利団体が数多く設立されており、アジア系住民のためにつくられた組織も多数運営されている。資金援助の交渉がうまくいくと、かかる組織や関係者から、資金に限らず何らかの援助がもたらされる。また、大概の場合、非営利組織のトップに就任している人物は、かかる活動がコミュニティのために尽力しているが故にアジア系の人々から慕われており、年配者の場合には特に尊敬されている方が多い。そのため、こうした人物からの支援を受けると、物事の融通が効きやすくなり、コミュニティにおけるプロジェクトに対する信頼性が高まるのである。人々の関心が高まり、プロジェクトが潤滑にすすみ、コミュニティ形成が促進されるという好循環が回りだすのである。

#### 第10節. 非物質的労働におけるコミュニズム

先に述べたように、グレーバーはポスト・フォーディズムに関わる議論においてイタリアのマルチチュード派によって練り上げられてきた非物質的労働の議論は不完全で、やや一貫性に欠ける議論として批判してきた<sup>117</sup>。しかし、批判と同時に以下のようにグレーバーは非物質的労働にコミュニズム<sup>118</sup>の要素を見出し新たな労働が持つ可能性を予感していた。

熱心な支持者にとって、非物質的な労働は、新しい形の共産主義を象徴する点において、とても重要なのです。それは、社会的協力の形態によって価値を創造する方法であり、言語の集団

---

<sup>116</sup> 筆者による参与観察、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2017年3月7日。

<sup>117</sup> Graeber, *Ibid*, 2011, p87.

<sup>118</sup> 序章で述べたように、ここでのコミュニズムは、「各人はその能力に応じて貢献し、各人にはその必要に応じて与えられる」を意味する。いわゆる共産主義とは異なる。グレーバー、前掲載書、2018年、142頁。Graeber, *Ibid*, 2011, pp94-95.

的創造と同じように、誰もが参加していると言えるほど分散しており、会計の可能性がなく、インプットとアウトプットを計算することが不可能な方法である。資本主義は、このような共産主義的な実践によって生み出された価値を単に実現するだけの存在になりつつあり、それによって純粹に寄生的な力、つまり、自分とはまったく異なる創造性の形態から賃料を引き出す一種の封建的君主制になりつつある。<sup>119</sup>

つまり、かかる議論から導き出される展開とは、社会的協力によって価値をつくり出す非物質的労働の側面を新しいコミュニズム(a new form of communism)において捉え直すと、賃金制を超えた、あるいは食い破る可能性を秘めた、より広い射程において労働を捉え直すことが可能となるといえよう。

グレーバーの議論は、これまで主にポスト・フォーディズムにおいて位置づけられてきた非物質的労働の概念に関わって、資本主義の前提への見直しを迫り、かつ根本的理解を転覆させ、さらには資本主義衰退への道筋を予感させる。とりわけグレーバーの資本主義に対する理解は、資本主義を私たちの社会の隅々まで覆い尽くすトータルなシステムとして捉えないところにポイントがある。というのは、グレーバーは、マルクス主義者や反資本主義者たちの見解、つまりは資本主義をトータルなシステムとして捉え、よっていかなる労働も生産的労働か非生産的労働に還元してしまう議論に対して異議を唱えているのである<sup>120</sup>。換言すると、生産的労働か非生産的労働という二元的区分への批判となる。既存の二元的区分が前提となった議論では、将来の労働力再生産の手段を準備するためとして補足的に扱われている労働、つまり不生産的労働として捉えられている領域の労働について、資本主義の認識枠組みのみにおいて捉えられており、労働とみなされてこなかった領域についての十分な批判的検討には至らなかった。また、非物質的労働に関する理論的構築の貢献者の一人であるネグリの議論は、労働の実質的包摂を主軸にしているため資本主義の外部や、資本主義以外の可能性を不可視にしているとグレーバーは以下のように批判している。端的に述べると、ネグリの議論では人間経済の可能性を削ぎ落としてしまっているのである。

---

<sup>119</sup> Graeber, *Ibid*, 2011, p99. 筆者による翻訳。

<sup>120</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、263-266頁。Graeber, *Ibid*, 2018, pp201-203.

ネグリは、すべてのもの、すべての具体的なジェスチャー、交換、変換を、「リアルなサブサンプション(real subsumption)」という巨大なミキサーのようなものに投げ込む傾向がある。-すべては労働であり、すべての労働形態は資本の論理のもとで機能しているのだから、ある形態と別の形態の違いを分析する必要はほとんどない。ましてや、コレクション・エージェンシーやファッション業界、あるいは特定の資本主義的サプライチェーンの実際の組織を分析する必要はない。<sup>121</sup>

また上で述べたように、映画制作の現場では、賃金労働となり得ない労働も多分に含まれており、そこでは、水平的ネットワークによって集合したクルーたちの協働作業による、集団的な創造的作業が展開され、社会的価値が増殖している。賃金労働となり得ない労働は、市場の効果による貨幣換算を妨げる。つまりは、かかる労働は経済的価値によって計られることはない。そこには、諸価値の領域が広がっている。ゆえに、彼らの活動の実践現場には、繰り返すが各々がそれぞれの役割を担うといったコミュニズムの原理に基づいているのである。

---

<sup>121</sup> Graeber, 2011, *Ibid*, pp98-99.



## 第2章. ポスト9.11に想起される日系アメリカ人の記憶

### -四世タッド・ナカムラのドキュメンタリー映画をめぐって-

#### 第1節. 作品の背景と考察目的

本研究では、ポスト9.11において、日系アメリカ人の記憶がどのように想起されているかについて、ロサンゼルスを拠点に活動する日系アメリカ人、四世の映画監督、タッド・ナカムラの個人的な経験と映画三部作、『イエロー・ブラザーフッド』(*Yellow Brotherhood*, 2003)、『ピルグリメッジ』(*Pilgrimage*, 2007)、『ア・ソング・フォー・アワーセルフズ』(*A Song for Ourselves*, 2009)から考察する<sup>122</sup>。これらの作品の背景には、9.11を発端としてアメリカ社会に急速に広まったイスラム教徒やアラブ系に対する差別や偏見がある<sup>123</sup>。こうした特定のエスニック集団への差別は、第二次世界大戦開始と同時にアメリカ政府によって、全ての日系人は「敵性外国人」とされ、それにより強制立ち退き、強制収容を強いられた記憶を想起させるものであった。アメリカ政府によって、戦時のヒステリーを根拠に特定のエスニック集団に対して無差別に作動される差別や不当な扱いが、半世紀以上経過した現在においても変わることなく存在していることを示している。これら三部作のなかでナカムラによって想起された、戦時の強制収容、60年代の記憶が9.11後のアメリカ社会、現在の日系社会においてどのよう

---

<sup>122</sup> Nakamura, Tadashi H. *Yellow Brotherhood*, 18 min., (Los Angeles, CA: Visual Communications, 2004, DVD. *Pilgrimage*, 22 min., DIGITAL VIDEO, *Pilgrimage* was made possible in part by grants from the California Civil Liberties Public Education, UCLA in LA Community Partnership Program and the California Wellness Foundation, *Pilgrimage* is a production of the downtown community media center. A partnership of Little Tokyo Service Center and UCLA Asian American Studies Center's Center for Ethnocommunications, 2006, DVD. *A Song for Ourselves*, 35 min., the Center for Asian American Media, Nathan Cummings Foundation, Ford Foundation and California Civil Liberties Public Education Program with additional support from the UCLA Alumni and Friends of Japanese Ancestry Endowed Chair and UCLA Asian American Studies Center, 2009, DVD.

<sup>123</sup> ジュニア、アダルベルト・アギーレ、ターナー、ジョナサン・H『アメリカのエスニシティ、人種的融和を目指す多民族国家』、(高杉忠明、ギブソン松井佳子、武田明典、福田守利、吉田光宏、黒崎真、榎本智子、柳沼孝一郎、阪田恭代、菊池達也訳)、明石書店、2013年、409-413頁。

な意味を持っているのかを、ナカムラのライフヒストリーと映像制作という行為を問い、絡め合わせるなかにおいて考察する。

## 第2節. これまでの日系アメリカ人研究と研究の方法

これまでの日系アメリカ人研究において、日系人を人種エスニック編成から解釈した世代論は、19世紀中頃から当初は労働者としてアメリカに渡った最初の世代を一世とし、以下、二世、三世といったように世代別に分類し、世代ごとの経験の特徴づけ一般化することで、日系人のエスニック・アイデンティティの変容について論じるものであった。強制収容経験と日系人のエスニック・アイデンティティの変容について述べた竹沢は、歴史的体験を吟味するため各世代の証言をもとに、特に個人の苦しみを経験と集合的記憶の相互作用に注目し、補償運動をとおして、日系アメリカ人強制収容所の経験に関わる再解釈について検証し、各世代のエスニック・アイデンティティの変容について論じた<sup>124</sup>。歴史社会学の立場から、南川は、時間軸に応じた変化、社会経済学的な影響、アメリカ社会の人種エスニック編成とナショナリズムを視座に置き、日系人のエスニシティと人種観の変遷過程を論じた<sup>125</sup>。また、ポスト公民期において、アメリカ社会とアカデミアの要求に応じることによってエスニック多元主義とJACLによって描かれた愛国主義的ナショナリズムを軸とした日系人の自画像が構築された過程について分析されてきた<sup>126</sup>。本研究は、これまでの日系人研究を参考にしつつ、ナカムラ自身の経験、作品、そして映像制作について着目することにより、ナカムラによってどのように日系人の記憶が想起され、ポスト9.11において再び意味付けられ、モデル・マイノリティ言説からの脱却が行なわれようとしているのかについての考察を目的としている。

対面インタビューから明らかとなったナカムラの個人的なライフヒストリー、そして個人的な経験とは切り離して考えることができない作品に込められた意図や思いが、この三部作においてどのように表現されているのか分析する<sup>127</sup>。文

---

<sup>124</sup> 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ-強制収容と補償運動による変遷』、東京大学出版会、1994年。

<sup>125</sup> 南川文里『日系アメリカ人の歴史社会学-エスニシティ、人種、ナショナリズム』、彩流社、2007年。

<sup>126</sup> 南川、前掲載書、2007年、222、224-226頁。

<sup>127</sup> ナカムラの個人的な経験とこれら三部作のあいだに、どのような関連があるのかを明らかにするべく、ナカムラへの対面インタビューをおこなった。筆者によるナカムラへの対面インタビュー、アメリカ合衆国、ロスアンゼルス、2012年2月7日実施。また、リト

学研究や映画研究の分野において、作品を分析する際に、作者の意見を考慮に入れることは、適切なアプローチではないとする意見もある。しかしながら、本研究は、日系人にとっての映画制作は、彼ら自身によって、彼ら自身へ向けて行なわれている行為であることを念頭に置いている。従って、作者であるナカムラの経験、及び、作品に込められた思いや意図を分析の対象とすることは日系人の映画制作に対する姿勢と共鳴することに値し、適切であると考えられる。

### 第3節. アジア系アメリカ人シネマとナカムラの映画制作活動

アジア系アメリカ人シネマや映画制作が彼らにとってどのような意味を持っているのか明らかにするべく、その成り立ちや背景について振り返ることとする。60年代後半、イエローパワー・ムーヴメントの一環として始まったアジア系アメリカ人シネマの活動は、当時彼らに抱かれていたネガティブでステレオタイプ化されたイメージを是正し、彼ら自身によって、彼らの経験を記録することを目的として始まった<sup>128</sup>。それから数十年の歳月が流れた現在において、ナカムラの映画制作の根底にあるものは、日系人が日系人自身を知り、考えるための映画作りである。なぜなら、背景には現在においてもなお、ハリウッド映画やテレビ番組の上では、エスニック・マイノリティに対するステレオタイプ化され人種差別的な表象、あるいは誤解を招くような表象が見受けられる状況にあるからである。アメリカ社会が白人を中心とした人種、エスニシティ編成の構造から離脱できずにいるように、スクリーンの上においても同じ事態が起り続けているのである。日系人や他のエスニック・マイノリティたちは、このような不当な人種・エスニック ヒエラルキーの性質を帯びたメディアを日常的に目にしている。それにより、彼らはそのようにして作り出されたイメージを目にすることによって、それらをいつの間にか内在化するようになった。また、このことはモデル・マイノリティ言説と関連している。ナカムラの映画は、かかる状況において、彼ら自身によって制作されたイメージに触れる機会が少ない日系人やアジア系アメリカ人、他のエスニック・マイノリティの人々のために制作されているのである。インタビューでナカムラは、以下のように語った。

---

ル・トーキョーで、日系コミュニティに関わる人々にインタビューを実施した。2012年2月1日～2月14日。

<sup>128</sup> Xing, Jun *Asian America through the lens: history, representations, and identity*, AltaMira Press, 1998, p35.

私の父親から学んだことがあります。それは、アジア系ではない人や白人のために日系アメリカ人を表象し、あるいは説明するために映画を制作し、日系人自身についてマジョリティに説明する代わりに、日系人について私たち自身に説明することです。そして、私たち自身にとって重要なことは、異なる日系人のイメージを示すことです。なぜなら、私たちは普段それらを目にする機会がないのです。私たちは、自分自身が何者であるかを良く理解できていないのです。したがって、私たちは私たちのために映画を制作する必要があるのです。それは、私たち自身を構築する助けになります。私は、映像制作をそういったつもりのもとで、試みてきました。もちろん、全ての人々に私の映画を鑑賞して頂きたいです。しかし、想定している観客は、アジア系アメリカ人や日系アメリカ人です。日系人以外の人々にも同様に、映画を自分自身に引き寄せて、見てもらいたいです。ただ私は、私たちに向けて制作された作品が足りていないと感じています。全てのハリウッド映画は、私たちに向けて制作されているとは思いません。テレビ番組についても同様に感じています。万人にとっての映画はたくさんあると思いますが、私たち日系人に私たちのための映画が必要です。私は、私が伝える必要がある話があると思っています。<sup>129</sup>

このように、ナカムラの映画は、日系人によって、日系人の為に制作されているのである。映画制作、あるいはそれを鑑賞する行為によって、彼ら自身の姿を目にし、彼ら自身に対する理解を深めることで、アイデンティティを構築している。それはつまり、映画を制作することによって、また、映画を鑑賞する行為によって、彼ら自身の経験を吟味し、確かめているのである。繰り返すが、この意味において、ナカムラの個人的なライフヒストリーや彼の作品に込められた思いをドキュメンタリー分析と切り離すことはしない。本研究は、このような視点から、彼の経験や思いがどのように作品に現れているかを考察することによって、ポスト9.11において日系人の記憶がどのように想起され、どのような意味が現在にもたらさせられているかを考察する。

---

<sup>129</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、アメリカ合衆国、ロスアンゼルス、2012年2月7日。

#### 第4節. 監督、タッド・ナカムラと作品紹介

タッド・ナカムラ (Tad Nakamura) は、1980年、ロスアンゼルス生まれの日系アメリカ人四世である。ユニバーシティ・オブ・カリフォルニア・ロスアンゼルス (University of California, Los Angeles 以下: UCLA) 在学時から、日系アメリカ人コミュニティを題材にしたドキュメンタリー映画、イエロー・ブラザーフッド (*Yellow Brotherhood*, 2003) を発表し、2008年度のサンダンス映画祭ではCNNのヤング・ピープル・フー・ロック (Young People Who Rock) の最も若い映画制作者の一人に選ばれるなど、数々の国際映画祭で評価され、受賞した経歴がある<sup>130</sup>。彼の作品の多くは、日系アメリカ人やコミュニティの歴史や経験を題材として描かれている。本研究では、ナカムラの代表的な三部作、『イエロー・ブラザーフッド』 (*Yellow Brotherhood*, 2003)、『ピルグリメッジ』 (*Pilgrimage*, 2007) と『ア・ソング・フォー・アワーズセルブズ』 (*A Song for Ourselves*, 2009) を考察の対象とする。また、ナカムラの両親、ロバート・ナカムラ (Robert Nakamura) とカレン・イシズカ (Karen Ishizuka) は、共にドキュメンタリー映画作家であり、ナカムラの作品の制作に加わっている。

『イエロー・ブラザーフッド』 (*Yellow Brotherhood*, 2003) は、ナカムラが六歳の頃から所属していた日系アメリカ人のバスケットボールチーム、ベニス・イエロー・ブラザー (Venice Yellow Brother) を題材にしたセルフポートレートドキュメンタリーである。60年代、日系人コミュニティから誕生したバスケットボールチームの変遷を辿ることによって、日系コミュニティの形成、再編を遂げるコミュニティの動きと、日系人、個人の経験を想起し、内省的かつ批判的な視点で描いている。ベニス・イエロー・ブラザー (Venice Yellow Brother) が成り立つ時代背景、すなわち、60年代、アフリカ系アメリカ人による公民権運動やベトナム反戦運動に触発された日系人自身のエスニック意識、政治的意識の高揚が描かれている。日系コミュニティのバスケットボール・リーグの変遷とナカムラ自身の経験を想起することによって、日系コミュニティと日系人個人が重層的に存在している様子が描き出されている。

次に、『ピルグリメッジ』 (*Pilgrimage*, 2007) は、「1942年、国防省はアメリカ合衆国がかつて一度も行なったことがない手段をとった。多数の自国民を強制収容所に収容したのである。アメリカ史における、この恥じるべき章は、二十七年もの間葬られていたのである。」という語りから始まる。

---

<sup>130</sup> [http://www.tadashinakamura.com/Tadashi\\_Nakamura/Bio\\_-\\_Tadashi\\_Nakamura.html](http://www.tadashinakamura.com/Tadashi_Nakamura/Bio_-_Tadashi_Nakamura.html)

この語りが痛烈に示すように、アメリカ史から長年にわたり剥ぎ取られていた日系人強制収容所についての告白からこの作品は始まる。注目すべきは、ナカムラによって想起された戦時の日系人強制収容の経験は、これまでの日系アメリカ人研究者や日系人映画監督らによって伝えられてきたようなある程度類型化した語り口とは異なる点にある。1965年に三世たちによって始められた日系人強制収容所跡地への巡礼は、彼らのルーツを再確認する契機となった。それに対して、イスラム教徒やアラブ系に対する差別や偏見が広まったポスト9.11のアメリカ社会の状況において、強制収容所の経験はこれまで日系人に限定されていた経験から、アメリカ政府がエスニック・マイノリティに対して行なった不正義の象徴として描かれ、他のエスニック・マイノリティと共有すべき経験として再解釈されている。とりわけ9.11後のアメリカ社会で顕著に見受けられる、アラブ系やイスラム教徒に対する人種差別と重ね合わせるように、問題意識が提示されると同時に強制収容所の経験を経た日系人がとるべき行いや責任といったものが問いかけてられている。

三部作の三つ目の作品である『ア・ソング・フォー・アワーセルフズ』(*A Song for Ourselves, 2009*)は、60年代後半、公民権運動を契機として巻き起こったイエローパワー・ムーヴメントにより、エスニック意識が高揚するなか、日系アメリカ人のミュージシャンとして活動し、その後学校の教員を勤め、2005年にこの世を去るまで法律家としてコミュニティやマイノリティのために尽力した、日系三世、クリス・イイジマ(1948-2005)の生涯に迫るドキュメンタリー作品である。ナカムラは、とりわけ公民権運動が広がりを見せ、アメリカ政府によるベトナム戦争への不信が高まった60年代のイイジマの音楽活動に注目し、日系アメリカ人とは何者なのか、また、どのように理解することが出来るのかという問いを生前に撮られたイイジマへのインタビュー映像、ミュージシャンとしての活動記録、彼の家族や近しい友人たちの語りからなる映像とともに表現した。そこでは、アメリカ社会において、現在もなお根強く残る人種差別の問題といった、社会的不正義に対する日系人の姿勢に対して批判的であったイイジマの主張が取り上げられている。

## 第5節. 想起される日系人の経験

### 1. 他者との出会い

タッド・ナカムラにとって、日系アメリカ人であるということ認識するとい

うことは、一体どのような環境のなかで、どのような行為や経験によってその認識が彼自身のなかに、もたらされたのであろうか。もっとも、彼にとって日系人であるという認識が生まれたのは、日系コミュニティのなかで過ごした幼少期ではなく、他のエスニック・マイノリティと出会った UCLA 在学時代であった。まずは、幼少期から大学進学前までのナカムラ個人のライフヒストリーを振り返ることによって、それを考察する。

日系人の両親のもとに生まれたナカムラは、幼少期、日系アメリカ人コミュニティを中心とした生活を送った。日系人が多く集まる寺や、日系アメリカ人バスケットボールチーム、ベニス・イエロー・ブラザー(Venice Yellow Brotherhood)といったリトル・トーキョーのコミュニティ活動に積極的に参加していた。幼少期からUCLAへの進学前までの、ナカムラを取巻く環境が、インタビューから明らかになった。ナカムラは以下のように語った。

大学への進学前、私が唯一所属していたのは日系人コミュニティでした。それは本当のことです。イエロー・ブラザーフッドでした。UCLAに進学するまで、バスケットボール・リーグと仏教寺院といった日系人のコミュニティに参加していました。ロスアンゼルスは多様な人口で構成されていますが、私はUCLAにおいて、それを実感しました。そのことによって、本当に人生が変わりました。思うに、以前から多様な場所であることも、そのような場所で育ったことも分かっていました。しかしながら、私とそれを歴史的に結びつけて考えることができなかつたのです。知っていましたが、関連性を感じることはできなかつたのです。<sup>131</sup>

このように、ナカムラが幼少期から大学進学までを過ごした環境は、多人種、多民族社会のロサンゼルスであるが、そこに存在する日系人社会は閉鎖的なものであった。ナカムラは、高校卒業後、UCLAに進学し、これによってナカムラの生活環境は大きく変化した。日系人コミュニティに限られていた環境から、より多人種、多民族な環境に身を置く契機となり、ナカムラが彼の人生を通じて最も影響を受けた経験の一つとなった。日系コミュニティ中心だった高校までの生活とは異なり、他のエスニック・マイノリティの学生たちに感化されたUCLAでの

---

<sup>131</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、アメリカ合衆国、ロスアンゼルス、2012年2月7日。

学生時代を振り返って、ナカムラはインタビューで次のように語った。

実のところ、私の活動の主な理由は、学生時代の UCLA での経験にあります。おそらく、わたしは他の日系アメリカ人や他の少数派の人々から政治、アイデンティティや歴史を学びました。よって、学生として多くの歴史や他のコミュニティの問題に触れたのです。そして、それは現に本当に日系アメリカ人としての私自身のアイデンティティを探ることを助けてくれました。なぜなら、他の集団の祖父母の歴史や、他の国での問題を知りましたから。そして、そのことによって、私は自分のグランドのなかで同じような試みることを促しました。私にとって、それは最も大切なことです。<sup>132</sup>

このように UCLA での経験は、現在のナカムラの制作活動と深く結びついている。学生生活を通して、他のエスニック・マイノリティとの接触が増え、彼らのコミュニティの状況、問題、経験、歴史等を知り、理解することによって、日系人の経験やナカムラ自身のことがより深く理解出来るようになったという。ナカムラの UCLA での個人的な経験において、他のエスニック・マイノリティを理解することは、ナカムラがジャパニーズ・アメリカン (Japanese American) であることを理解する上で助けとなったという。日系人以外のエスニック・マイノリティと出会ったことにより、自らの理解が深められていった。換言すると、彼にとって他者に出会うことは、自己に出会うことを意味したのである。他者との出会いによって、自己に対する理解を深めたナカムラは、クリス・イイジマ (Chris Iijima) からの影響を 次のように語った。

クリス・イイジマから学んだ最も大切なことがあります。彼によると、七十年代、三世たちはアジア系アメリカ人のアイデンティティという考えを育てました。最も重要なことは、アジア系アメリカ人であることに誇りをもつことではなく、社会に対して進歩的な視野を持つことである。そして、実際に最も大切なことは、そういった視野を持ったアジア系アメリカ人であるということです。世界を異なった角度からみるこ

---

<sup>132</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、アメリカ合衆国、ロスアンゼルス、2012年2月7日。



とが可能であるということ、そして、連帯を持つということ、そして、あなた自身のコミュニティだけではなく他の人々のコミュニティのなかにも同様に正義を見出だそうとすること。<sup>133</sup>

上で述べたように、ナカムラにとって UCLA での経験は他者との関係において自己と出会うことであった。そのような経験をしたナカムラによって、イイジマのアジア系アメリカ人像が解釈された。それは、アジア系アメリカ人ということに自尊心を持つことだけではなく、白人を軸とした人種、エスニシティの編成から成るアメリカ社会でアジア系アメリカ人が人種差別や排斥の対象とされ、不当に扱われてきたように、現在もなおエスニック・マイノリティとして不当に扱われ、アメリカ社会の不正義にさらされている他のエスニック・マイノリティに関心を持ち、広い視野で社会を考えることが必要であるということである。つまりイイジマの主張は、他のエスニック・マイノリティとの出会いによって、自己を発見してきたナカムラの経験と共鳴するものであった。

## 2. 「モデル・マイノリティ」言説の外部

日系人を含むアジア系アメリカ人に対して抱かれ、そして彼ら自身も内在化してしまっている「モデル・マイノリティ」というイメージは、一体何が問題なのであろうか。アジア系アメリカ人は、白人優越主義のアメリカ社会において、主流社会が彼らに要求するモデル・マイノリティ像を否定することができなかつたのである。なぜなら、それを否定することは主流社会にとけ込み、成功を収めることを拒絶することに値したからである。そのような状況のなかで、「モデル・マイノリティ」というイメージを内在化した者は、より一層自らの経済状態や社会的ステータスを高く評価した。それによって、マイノリティ集団間の序列化や差別・偏見を引き起こすこととなった。このことは、他者、すなわち他のエスニック・マイノリティとの出会いを阻害することにつながるのである。他者との出会いは、モデル・マイノリティ像からはみ出した自己を、新たな自己、本当の姿として発見することである。つまり、他者との出会いのなかに、新たな自己との出会いがあるが、モデル・マイノリティ像を内在化することにより、それを阻害したのである。映像という媒体により、モデル・マイノリティ像に当てはま

---

<sup>133</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、アメリカ合衆国、ロスアンゼルス、2012年2月7日。

らない像を示すことにより、それを制作、あるいは鑑賞する行為を通じて、新しい自己を発見することができるのである。ナカムラは、次のように語っていた。

私は、アジア系アメリカ人と日系アメリカ人が何でも彼らが望んでいることを実現していることについての事例を表していきたいと思っています。それは、医者でも専門家でもないのです。本当に、私たちは芸術家にもなることができますのです。日系人は、活動家にも音楽家にもなることができますのです。なぜなら、そういったことは、専門職の職業人と同じように奨励されています。私は、私たちは私たち自身をそのようなタイプの人として見ていないと思います。加えて、特に思うのです、日系ではない人たちは日系人について 芸術家や歌手になれないと考えていると思うのです。つまり、これは白人の視点です。白人の考え方が日系人の思考や感情に内在化されています。そして、一般的に言うと、アメリカにおいて日系人に対するこのようなレイシズムは第二次世界大戦とキャンプに由来しているのです。<sup>134</sup>

このように、ナカムラは「モデル・マイノリティ」というイメージが戦時の強制収容から派生した人種差別の現れであると批判し、法律家や医者といったホワイトカラーの専門職に偏っているイメージに対して、芸術家や音楽家、活動家といった様々な日系人の記録を映像化することによって、観客である日系人自身が抱えている自画像を払拭しようとした。*A Song for Ourselves* (2009)において、日系人、クリス・イイジマの音楽活動が主題とされ、日系人＝専門職ではなく、観客に日系人の音楽家のイメージを示した。イイジマらの音楽活動を通してナカムラによって描かれているアジア系アメリカ人、アジア系アメリカ人の文化とは一体どのようなものであろうか。クリス・イイジマ、ノブコ・ミヤモト、チャーリー・チン(Charlie Chin)からなるイエロー・パール(Yellow Pearl)は、ベトナム戦争に対する批判やアメリカ合衆国でのアジア系アメリカ人の経験を歌うことによって、白人を軸とした主流社会から抱かれているアジア系アメリカ人のイメージを是正し、アジア系アメリカ人のエスニック・アイデンティティの構築に貢献した。彼らの音楽活動は、あくまで商業主義の形態を拒絶し、コミ

---

<sup>134</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、アメリカ合衆国、ロスアンゼルス、2012年2月7日。

ユニティ、大学、教会などに出向きパフォーマンスを行なった。ここで考えたいことは、ナカムラによって描かれたイイジマにとっての音楽とは、文化とは、日系アメリカ人であるとは一体どのようなことであったのかということである。イイジマが初めて ロサンゼルスにあるリトル・トーキョーを訪れたことを振り返って、そこでの人々の活気に満ち溢れた文化や音楽に触れた経験は、その時初めて自分自身を発見した瞬間であったと、語っている。イイジマは、次のように語っていた。

わたしは、キンナラ太鼓をみつけました。これは私そのものであったのです。私は、その演奏と私自身を結びつけることができました。突然、これが私の探していたものだわかりました。ジュンが弾いた琴を初めて聞いたときのことを覚えています。これは、私が誇りに思う何かなのです。全てのことが、革命的でした。分かりますか？人々は自らの声を見つけたのです。<sup>135</sup>

イイジマの解釈では、日系人自身が奏でる太鼓や琴といった日系人の音楽は、彼らの声であるという。そしてそれは、彼の日系人としての文化のあり方を示しているのではないだろうか。ニューヨークで暮らし、このような音楽に触れる機会がなかった彼にとって、これらが初めて彼を納得させた音楽であった。また、インタビューシーンにおいてイイジマは、アジア系アメリカ人であることについて以下のように語っている。

アジア系アメリカ人であるとは中華料理に誇りを持つことではない。私は、今の状況を憂えています。かなりたくさんアジア系アメリカ人研究や、そういった根っからのアジア系アメリカ人が減っています。アジア系アメリカ人の運動や、アジア系アメリカ人の歴史もそうです。全てのことが、「あなたはアジア人という」型に当てはめられています。つまりそれは、あなたの民族性を誇りに思い、継承物を誇りに思うことです。それは、全て本当は何であるのかということ歪めているようなものすべてであり、あなたが世界をどのようにみているのかということです。そして、政治的観点から、文化的観点から、世界的な観点から、ア

---

<sup>135</sup> Nakamura, Ibid, 2009.

ジア系であるということを知っているということ。あなたは世界を進歩的人道主義者の視点から見るのです。これが、私が示していることです。日系人であるということ、中華料理を誇りに思うということではないのです。そして、政治にアジア系を求めるのではないです。もし、それらが専制的になるとするならば、政治にアジア系であることを必要としないです。誰が必要とするのでしょうか？必要とされていることは、レイシズムによって抑制されることなく、あなたの声が聞かれるということです。しかしながら、あなたがあなたの声を探す前にレイシズムが存在していることを認めなくてはなりません。そして、あなたの声でレイシズムと闘うのです。アジアで生産された車は、あなたの声を届かせるための助けとはならないのです。<sup>136</sup>

イイジマが意味する、アジア系アメリカ人であること、アジア系アメリカ人のエスニック・アイデンティティとは、アジア系アメリカ人の声をあげることである。エスニック・マイノリティの声は、白人を軸とした人種、エスニシティの編成から成るアメリカ社会において、人種差別が壁となって、届く前に消されてしまう。ここでいう声とは、文化である。文化とは、レイシズムを超えたところに存在する。戦時の強制収容により、彼らの声は失われた。そして、もう一度、「モデル・マイノリティ」言説によって、彼らの声は失われた。日系人の強制収容から、そこから派生したモデル・マイノリティ像を踏まえた上で、ナカムラはイイジマの作品を制作したのである。ナカムラ自身によって、レイシズムによって埋もれている、彼らの届かない声や文化を、映像制作という抵抗によって、埋もれてしまったものを掘り出し、再解釈し、表現しているのである。また、現在の「モデル・マイノリティ」言説を内在化している日系人に対して、ナカムラは次のように批判している。

今日でさえ、ほとんどの人が日系アメリカ人は良い仕事に就いて、まさに中流階級で、大学教育を受けていて、マイホームを所有していると思っています。しかし、下級-中流階級や労働者階級の人たちがたくさんいます。<sup>137</sup>

---

<sup>136</sup> Nakamura, Ibid, 2009.

<sup>137</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、2012年。

全てのコミュニティは自分たちの評判を上げたいのです。<sup>138</sup>

ナカムラの語りは、日系人自身が「モデル・マイノリティ」言説を内在化している現状を物語っている。ホワイトカラーや専門職に就くことに対するプレッシャーは、戦時の強制収容所の経験によってスティグマ化された日系人のエスニック・アイデンティティを払拭しようとする日系人の行動からうまれていった。そして、この日系人の模範的な自画像に沿うことができなかった若者たちの間では、しばしば薬物への依存といった非行に走る者もいた。そのことを現在の日系コミュニティと重ね合わせるように描いた作品が *Yellow Brotherhood* である。この作品は、ナカムラと仲間のブレット (Brett) とキーミン (Khi-Min) との幼少期からナカムラの大学進学までの経験と過去の60年代の日系コミュニティの若者たちの経験が、ナカムラによって現在と過去の問題を重ねるように想起されている。キーミンは、過去に薬物問題を抱えていたことを振り返る。問題発覚後、コミュニティ内で、三世の親たちが話し合いを開き、彼を立ち直させることに尽力した時の映像が記録されている。加えて、作品において、ナカムラ自身も高校時代を振り返り、「私はいつも UCLA 進学を望んでいましたが、望みはありませんでした。」と、語った。<sup>139</sup>これは、ナカムラ自身や周りが期待するような優秀な成績を得ることが出来ず、理想から外れてしまった経験であった。モデル・マイノリティ像から外れた自己を発見したのである。このようにして、ナカムラは、モデル・マイノリティ像から外れた当時の自ら姿を赤裸々に描き出したのである。

## 第6節. ポスト9.11における日系人強制収容所の記憶

### 1. ポスト9.11における日系人強制収容所の経験

9.11とは、日系人にとって一体どのような出来事だったのであろうか。9.11は、日系人にどのような情動をもたらし、どのように記憶を想起させ、そして、彼らの経験はどのように位置付けられてきたのであろうか。アメリカ政府は、9.11発生から45日以内というスピードで「the USA Patriot Act」を制定した。同時に、アメリカ社会では、アラブ系やイスラム教徒やそれを連想させる容姿の人々

---

<sup>138</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、2012年。

<sup>139</sup> Nakamura, *Ibid*, 2003.

に対する人種差別やヘイトクライムが顕著に現れた。それは、第二次世界大戦開戦と同時に、出自を根拠に全ての日系人を「敵性外国人」とし、強制立ち退き、並びに強制収容が行われ、排日運動が最高潮を極めた状況となんら変わることはない。ポスト9.11においても、単純化された人種プロファイリングが再びアメリカ社会において展開されたのであった。ここで着目して考えたいことの一つには、ナカムラによって、ポスト9.11において日系人の経験がどのように再解釈され、また、9.11後の日系人の動向がどのように描かれているかという点である。

『ピルグリメッジ』(*Pilgrimage, 2007*)の初めのシーンにおいて、2001年9月28日、ロスアンゼルスのリトル・トーキョーの全米日系人博物館の前に人々が集まり、9.11の犠牲者や第二次世界大戦の犠牲者への追悼、アラブ・ムスリムコミュニティに向けてサポートの意を表明したリトル・トーキョー・アーナー・ビクティムズ・ウィズ・キャンドルライツ・ヴィジル (Little Tokyo Honors Victims With Candlelight Vigil) が、当時の日系コミュニティの活動として想起されている。<sup>140</sup>これが示すのは、9.11後のアメリカ政府やアメリカ社会による国内のアラブ・ムスリムに対する態度、処遇や視線といったものが、一瞬にして、日系人自身の経験として、あるいは集団の経験として戦時の強制収容の記憶をフラッシュバックさせ、サポートの意を示す行動をとらせたのである。つまり、9.11後、アラブ・ムスリムに向けられた視線や処遇を目の当たりにした日系人は、戦時の強制収容の経験と重ね合わせ、彼らの姿のなかに自己を発見したのである。

『ピルグリメッジ』(*Pilgrimage, 2007*)のなかで、ワーレン・フルタニ (Warren Furutani) は、「私たちに起こったことを分かっています。それゆえ、私たちにはそれに立ち上がる責任があるのです。」と語り、アラブ・ムスリムに対するサポートへの決意を表明した。この言葉が示すように、日系の経験を彼らの状況に重ね合わせ、自己とアラブ・ムスリムとを同一視する姿勢を伺うことができる。そして、集まった者たちは、アメリカ政府による過去の過ちを繰り返させてはならないという、ある種の責任感が伴った感情を抱いていたのである。かかる動機が日系人たちの行動、つまり、博物館の前に集まり、第二次世界大戦や9.11の犠牲者への慰霊行為となったのである。また、2005年に開催されたマンザナ強制収容所跡地への巡礼の様子を想起することによって、現在の巡礼において、どのような意味が生み出されているのかが表現されている。日系人のみならず、様々な史

---

<sup>140</sup> このイベントは、National Coalition for Redress / Reparations と Nikkei for Civil Rights and Redress (NCRR) によって開催された。

的背景を持つ者たちが参加していた。参加者へのインタビューシーンにおいて、大学生のヨゼット・ベーカー (Youset Baker) は以下のように語った。

私は他のコミュニティの歴史を学んでいると思っていません。私自身の過去について学んでいると思っています。私に関わる歴史について学んでいるのです。<sup>141</sup>

また、教員のナンシー・ヘルナンデス (Nancy Hernandez) は、以下のように語った。

今まさに、私たちは先住民の土地に立っています。先住民を彼らのテリトリーから追放するために、莫大な殺戮がここカリフォルニア起こったのです。この側面を学ぶことは重要なことであり、同様にどのように日系人が彼らのエスニック・アイデンティティのためだけに収容されたかについて学ぶことは重要です。<sup>142</sup>

このようにナカムラは、日系人の強制収容所の経験と他のエスニック・マイノリティの経験を重ね合わせ描くことによって、日系人以外の人々にとっても同様に、彼らの経験を吟味し、過去の不正義を振り返る上で重要な意味を持つ行事として巡礼を描き出している。上で述べたように、ナカムラが、他のマイノリティとの出会いによって自己を発見したように、ここでは、他のエスニック・マイノリティが巡礼を通じて日系人の経験を吟味することにより、彼ら自身を発見しているのである。かかる意味において、日系人と他のエスニック・マイノリティの連帯の意義が見出させるのである。加えて、2005年に行なわれた巡礼のシーンでは、現在の巡礼において新たな意味を示している。かかるシーンのナレーションは、複数の巡礼参加者によって、次のように語られた。

歴史は何かを信じることによって作られるのです。もし、あなたがこの場所を住むためにより良い世界にしようと信じていないのなら、あなたは私たちに動機与えることはないでしょう。

---

<sup>141</sup> Nakamura, *Ibid*, 2007.

<sup>142</sup> Nakamura, *Ibid*, 2007.

マンザナは、今日でもそのような人々の動きを伺うことができる場所です。私たちの巡礼は終わっていない、巡礼はまさに始まりなのです。つまり、人々が行動を起こし始めているのです。それは、まさに初めの巡礼がとても重要であり、そして今日の巡礼もとても重要であると考えられるわけです。それは、実際に歴史を作ることに私たちを再びかき立てるのです。<sup>143</sup>

作品の終盤のシーンにおいて、視覚的に認識できるものとして、ヒスパニック系アメリカ人による医療保険の適用を訴えるデモや、アラブ・ムスリムによる戦争反対デモの映像とともに、「だからキャンプは重要なのです。過ぎさったかも知れないが、まだ起きているということを人々に思い出させてくれるのです。」という語りを最後に、この作品は終る。これらの語りや映像表現によって示されているように、ナカムラによって、想起された強制収容の経験とは、巡礼という行事を通じて過去の経験を再び吟味するためだけではなく、目の前にある不正義に対し行動を起こし、自らの手によって社会を変える契機となっている。巡礼が過去の経験を吟味することにおいて意義を見出すだけではなく、現在において、9.11後のアラブ・ムスリムが置かれている状況を目の当たりにして、特定の不正義や特定の人種や民族性に限定して目を向けるのではなく、人種的差異を超えた連帯を促し、不正義を認めず、立ち向かうことを始める象徴として描かれている。補償運動後の日系人や日系コミュニティの動向は、ナカムラの制作への動機と関連しているのである。ナカムラは、インタビューで次のように語った。

日系アメリカ人コミュニティ自身に問題があるといえます。なぜなら、日系人は補償を受け取って、そして、もはや賠償を求めている他の人々への援助を行っていないのです。例えば、アフリカ系アメリカ人は奴隷制に対する改正運動を行なっています。そして、同様にネイティブ・アメリカンによる、侵略された土地に対する補償運動があります。これらの活動は今もなお続いています。しかしながら、日系アメリカ人は補償を一度受け取ると、もはや他の活動を支援していないのです。だから、私は特

---

<sup>143</sup> Nakamura, *Ibid*, 2007.



に二世を中心に支援が行なわれたことについて光榮に思います。しかしながら、三世や四世の活動については十分とは言えないとおもいます。これは継続中の闘争であります。他の人と同じく、日系アメリカ人コミュニティもとても多様です。だから、特に政治的な考え方からいえば、全ての人が他の人々の権利を守ることに支持しているわけではないのです。本当に支援している者たちもいます。主な争点は、どのように日系人たちをアラブ系やイスラム教徒の人々を助けるために立ち上がらせることができるかということです。<sup>144</sup>

このナカムラの語りは、1988年に補償問題が法的に解決された後の現在の日系人コミュニティの動向や、他のエスニック・マイノリティへの態度を表している。三世、四世の日系人の政治的意識や関心の低さに対して、9.11後、アメリカ政府の不正義、それに伴いアメリカ社会から国内のアラブ・ムスリムに対する態度、処遇や目線といったものに抵抗する責任が過去に同じような経験をした日系人にあるというのが、ナカムラの主張であり、作品制作への動機といえよう。

## 2. ポスト9.11において60年代の運動経験を問う

60年代、アメリカ国内において、アフリカ系アメリカ人の公民権運動が契機となって巻き起こった社会変動は、国境を越えた第三世界と呼ばれる地域の人々への共感を伴って、横断的にエスニック・マイノリティ集団である日系アメリカ人にも影響を与えた。それにより彼らも既存の社会体制に疑問を抱き始め、積極的に自らの存在を定義しようと立ち上がった。ナカムラの三作品全てにおいて、60年代の経験が想起されている。では、ポスト9.11において、人種差別的な扱いや視線にさらされているアラブ・ムスリムのなかに自己を発見した現在の日系人、ナカムラにとって、60年代の経験とはいかなる意味を持っているのであろうか。

『イエロー・ブラザーフッド』(*Yellow Brotherhood, 2003*)において、ナカムラは、60年代、コミュニティの結束が軟弱であり、二世や社会の期待に添えなかった多くの若者が非行に走り、薬物に手を染める者が後を絶たなかったコミュニティの歴史を想起している。ナレーションによる説明は、当時、日系人コミュニティの結束が軟弱であり、集団をまとめることができるような人物の存在

---

<sup>144</sup> 同上、筆者によるナカムラへの対面インタビュー、2012年。

がなく、外部からの助けも無かったことが振り返られ、語られている。そして、公民権運動やベトナム反戦運動といった、60年代に巻き起こった社会変動は、日系人たちに、若者たちの間で広がっていた薬物問題について責任感を抱かせた。そうして、1969年、若者たちを非行から救うことを目的につくられた自助組織イエロー・ブラザーフッド(Yellow Brotherhood)が誕生した経緯をコミュニティの経験と共に振り返った。イエロー・ブラザーフッドは、政府からのいかなる補助金も受け取らず、日系のコミュニティからのサポートや洗車サービスなどを行って、運営資金を賄っていた。薬物中毒、学校中退や非行集団への参加などから若者たちを守るため、イエロー・ブラザーフッドの若者たち自らが計画、活動を取り仕切り、共通の目標に向かって若者たちを導いた。自らが、自らによって、自らの目標に向う、これはまさしく草の根から始まった運動であった。

当時の日系コミュニティの情勢と、第2節で述べたように、キーミンの薬物問題を重ねて描くことによって、60年代も、現在においても変わることの無いコミュニティ内の連帯の重要性が強調されている。また、キーミンがコミュニティの親たちや仲間によって薬物問題から立ち直ることができた経験は、コミュニティという集団と個人との関わり合いを描くことによって、その存在の重要性を主張している。この作品の終盤にナカムラが語った言葉は、彼が理想とするコミュニティのあり方を物語っている。

もっとも大切なことは、コミュニティは外からみつけられるのではなく、私たち自身によって創られるものなのです。コミュニティは自動的に創造されるのではなく、むしろ、日系アメリカ人自身で創造する必要があるのです。<sup>145</sup>

つまり、ナカムラは、コミュニティは外部からつくられていくものではなく、日系人自身、自らの手によってつくり続ける必要性を説いているのである。コミュニティは自然発生的なものでは決してなく、コミュニティの構成員の意思と、それに伴う行動によって、常に能動的に形成され続けている産物なのである。コミュニティを省みることは、9.11後のアメリカ社会の人種差別、そして彼らに内在化したモデル・マイノリティ像から、自らを救うことを意味するのである。そ

---

<sup>145</sup> Nakamura, *Ibid*, 2003.

の意味において、60年代のようにコミュニティの一員としてそれぞれが高い意識を持つことの重要性が強調されている。

『ピルグリメッジ』(Pilgrimage, 2007)において、ナカムラは、60年代、日系三世たちがどのように強制収容所の経験を再び自分たちの手で掘り起こし、自らの集団的エスニック・アイデンティティとして解釈したか、当時の映像と三世たちへのインタビュー映像とともに想起させた。ビクター・シバタ (Victor Shibata) は、ワシントンD. C. である黒人に「あなたたちは、キャンプに入れられた。」と言われ、彼が「どういう意味ですか?」と、問い返した当時の記憶を語った。また、アフリカ系アメリカ人による公民権運動や泥沼化するベトナム戦争に反対するデモなどの影響を受け、日系人たちが自らのエスニック・アイデンティティを求め、既存の社会構造を問い始めるようになった経緯が想起されている。当時のカリフォルニア・アセンブリー (California Assembly) の一員である、ワーレン・フルタニ (Warren Furutani)、前 マンザナ・委員会 (Manzanar Committee) の代表、スー・クニトミ・エンブレイ (Sue Kunitomi Embrey)、日系コミュニティ、イエロー・ブラザーフッド (Yellow Brotherhood) で中心的役割を担っていたシバタたちが中心となって、ロスアンゼルスから、マンザナ強制収容所跡地への巡礼が初めて行なわれた当時の映像記録が想起された。当時のマンザナへの巡礼は、日系人のルーツを探り、自分たちは何者かを探り、理解するために行われた。加えて、アフリカ系アメリカ人が先頭をきってワシントンへの行進を行なったように、マンザナへの巡礼は日系人が主体となり集団で行動を起こした点に意義がある。映像のなかで、ワーレン・フルタニは、マンザナ強制収容所への巡礼を振り返り、「ある種、象徴的な政治的性質を帯びたツアーであった。」と、語った<sup>146</sup>。当時を回想し、三世のスー・クニトミ・エンブレイは、「私たちが思っていた以上に私たちに影響をおよぼしました。」と、語った<sup>147</sup>。またロバート・ナカムラは、「私は実際にコミュニティに所属していることを感じました。」と、語った<sup>148</sup>。巡礼前に、三世が抱いていた好奇心とは大きく異なり、強制収容所の経験を受け入れることは大きな精神的ショックをともなった。それと同時に、それは自らのルーツを再確認する作業であり、強制収容所の経験を理解し、日系アメリカ人としての帰属意識を強める作用が伴ったのである。つま

---

<sup>146</sup> Nakamura, *Ibid*, 2007.

<sup>147</sup> Nakamura, *Ibid*, 2007.

<sup>148</sup> Nakamura, *Ibid*, 2007.

り、公民権運動を率いたアフリカ系アメリカ人によって触発を受けた三世たちは、巡礼という彼らのエスニック・アイデンティティを掘り起こす作業を通じて、自己を発見したのである。そして、上で述べたように、ポスト9.11において、アラブ・ムスリムに目を向けることによって、自らの過去を再発見する契機とし、60年代の三世たちのように、今再び、既存の社会体制への批判、そしてエスニック意識の高揚を促しているのである。

『ア・ソング・フォー・アワースelves』 (*A Song for Ourselves, 2009*)において、ナカムラは60年代後半から70年代前半にかけて最高潮を迎えたイイジマらによる音楽活動が持つ意味を探求している。そこで明らかになっていくのは、アジア系アメリカ人が、当時の世界情勢、とりわけベトナム戦争を通じて、自らが置かれている状況を理解してゆく姿であった。60年代、ベトナム戦争で犠牲になってゆくベトナム人は、まるで日系人やアジア系アメリカ人といったエスニック・マイノリティの映し鏡のような存在であった。アジア系アメリカ人にとってベトナム戦争は、彼ら自身が何者であるか、またどれほど自分たちが不当に扱われてきたかを理解する契機になった。イイジマは、泥沼化するベトナム戦争を目の当たりにし、ベトナムの人々の状況と白人を中心とした人種、エスニシティ編成の社会で暮らしてきた彼自身の日系人としての経験を重ね合わせたのである。つまりは、UCLA時代の経験を通じて、ナカムラが他者と出会うことで自己を発見したように、イイジマはベトナムの人々のなかに自己を発見したのである。また、ノブコ・ミヤモトは、当時の他のエスニック・マイノリティによる運動と自身の音楽活動の関連について次のように語った。

私たちは、アジア系アメリカ人の運動だけではなく、この大規模な運動の一部であったのです。私たちは、ブラック、ネイティブ・アメリカン、ラティーノが加わっているより大きな革命的な運動の一部だったのです。<sup>149</sup>

イイジマは、次のように語った。

私たちは、上手くいっていない人々や若者と繋がりたいという望みがあったのです。これが、その精神でした。政治的に進

---

<sup>149</sup> Nakamura, *Ibid*, 2009.

歩的な決心だったのです。<sup>150</sup>

彼らの音楽は、アジア系アメリカ人とは何者であるかを表現することであったが、アジア系アメリカ人や日系人のみに届けたものではなく、アメリカ社会の他のエスニック・マイノリティ、若者、困っている人、第三世界と呼ばれる地域の人たち全てを巻き込んだ運動の一部となったのである。上で述べたイイジマの考え方は、60年代に彼自身がこの大きな運動に巻き込まれたことによってもたらされたのであろう。そしてここにも、ナカムラが他者との出会いにより自己を発見した経験が共鳴しているのである。つまり、他者のなかに自己を発見することで、新たな自己を発見し、それらが共鳴し合い、集まることによって新たな大きな運動となって結集されたのである。60年代とは、そのような人々の行動の連鎖が重なりあったことで大きな社会変動がもたらされた時期であったと考えられよう。ナカムラは、ドキュメンタリー映画という媒介をとおして、9.11後のアメリカ社会において、日系人を含むエスニック・マイノリティが、アラブ・イスラムに対する人種差別や偏見を目の当たりにすることで、60年代のような運動が再び巻き起こることを期待し、促そうとしているのである。

## 第7節. 小括

冒頭で述べたように、ナカムラの映画は、日系人によって、日系人のために制作されているのである。日系人自身の記憶や経験を記録すること自体が、自らの手によって自身の経験を吟味し、歴史を作り上げていく行為なのである。ナカムラのドキュメンタリー映画は、日常に非常に大きな影響を与え、エスニック・マイノリティとりわけアラブ・イスラムに対する人種差別や偏見が顕著に現れたポスト 9.11 のアメリカ社会において制作された。日系人にとって 9.11 は、他者、つまりアラブ・イスラムの人々のなかに自己を発見した経験であった。他者との出会いは、日系人自身がモデル・マイノリティというイメージを内在化したことによって阻害され、自身のイメージのなかに埋没した状態からの脱却を意味している。また、ここでいうドキュメンタリーの制作、鑑賞という行為自体のなかに、過去の経験や記憶を現在の状況において、吟味し再解釈することで新たな意味がもたらされているのである。そこでは、彼ら自身が既存のアイデンティティから脱却しているのである。アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動は、

---

<sup>150</sup> Nakamura, *Ibid*, 2009.

60年代にコミュニティをベースとした草の根の活動から始まった。現在は、ネオリベリズムの漸進に抗いつつ、こうしたナカムラの活動は継続されている。この章ではナカムラの活動について、労働の側面に着目した考察はおこなっていないが、彼の活動も労働と不可分な関係にあると考えられうる。また、コミュニティと密接に関わって制作された作品は、今後も日系人のみならず、他の史的背景を持ったオーディエンスに、様々な解釈を伴って、連帯を促しつつ、共有されていくことだろう。

### 第3章. ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』から問う日系アメリカ人の戦争の記憶

#### 第1節. 映画『ミリキタニの猫』の背景

##### 1. 映画『ミリキタニの猫』の成り立ちとミリキタニの紹介

本研究は、アメリカ・カリフォルニア州サクラメントに生まれた日系二世、ジミー・ツトム・ミリキタニ（三力谷 勉）の生涯と、ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』<sup>151</sup>を手掛かりに、日系アメリカ人の戦争の記憶について考察することを目的としている。この作品は、2000年年末、リンダ・ハッテンドーフと、ニューヨーク・ソーホーの路上で絵を描いて生活していたミリキタニとの出会いからはじまった作品である。絵を購入しようとしたリンダに、ミリキタニは絵と交換に自分自身を写真に撮ってくれるよう頼んだ。当時ホームレスを感じる四季を作品に収めようと思っていたリンダは、ミリキタニを撮り始めた。2011年9月11日同時多発テロの勃発により、リンダは路上で生活していたミリキタニを自宅に招いた。そうして2人の共同生活がはじまり、ミリキタニの創作活動の背景にあった過去の戦争経験が明らかになっていったのである。

次にミリキタニの生涯について紹介する。1920年、ミリキタニはカリフォルニア州のサクラメントで誕生したが、3歳のとき日本に渡り、母方の実家の広島県廿日市で育った。日中戦争が勃発した1937年、徴兵年齢を迎えたミリキタニは兵学校への入学を拒否し、二重国籍であったことから、広島からカリフォルニア州オークランドへ渡る。アメリカに再び戻ったミリキタニは、帰米二世<sup>152</sup>となった。第二次世界大戦時、日系アメリカ人強制収容所に送られた彼は、1943年に収容所で行われた忠誠登録審査の結果、アメリカ政府によって不忠誠者として扱われた<sup>153</sup>。ツールレイク隔離強制収容所<sup>154</sup>に収容された。彼は同収容所で市民権放棄に署名する。大戦終結後、1946年3月にテキサス州クリスタル・シティにあった司法省移民局管轄の抑留所（Justice Department Internment Camps）、

---

<sup>151</sup> Hattendorf, Linda *THE CATS OF MIRIKITANI*, Stars: Linda Hattendorf, Jimmy Mirikitani, 1h 14min, Filming Locations: New York City, New York, USA, 2006.

<sup>152</sup> 帰米とは、アメリカで生まれた後、幼少期や青年期に日本で暮らし、教育を受けた経験がある日系アメリカ人のことを指す。

<sup>153</sup> 忠誠登録審査については、後述する。

<sup>154</sup> 1943年9月ツールレイク強制収容所は、忠誠登録審査が実施されたのちに、隔離センター（Tule Lake Segregation Center）に指定される。

<http://www.tulelake.org/history>

さらに同年10月からニュージャージー州シーブルックの農場へ送られたミリキタニは、強制労働を課せられた。解放後、アーティストを目指してニューヨークに向かった彼は、そこで住み込みのコックなどの仕事のかたわら、創作活動を続けた。そして、1986年、雇い主が亡くなって間もなく、ミリキタニは路上生活を始めた<sup>155</sup>。そして、2000年の年末、ニューヨークの路上で絵を描いていたミリキタニは、後にこの映画の監督となったリンダ・ハッテンドーフと出会う。

## 2. これまでの日系人研究と本研究の位置づけ

序章において、アジア系アメリカ人を検討するにあたり、とりわけ「モデル・マイノリティ」が一つの論点となる点について述べた。また「モデル・マイノリティ」に関する問題は、日系人コミュニティの歴史認識に関わっているのである。それは、戦争経験に関わって、日系コミュニティに賞賛に値する日系人像がもたらされたのである。つまりは、日系人史において支配的なナラティブを構成してきた一つには、強制収容所において行われた忠誠登録調査でアメリカ国家に忠誠を示し、兵役に志願し、ヨーロッパ戦線で勇敢に戦った442部隊を含む二世兵士の存在があった<sup>156</sup>。戦後の日系コミュニティにおいて、かかる二世兵士の経験は賞賛されてきた。それに対して、忠誠登録調査においてアメリカ国家への忠誠を示さず、兵役を拒否した者たちは、その大半が隔離収容所に送られた。戦後、日系コミュニティは彼らの経験を忘却してきた。つまりは、強制収容と忠誠登録調査、徴兵という一連の戦時下の経験が、日系コミュニティにおいて忠誠者と兵士、不忠誠者と兵役拒否者、といった対立構造をもたらしただけである。ここで、忠誠者と兵士、不忠誠者と兵役拒否者に関して、どちらが加害者で、どちらが被害者であると整理、分析、了解し、終わらすのではない。本研究がミリキタニとこのドキュメンタリー映画を考察の対象とした理由の一つには、こうした分断された日系人コミュニティの外部でミリキタニとリンダが出会ったことによって映画が制作され、その後日系コミュニティにおいてこの映画が上映されてきた経緯がある。コミュニティの外部から

---

<sup>155</sup> ヨシカワ マサ、ジミー・ツトム・ミリキタニ『ピース・キャッツ 「ミリキタニの猫」』、ヨシカワ マサ（編著）、ジミー・ツトム・ミリキタニ（画・文）（イラスト）、武田ランダムハウスジャパン、2007年、30-37頁。

<sup>156</sup> 主に日系アメリカ人で編成されたこの部隊は、ヨーロッパ戦線において勝利をおさめ、テキサス大隊を救出したことで数々の勲章を与えられる。日系アメリカ人社会だけではなく、大統領から勲章を与えられるなどし、しばしば英雄視されてきた。



コミュニティへもたらされたこの映画とミリキタニの存在は、賞賛に値する日系人像と日系人研究の前提に問い直しを迫る起点になりうるのである。

日系アメリカ人の戦争経験をさらに詳しく述べるためには、第二次世界大戦まで話を戻さなければならない<sup>157</sup>。1941年12月7日、日本軍による真珠湾攻撃を受け、翌年2月19日に施行された行政(大統領)命令第9066号によって、「軍事上の必要性」(military necessity)、および「戦時の必要性」(wartime necessity)という理由で、アメリカ市民権の有無にかかわらず、事態の軍事的緊急性により、アメリカ合衆国西海岸の在米日本人と日系アメリカ人は「敵性外国人」とされ、アメリカ国内10ヶ所の強制収容所に転居、抑留を強いられた。日本にルーツを持つ者(Japanese ancestor)は「敵性外国人」とされ、抑留の対象とされたが、ドイツやイタリアにルーツを持つ移民は民族集団規模での拘留の対象とされなかった。そのことから、在米日本人と日系人を対象とした強制収容の理由には、人種偏見があったとされている<sup>158</sup>。1943年2月、それまで日本にルーツを持つ者に対して、凍結されていた陸軍への志願兵募集が開始された。加えて、収容所からの出所者の募集が開始された<sup>159</sup>。陸軍と戦時転住局の共同で、兵士募集と収容所の出所者募集に伴って、忠誠登録審査が実施された<sup>160</sup>。忠誠登録は、「アメリカへの忠誠の表明＝従軍の意思の表明」を前提に、アメリカと日本のいずれかへの忠誠を表明することを収容されている日本にルーツを持つ、日系人や日本人に求めたものであった。<sup>161</sup>

---

<sup>157</sup> 第二次世界大戦時、アメリカ国籍の有無に関わらず彼らの出自が根拠となり強制収容所に送られたという歴史的事象を考慮したうえで、本研究では、日本に出自を持つ人々を日系アメリカ人としている。また、国家レベルで誰がアメリカ人として認められるのかに関わる境界と、同時にコミュニティレベルで誰がコミュニティの構成員として認められるのかに関わる境界をめぐるポリティックスがある。よって、日系アメリカ人という存在は、自明ではなく、常に国家権力、戦争状態の有無、コミュニティの政治によって影響されるのである。

<sup>158</sup> 石井修「リドレスとリメンムブランズ-日系米人社会の歴史の記憶」『明治学院大学法学研究』85号、2008年、29頁。なお、司法省管轄の収容所に破壊分子の疑いをかけられた日系アメリカ人、中南米の日系人、イタリア系アメリカ人、ドイツ系アメリカ人は、抑留された。[http://www.janm.org/jpn/nrc\\_jp/q&a\\_jp.html#only](http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/q&a_jp.html#only)

<sup>159</sup> マイヤー、ディロン『屈辱の季節 根こそぎにされた日系人』森田幸夫(訳)、新泉社、1978年、99-113頁。

<sup>160</sup> 山倉明弘「アメリカ市民権の使用と乱用-日系アメリカ市民戦時強制収容を中心として-」、『関西学院大学社会学部紀要』104号、2008年、13頁。

<sup>161</sup> 村川庸子「日系アメリカ人のアイデンティティ研究の一試論 第二次世界大戦中の「忠誠登録」を中心に」、環境情報研究第3号、1995年、61、86頁。また村川は、「忠誠を問うことが目的であったが真にこれを確かめることはできなかった。」と結論づけている。

審査が行われた場所は、既に拳銃とサーチライトによって監視された強制収容所の内部であった。彼らに与えられた選択肢は、あらゆる平時の制度や法的秩序が停止した戦場に向かい、敵に殺されるか殺すしかない兵士となることか、あるいは政府機関の戦時転住局（War Relocation Authority、以下 WRA と略記）の監視の対象とされ、いつ撃たれてもおかしくない強制収容所に留まるかであった<sup>162</sup>。

忠誠登録審査のなかでもとりわけ質問 27・28 は、アメリカへの愛国心を問い、徴兵のために準備された質問内容であった。質問 27 では、「あなたは命令をうけたら、いかなる地域であれ合衆国軍隊の戦闘任務に服しますか。女性の場合、看護部隊に志願する意思がありますか。」ということが問われた。そして、質問 28 では、「あなたはアメリカ合衆国に忠誠を誓い、国内外におけるいかなる攻撃に対しても合衆国を忠実に守り、かつ日本国天皇、外国政府・団体への忠節・従順を誓って否定しますか」ということが問われた。質問 27・28 に、「Yes」と答えた者は忠誠組と呼ばれ、その多くは兵士として戦場へ送られた。なかでも第 442 連隊戦闘団はヨーロッパ戦線での功績が讃えられ、戦後にアメリカ軍で最多の勲章を受け、アメリカ社会および、日系人コミュニティから従軍の功績が讃えられた<sup>163</sup>。それに対して、質問 27・28 に、どちらも「NO」と回答した者は不忠誠者と見なされた。彼らとその家族のほとんどが、ツールレイク隔離強制収容所に送られたのである<sup>164</sup>。忠誠登録審査の回答は、その後の彼らの処遇を左右した。それぞれの選択を巡って、彼らの間には嫌悪や軽蔑といった感情が一気に広がった。また、数ヶ所の収容所で、日系二世の

---

<sup>162</sup> とりわけツール・レイク強制収容所では、1943 年 11 月 13 日から 1944 年 1 月 15 日まで戒厳令が敷かれていた。他の収容所においても戒厳令は発表されていないが、米軍による監視が昼夜を問わず実行されていた。戒厳令については、以下の National Park Service のリンクを参照せよ。

[https://www.nps.gov/tule/planyourvisit/upload/segregation\\_center\\_6-10.pdf](https://www.nps.gov/tule/planyourvisit/upload/segregation_center_6-10.pdf)

<sup>163</sup> 柳田由紀子「二世兵士激戦の記録、日系アメリカ人の第二次世界大戦」新潮新書、2008 年、163-164 頁。

<sup>164</sup> ミューラーは、1943年にツールレイクに収容された人々の集団の特徴を以下のように三分類している。「第一の集団は、登録をめぐる論争の前かもしくは論争中に、日本への国外退去や本国送還を申請した収容者の集団であった。そして、第二は、「ノー・ノー」組と呼ばれ、登録用紙の第27問、28問に「ノー」と回答した者、もしくは質問事項に一切答えなかった者の集団であった。最後に、第一、第二の該当者の家族が第三の集団を形成していた」。ミューラー、E.L.『祖国のために死ぬ自由、徴兵拒否の日系アメリカ人たち』（飯野 正子、飯野 朋美、小沢 智子、北脇 実千代、長谷川 寿美訳）、刀水書房、2004 年、81頁。

なかには徴兵忌避を行った者たちがいた。徴兵忌避については、森田幸夫、エリック・ミューラーらによって、ワイオミング州ハートマウンテン収容所で徴兵忌避者によって組織立てて行われた徴兵忌避運動「フェアプレイ・コミティ」についての分析がある<sup>165</sup>。

第二次世界大戦時の日系人強制移動・収容に対して法的に抵抗し、最高裁判員裁判所まで争われたケースとしては、ゴードン・ヒラバヤシ、ミノル・ヤスイ、フレッド・コレマツ事件がある。ゴードン・ヒラバヤシは、夜間外出禁止令と立ち退き命令違反のため法廷闘争によってアメリカ政府に立ち向かった人物として研究されてきた。さらに、ヒラバヤシが忠誠質問への回答拒否によって投獄されたカタリナ刑務所に投獄で、自らを「Tucsonians (ツーソン人)」と名乗った日系人徴兵忌避者と他民族の徴兵忌避者が共に刑務所で過ごしたことについて、和泉真澄が詳しく検討している<sup>166</sup>。和泉は、その後にこの刑務所跡地が「ゴードン・ヒラバヤシ・レクリエーションサイト (Gorden Hirabayashi Recreational Site)」として記憶継承された過程と、日系人コミュニティのポリティクスを考察した。これによって、同じく強制立ち退き・強制収容をめぐる法廷で闘い、その後にアメリカ社会が要求する規範に合わせていったフレッド・コレマツとミノル・ヤスイのケースとは異なり、忠誠質問への回答拒否によって再び投獄されたヒラバヤシの経験が浮かび上がった。

不忠誠者とみなされツールレイク隔離強制収容所に収容されたミリキタニは、同収容所でアメリカ市民権破棄に署名していた。その後、1959年、法律上市民権は回復していたが、東海岸で職を求めて転々としていた彼に通知は届いていなかった。ミリキタニは、不忠誠者であり、かつ市民権破棄者であった。さらに、「兵学校にはいかん。ワシはアーティストだ。」と述べた彼の言葉は、兵士として戦争に加担することに対する拒絶を如実に表している。一般に徴兵忌避者はアメリカ市民としての権利を主張したうえで、軍隊への入隊を拒絶した人々のことを指す<sup>167</sup>。この点において、彼のような不忠誠者であり、かつ市

---

<sup>165</sup> ミューラー、前掲載書、2004年。森田幸夫『アメリカ日系二世の徴兵忌避 不条理な強制収容に抗した群衆』彩流社、2007年を参照

せよ。

<sup>166</sup> 和泉真澄「「ゴードン・ヒラバヤシ」キャンプ場について-カタリナ連邦刑務所と日系アメリカ人徴兵忌避者たち-」同志社法学、64-7号、2013年、622-631頁。

<sup>167</sup> 徴兵忌避とアメリカ市民権についての詳細な分析については、以下を参照せよ。山倉、前掲載書、2008年、14頁。

民権破棄者と徴兵忌避者は異なる。しかし、両者とも日系人コミュニティの主流からつまはじきにされてきた存在なのである。

本研究は、現在の日系人コミュニティとの関係性を踏まえたうえで、上記のような特徴のあるミリキタニの経験から、強制収容所、忠誠登録審査や従軍経験が戦争経験としてどのように記憶されているかについて検討する。そのなかで、忠不忠誠者に関わる解釈について、日本との関係から考察する。徴兵忌避者や不忠誠者に関する戦時の経験を分析した学術研究はある程度すすんできているが、本研究は以上のような研究視角を用いて、不忠誠者の経験が現在において如何なる批判的局面となりうるのかを問うている点が、これまでの研究と異なる。

映画『ミリキタニの猫』とミリキタニの生涯を分析するにあたり、日系人の歴史を記述するのか、あるいは表象研究としてドキュメンタリー作品について記述するのかという方法論的な課題が浮かび上がる。かかる課題は、この映画を論じる行為が、一体どのような政治性を帯びる事態なのかという問いでもある。映画上映によって、日系人コミュニティではツールレイク強制収容所の歴史、およびミリキタニに関する関心が高まり、知られるようになった。この現在進行形ともいえる事象を考慮すると、歴史的コンテキストのなかへ彼の存在を改めて置き直すだけでは不十分である。換言すると、ミリキタニに関わってツールレイク強制収容所、不忠誠組や市民権放棄といった歴史的な事象が映像によって想起され、そして、ドキュメンタリー映画が上映され、これらの歴史が共有される時、そこには新たに見いだされる政治が担われているのである。本研究が、歴史研究か表象研究かという方法論的課題に対して記述するという実践において、両者を重ね合わせるように論じているのはこのためである。したがって、時代を設定して論じる歴史研究、あるいは映像を論じる表象研究というように、本研究の研究アプローチを限定的に設定できないのである。

## 第2節. 忠誠登録審査経験を問い直す

### 1. 忠誠登録審査を巡る認識と問題

第二次世界大戦時、強制収容所において戦時転住居出所許可申請書による大規模質問、いわゆる忠誠登録審査が行われた<sup>168</sup>。忠誠登録とは54条からなり、

---

<sup>168</sup> 1943年、17歳以上の日系人は、“Statement of United States Citizenship of Japanese Ancestry”と題された一連の質問、通称“loyalty questionnaire”への回答が

1943年強制収容所において実施された17歳以上の男女全てを対象とした思想調査であった。当時、日系人への徴兵・志願兵は凍結されており、この調査の目的は徴兵再開と日系人部隊編成にあった。背景には西海岸に居住する日系人、日本人を徴兵することに対して躊躇する動きが政府側にあった。これに対して二世を中心とした組織、JAACL(日系アメリカ人市民協会、Japanese American Citizen League<sup>169</sup>)は、アメリカに忠誠を誓うように働きかけた<sup>170</sup>それでは、忠誠登録審査と徴兵制を巡って、日系人にもたらされたイデオロギーの分断は、過去から現在においてどのように影響を及ぼしているのだろうか。

ここで筆者が、2015年9月に現地調査のためサンフランシスコのジャパン・タウンで行われた日系人コミュニティのイベントに訪れた際の話をする。イベントに来ていた日系人と他愛もない会話を交わし、映画『ミリキタニの猫』、不忠誠組とされた方たちの経験について興味がある旨を伝えた時、ある日系人が、以下のように話してくれた。

今ではノー・ノーの人たちについて、少し話すようになってきた。でもね、戦後からずっとノー・ノーの人たちは、コミュニティの集まりにも来られなかった方もいたのよ。来たとしても、ノー・ノーであったことを言わなかった人たちも多いわ。<sup>171</sup>

この語りが示すのは、戦時中の忠誠登録審査、及び従軍経験が日系人コミュニティに軋轢をもたらし続けてきたことである。そして、この背景には不忠誠組に対して、圧倒的優勢に英雄として称えられてきた 442 部隊といった二世兵士の存在が措定されている。そして、不忠誠者、いわゆるノー・ノー・ボーイと呼ば

---

義務付けられた。篠田実紀「二分法を越えてJohn Okada, No-No Boyの静かなる挑戦」『神戸外大論叢』3号、2010年、10頁を参照せよ。

<sup>169</sup> JAACL, Japanese American Citizen League(日系アメリカ人市民協会)は、1929年にアメリカ西海岸地域に住む二世の若者らによって、日系人の人権を擁護することを目的に設立された団体で、現在もアメリカと日本に支部をおき、活動を続けている。

<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2012/3/29/jacl-japan/>  
以下 JAACL と略記。

<sup>170</sup> 桑井輝子「戦時転住所からの「再定性」：日系アメリカ人の 忠誠をめぐる一覚書」長野県短期大学紀要 47 巻、1992 年、178 頁。

<sup>171</sup> 忠誠登録審査、質問 27・28 に「No」と答えた者はノー・ノー・ボーイと呼ばれている。また、日系アメリカ人のあいだで、コミュニティ内で通じる口語的表現として、ノー・ノー・ボーイのことを「ノー・ノー」と短縮形で呼ばれている。

れた者や彼らの親類にとって最も身近な社会の一つであった日系人コミュニティは近寄り難い存在となった。不忠誠組に対する眼差しがまだまだ厳しい日系人コミュニティにおいて映画『ミリキタニの猫』が上映され、それによりミリキタニの存在が広く知られるようになった点を考慮することは重要である<sup>172</sup>。つまり、この作品がサンフランシスコをはじめとした日系人コミュニティや映画祭で上映され、ミリキタニの存在やツール・レイク収容所の経験が人々に共有された。しかし、それによって不忠誠組に対する認識が劇的に変わったわけではない。戦中・戦後から現在に到って忠誠を誓い、戦場で闘った日系兵士および JACL を軸としたナラティブが広く浸透している状況は否めない。

これまでの日系アメリカ人研究において、忠誠組・不忠誠組にかかわってどのような理解がなされてきたのかを振り返るとともに、これらの学知を構成してきた認識枠組みについての再検討を試みる。以下では、収容された日系人たちの意識と集団性に関わる分析を紹介する。これまでの研究では、専門職従事者で、アメリカ志向、エリート層とされた JACL と、1920 年代末から 1930 年代に自由主義や急進新主義の影響を受けた帰米二世が YES 組に多く該当した。一方、多くの一世代と、1930 年代に成人して、同年代末から 1940 年にかけて帰米した者たちは、当時の日本の神道的、国家主義的政治思想に影響された国粋主義者として、親日派とされた NO 組に多く該当した。それ以外は、多様な意見を持つものといったように分類されてきた<sup>173</sup>。このように認識されてきた YES 組と NO 組の分類について考察すると、アメリカと日本という国家が設定されたうえで、時代ごとのイデオロギーに沿って集団化することにより、忠誠組・不忠誠組についての集団性の要素が整理されている。忠誠、不忠誠、それ以外は多様な意見として整理されてきた。しかし、それ以外を多様な意見として終わらせるのではなく、日本かアメリカかという国家を軸にした区分のあり方自体が問いとして確保され、かかる分析を支えている知識生産のあり方を考える

---

<sup>172</sup> Sundance Kabuki Cinema - A Celebration of Japan Town December 11, 2007 - San Francisco, CA. Gerontological Society of America November 18, 2007 - San Francisco, CA. Asia Society Northern California October 18, 2007 - San Francisco, CA. The Roxie Cinema April 27 - May 3, 2007 - San Francisco, CA. San Francisco International Asian American Film Festival March 17, 2007 - San Francisco, CA March 24, 2007 - San Jose, CA. これらは上映運動の一部である。  
<http://www.thecatsofmirikitani.com/screenings.htm>

<sup>173</sup> 山本剛郎「日系人の強制立ち退き・収容に関する実態分析」『社会学部紀要第』104号、2008年、24-25頁。

必要があるのである。

こうした国民国家に基づいた認識枠組みや区分に関わる問題は、アカデミアにおける制度と知識生産のあり方と密接に関連している。つまり、戦後の冷戦体制の中で発展してきた地域研究の営みのなかで蓄積されてきた日系人史のあり方に対する問いとしてアカデミアにおける制度と知識生産のあり方についての問題として受け止めるべきである。地域研究の営みが内包する問題点や困難さについては、序章で触れた箇所を参考にして頂きたい<sup>174</sup>。ここでは、忠誠登録、及びその後の記憶のあり方を支えている国家を軸にした区分のあり方に関わって、地域研究が抱える問題や困難さを考慮していることを記しておく。そして、これらの問題系を抱えながら、現在の状況下において上映運動の広がりを加味しつつ過去の事象がどのような意味を持つのかという点を検討する。日系人史が持つコンテクストを参照しつつ、映画『ミリキタニの猫』と、かかる日本観が現在の日系人コミュニティとの関係性のなかで、どのような意味を持ちうるのかということ、本研究は目指している。よって、本研究は歴史学として検証されてきた過去の事象に対する再検討のみならず、現在において想起される記憶のあり方に新しい政治の兆しを見出す営みでもある。

現在、二年に一度開催されているツールレイク巡礼のプログラムでは、日系人コミュニティの収容所経験に関わって、これまであまり共有されてこなかった不忠誠者の経験に焦点が当てられている<sup>175</sup>。2016年10月現在、映画『ミリキタニの猫』の上映会は、ツアーのプログラムの一部に設けられている。映画の広がりと共に、時を同じくしてミリキタニの存在は、ツールレイク強制収容所を生き延びた者として、象徴的な存在として語られるようになった。この背景には、一部の日系アメリカ人コミュニティの動きのなかで、戦時の忠誠登録審査に対し「NO」を回答したことによってノー・ノー・ボーイと呼ばれてき

---

<sup>174</sup> これまでの日系アメリカ人史、あるいは地域研究の実践に関わって学知を蓄積してきたアカデミアの制度への批判が必要である。これに関しては、現在のポストコロニアルな状況において、地域研究における文化や民族を批判する営みが内包する困難性については富山一郎「赤い大地と夢の痕跡」『〈複数文化〉のために ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』複数文化研究会、人文書院、1998年、122-124頁を参照せよ。地域研究の誕生、及び知識生産の営みに関する批判に対しては、Mezzadra, Sandro and Neilson, Brett *Border as Method, or the Multiplication of Labor*, Duke University Press, 2013, pp43-46を参照せよ。

<sup>175</sup> 2年に一度、7月の第1週目に、日系人主体のボランティアによって運営される非営利団体ツールレイク・コミッティー（TLC）主催による、ツールレイク・ピルグリメッジ（Tule Lake Pilgrimage）がツールレイク強制隔離収容所の跡地にて開催されている。

た者、市民権破棄者となった者たちの経験を理解しようとする態度が見受けられる。しかし、それはあくまで不忠誠者の言い分として理解しようとする構えであることに変わりない。また依然としてここに潜在している意識は、忠誠を誓った勇敢な二世兵士を軸に据えようとするものであり、それを支える良きアメリカ市民としての自画像である。そこには、忠誠・不忠誠の枠組み自身が問われないままの領域があり続けているのである。このような問題を念頭に置きつつ、ミリキタニの存在とこの映画とともに、これまでの日系人史を構成してきた認識について改めて考えていく。

## 2. 近代国家と徴兵拒否

1942年2月、行政命令9066号が署名されると、JACLは西海岸に住む日系住民への強制立ち退きや転住政策に関わってWRA (War Relocation Authority) と協力関係のなか日系人コミュニティを先導していった。アメリカ政府と協力し、アメリカの戦争遂行に協力する道を選んだJACLの態度はナショナリズムに傾倒していた。しかし、愛国主義という説明だけでは到底説明するに及ばない領域がある<sup>176</sup>。そこには、戦争遂行に伴い、誰が兵士あるいは国民になれるのかという問題が横たわっているのである。戦後になると、戦時下におけるJACLのアメリカ政府との協力関係について、批判の声も上がった<sup>177</sup>。しかし、アメリカの主流社会と日系人社会による442部隊の活躍への賞賛は、それをはるかに上回っていたのである。

映画のなかで、日中戦争の開始と共に徴兵年齢に達したミリキタニは、兵学校の入学を巡って、兵士ではなくアーティストになることを望んでいた彼と、入学を勧めていた父親との対立を振り返っている。二重国籍であった彼は、アメリカに渡る道を選び、姉夫婦のいるシアトルを目指した。ここに、日本で兵学校入学を拒み、後にアメリカの収容所内で行われた忠誠登録の質問に「NO」を回答したミリキタニの一貫した戦争参加への拒否がある。では、徴兵を拒むとはどのような事態であったのであろうか。忠誠登録は、アメリカか日本のど

---

<sup>176</sup> 日系人兵士の戦争動員について、ナショナリズムとレイシズムの関係性についての議論は、Fujitani の以下の論文を参照せよ。Fujitani, Takashi, White, Geoffrey M., Yoneyama, Lisa, *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(S)* (North Carolina: Duke University Press, 2001, pp241-247.

<sup>177</sup> ナカノ、メイ『日系アメリカ女性、三世代の100年』(サイマル・アカデミー訳)、サイマル出版会、1991年、123-124頁。



ちらに忠誠を誓うかということが帰属意識の問題として扱われてきた。その審査の実施は、兵士の選別、収容者の選別・隔離という結果をもたらした。戦時にアメリカ軍によって強制的に実施されたこの審査は、国家権力が孕まれている。つまり、収容所での忠誠審査を考える際、国家権力による法の停止と暴力こそが議論されなければならないのである。

法の停止と暴力が蔓延した収容所で行われた忠誠審査に対して、ミリキタニは「NO」と回答した。兵士として戦争に動員されることが迫るなか、これがどのような意味を持つのかという問いを検証する必要がある。この検証は、兵士ではなくアーティストになると主張し、一貫して戦争に加担することを拒み続けたミリキタニについて、国家権力による戦争動員に対する争いの意味を読み解くための作業である。戦争動員が待ち受けている状況においての否定である、「NO」という回答は、徴兵とその先に待っている戦場における死に対する拒否なのである<sup>178</sup>。酒井直樹は小説『ノー・ノー・ボーイ』<sup>179</sup>の主人公、イチローの徴兵拒否を巡る文章に関連して、近代国家における徴兵制度について以下のように述べている。

＜国のための死＞における国とは、近代社会においては、同時に国家でありまた国民であって、まさにそれは国民国家なのだ。だからこそ、徴兵拒否は国家の命令に対する拒否だけでなく、同胞のために死ぬこと、国民を自己の帰属する運命共同体として認定することの拒否をも意味することになる。それは国民の名において自己の死を賭けること、自己の死の可能性を媒介にして、国民共同体と同一化し、そこに帰属しようとするこ

---

<sup>178</sup> 酒井直樹は、不忠誠と徴兵拒否に関わって、「アメリカに対する否を通じて、何者かに回帰しようという思い込みに対する否であり、内としてのアメリカから追放された者たちの間に成立する社会への強い肯定なのである。」と述べている。酒井の理解から読み取るべきは、アメリカ国籍を持っているにも関わらず日本に出自を持つことを根拠に拘留され者たちが、別の社会性を獲得しようとする動きである。ここで意味する社会とは、近代性により措定された国民国家とは異なるのである。酒井直樹 『死産される日本語・日本人-「日本」の歴史-知性的配置』新曜社、1996年、99-126頁。

<sup>179</sup> 日系アメリカ人二世のジョン・オカダ (John Okada) によって執筆された小説『ノー・ノー・ボーイ (No-No Boy)』は1957年に出版され、戦時から戦後における忠誠登録審査によって翻弄された日系アメリカ人二世の葛藤を描いた作品である。出版当初は、1500部にも届かなかったが、公民権運動の高まりとともに評価されていった。ディスカバー・ニッケイ、日本人移民とその子孫、第1回「『ノーノーボーイ』とは何か」川井龍介、2016年1月22日 <http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2016/1/22/no-no-boy1/>。

との拒否なのである。<sup>180</sup>

酒井の文章から読み取るべきは、近代社会が指定している自己の死を賭ける徴兵制度を通じて国民共同体に帰属する方法に対しての拒否である。日系人は、暴力にさらされた収容所において従軍を半ば強制されたが、従軍によって国民共同体への帰属が完璧に達成されることはなく、さらにそこでは兵士となり命を落とした者がたくさんいた。従軍によってアメリカ軍の一員として認められた経験は、国民共同体の内部に入ることを意味していた。しかしながら、国民共同体内部への参入は、人種主義を乗り越えたのではなく、兵士として自らの命を国に捧げることを意味し、死の領域に入ることに他ならなかった。二世兵士は、死をもって、国民共同体内部への参入を果たしたのである。よって、死者たちはアメリカ国民として認められたのである。戦後の日系コミュニティにおいて、二世兵士の従軍経験は、JACL が掲げる愛国的ナショナリズムのもと、生き残った兵士たちを英雄にまつりあげることによって、日系アメリカ人の模範的な自画像を描き出してきたのである<sup>181</sup>。また、本研究は、忠誠登録をめぐる暴力と、かかる経験を帰属意識の問題として回収しようとする学知に対する批判としてある。そこには強制収容・忠誠審査に関わって、忠誠・不忠誠を選択した日系人たちの意識を調査・研究し、彼らの帰属意識の問題として扱うことで終止したアカデミアへの批判がある。

### 3. 不忠誠という問い

忠誠登録審査に「NO」と答えた者たち、あるいは回答すること自体を拒否した者たちは、ツールレイク隔離収容所に収容され、アメリカ政府や JACL の政策に反抗する者たちとして、トラブルメーカーと呼ばれてきた。そこには、非愛国者としての不忠誠組を否定することによって、自らのアメリカ人性を保とうとしていた忠誠者たちの心性がある。換言すれば、忠誠-不忠誠組は、補完関係として認識されてきたのである。不忠誠組とは一体何を意味しているのだろうか。またこの問い直しは、忠誠・不忠誠組の二項対立的な補完関係に対す

---

<sup>180</sup> 酒井直樹、前掲載書、1996年、116-117頁。

<sup>181</sup> フジタニは、日系人442部隊を表象した映画『Go For Broke』や一連のメイン・ストリームメディアによって描かれた日系人部隊は戦時のアメリカ軍にはびこっていた人種差別を忘却すると同時に、モデルマイノリティ言説と共犯関係にある点を指摘している。詳しくは、Fujitani, Takashi, White, Geoffrey M., Yoneyama, Lisa, *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(S)* (North Carolina: Duke University Press, 2001, pp251-255) を参照せよ。

る問い直しに関わっている。

不忠誠組と呼ばれた人々の選択に対して、坂口は法律上も道義上も忠誠登録を許せないものとして、当時の日本の全体主義を嫌悪しながらも、ノー・ノーと答えた人達がいたことを指摘している<sup>182</sup>。坂口の指摘に注目すると、忠誠か不忠誠かという問題ではなく、日系人の戦争経験のなかで構成されていった、不忠誠者を親日派や国粋主義者とする設定自身を問わなければならない。換言すると、不忠誠者の日本観がどのようなものであったのかについて説明するだけでは十分ではないのである。日本の全体主義に批判的であり、かつ忠誠登録自体を許せないものとして「NO、NO」と回答したという坂口の指摘と、日本の兵学校への入学拒否、またアメリカでの忠誠登録に「NO、NO」と回答したミリキタニの戦争動員及び兵士になることに対する拒絶とは、法律も道義も総じて国家による戦争動員に対する拒否として重なる。また、日本での居住期間や教育年数と二世の市民権破棄について桑井は、教育と滞在年数が決定的要因と即断することはできないことを考察している<sup>183</sup>。

この分析は、本稿第2節1.で述べた不忠誠組の集団性についての議論に対する反証となる。また、忠誠登録においてミリキタニが「NO」と回答した根拠を、帰米二世であるところに見出すのは安易すぎるのがわかる。親日を掲げ、ツールレイク収容所において抵抗運動を組織し、日本への国外退去を要求した the Sokujikikoku Hoshi-dan といった集団は確かに存在した<sup>184</sup>。しかし、忠誠審査に「NO」と回答した者たちを一括りに扱い、「アメリカではなく日本に忠誠心を持っていた者たち」として理解し、国家への帰属意識の問題として終始させてはならない。前述したように、誰が兵士になるのかを問うている忠誠登録審査には、国家の存在が措定されている。今後、国家の枠組みを措定することによって、知識生産を行ってきた地域研究について継続して批判する作業が必要であることが再び浮かび上がる<sup>185</sup>。

---

<sup>182</sup> 坂口博一「ツール・レーク論」『早稲田人文自然科学研究』第25号、1984年、19頁。

<sup>183</sup> 桑井、前掲載書、1992年、177-188頁。

<sup>184</sup> Dorothy Swaine Thomas and Richard S. Nishimoto, *The Spoilage Japanese-American Evacuation and Resettlement During World War II*, (University of California Press Berkeley and Los Angeles, 1969, p322. ツール・レーク強制収容所で起こった Hoshi-dan を含めた抵抗運動については、本研究の限界を超えている。*The Spoilage Japanese-American Evacuation and Resettlement During World War II*を参照せよ。

<sup>185</sup> ここでいう認識枠組みは、上で述べた忠誠審査をめぐって整理されてきた一連の文脈を意味する。またそれは、日系人史を含めた地域研究の営みによって生産されてきた知識形

強制収容所生活のなかで「日本への思い」を馳せていた日系人たちが存在した。これらの思いが表現された文章や俳句などは、言表行為として日系文学研究の中でしてしばしば分析されてきた<sup>186</sup>。また、映画のなかでミリキタニが「かわいそうなアメリカ、今や日本とアメリカの立場はひっくり返ったよ。日本のパスポートは世界中で歓迎されるよ。アメリカのパスポートはゴミだね。」と言って、アメリカを卑下し、日本を褒めているように聞こえる場面がある。しかし、彼らが抱いていた「日本への思い」を、徴兵のために実施された忠誠登録、かかる国家による暴力に単純に接続されることこそが問題なのである。拘留状態に置かれた者たちが抱いていた「日本への思い」よりも、国家による暴力に注意が払われなければならない。なぜならば、忠誠登録の根底にあるのは、アメリカか日本かのどちらかに忠誠心や帰属を選ばせることではないからである。敵性外国人が拘留の根拠にされ、強制収容所に収容された状況において、彼らの帰属を自ら選び取る権利自体がすでに剥奪されていたと捉える必要があるのである。この点をふまえたうえで、「日本への思い」を検討されねばならない。戦争に動員され、兵士になることに一貫して拒否し続けたミリキタニが抱いていた「日本への思い」が検討されるべきである。彼は、戦争や原爆によって亡くなってしまった親類への哀悼、そして、まだ戦火が及んでいなかった戦前に幼少期を過ごした広島に思いを馳せていたのであろう。もちろんそれは、天皇主義者といった類の心性とは異なり、またナショナリズムの対象としての日本とは違う日本を意味していたのである。

### 第3節. ミリキタニにとっての絵を描く行為

#### 1. 抗い続ける戦術としての創作活動

『ミリキタニの猫』の監督となったリンダがミリキタニに初めて出会った日も、彼は路上でひたすら絵を描いていた。映画のなかで彼は、「心臓が止まる

---

態に対する批判的視座でもある。

<sup>186</sup> 加藤好文「アメリカにおける史跡保存と「巡礼」の文化史的意義 -日系アメリカ人収容所跡地をめぐる」『愛媛大学法文学部論集人文科学編』2010年、67-81頁。篠田左多江「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動②トゥーリレイク収容者—」『東京家政大学研究紀要』第29集、1989年、11-21頁を参照せよ。

瞬間まで描き続ける。」と語っていた。彼にとって絵を描くことは、どのような営みであったのであろうか。戦争で唯一生き残った姉と生き別れ、原爆で母方の親類の多くを亡くした彼は、隔離収容所で強制労働を強いられた。これによりもたらされた怒り、悲しみ、喪失に対して、ひたすら絵を描き続けることにより彼自身が感じてきた暴力で覆われた社会をすぐさま言葉にして語るのではなく、語れないが故に言葉にできない感情とともに戦争経験を視覚化していたのである。

ミリキタニの絵には、猫、強制収容所、戦艦、原爆、戦前の故郷の広島風景、9.11のビルの崩壊する様子といった戦争に関わる題材が多くを占めている。彼が絵を描き続ける根底には、これらの出来事によって死んでいった者たちへの追悼がある。またこれらの絵は、主流派によって語られる歴史ではなく、彼自身が感じてきた暴力が表現されたものであった。ミリキタニは、よく猫とともに鯉の絵を描いていた。原爆で犠牲となった人々、完全に焼きつくされてしまい廃墟化した広島に生き残った鯉を描き続けることによって、彼はもう以前のように存在しない喪失をなんとか埋めようとしていたのかもしれない。

ミリキタニは、路上で彼の絵に興味を持った人たちに収容所や広島原爆についての演説を繰り返してきたという。映画のなかで、カンザス大学のロジャー・シモムラ<sup>187</sup>が一年ぶりにミリキタニのもとを訪ねた時のことを思い出しているシーンがある。シモムラは、かがみ込んで描いている最中の彼に「また収容所の絵ですね」と声をかけると、彼は激怒し、収容所に関する演説をはじめたという。そしてシモムラは、彼がいつもこのような演説をしているのだと気付いたと語っている。何度も収容所の経験を描き、演説しようとも、描いていると、演説しているとみなされなかったのである。アメリカ主流社会だけではなく、日系人社会も同様に彼の経験を聞こうとはしていなかったのである。

ニューヨークには日系人が集まるジャパン・タウンがないがために、リンダとの出会いによって映画が制作されるまで、日系人コミュニティに彼の存在と

---

<sup>187</sup> ロジャー・シモムラ (Roger Shimomura)、アーティスト、カンザス大学名誉教授。1939年シアトル生まれの日系三世。幼少期をアイダホ州ミニドカ日系人収容所で過ごす。1999年ミリキタニと出会い、お互いに強制収容所の絵をかくアーティストとして親睦を深めてきた。鑑賞ガイド『猫とアートと戦争と… (そして尊厳) ミリキタニの猫《特別編》』、湖畔八丁目、2016年、19頁。

創作活動が知られなかったのかもしれない。しかしながら、ここではむしろ彼のようなトラブルメーカーとして扱われた者たちに対する日系人コミュニティの不寛容さを看取するべきである。聞いてもらえない-受け入れられない-認めてもらえないが故に、彼はニューヨークの路上から収容所を描き続けていたのである。この意味で、リンダ・ハッテンドーフという日系人コミュニティに属していなかった人物とミリキタニとの出会いによって、彼の存在が知られるようになったことについての関連性が浮かび上がる。

映画のなかでミリキタニは、ツールレイク収容所で、ある男の子に猫の絵をよく描いてあげていたことを回想している。その男の子は、収容所内で亡くなり、キャッスル・ロック山麓に埋葬されたという。映画のなかで「収容所で亡くなってしまった人々の顔を覚えている。」と語ったミリキタニは、絵を描くことによって亡くなった者たちとの関係性を保ち続けていた。彼が描く作品は、死者たちとの記憶とともにあるのである。ミリキタニ自身、暴力にさらされながらも、先に戦争の犠牲で亡くなってしまった者たちを念頭に置き、絵を描くことによって、どうにか暴力に抗い続けようとしていたのである。さらにこれは、暴力にさらされて亡くなっていった者たちが再び忘却という暴力にさらされることに対する抗いをも意味する。絵を描き続ける彼は、忘却に対して抗い、絶えず死者を想起し続けるとともに、暴力の根拠が容易に「理解」されることに対して抗い続けていたのである。再びここに忠誠審査、及び従軍経験に関わって、戦時の日系人への暴力を国家帰属の問題として扱うことに終止した状況に対する抗いが読み取れる。

絵を描き続けると同時に、ミリキタニはニューヨークの路上にその作品を並べ続けていた。彼にとって路上は、絵とわずかな現金を交換する場所であったが、それ以上に生活を営む場所であり、アーティストとして作品を制作する場所、スタジオであった。路上に無造作に並べられた作品には、それぞれ歴史的背景や解釈がある一方、いくつもの絵が同時に並べられることによって、ミリキタニの記憶とともに作品がブリコラージュとして現れたのである。すなわち、これらの作品の個別具体的に歴史的背景があり、それぞれに解釈があり、秩序があるが、無造作に並べられるなかでブリコラージュとして現れた作品群には、それぞれに描かれた歴史上の出来事がミリキタニの平和への希求として平面へと融解していくのである。映画のなかでミリキタニのお決まりのピースサインと共に発せられる言葉、「メイク・アート、ノット・ワー (Make Art! Not

War!）」、「ノー・ワー、ノー・キリング・ピーポー、ワールド・ピース (No War! No Killing People! World Peace!）」<sup>188</sup>は、この平面に重なり合うのかもしれない。それは、描くという実践によって、いかなる国家による武力行使に対する「否」を示す実践である。リンダが彼の映像を撮っていた2001年9月に、ニューヨークで同時多発テロ9.11が起きた。高層ビルが倒れていく様子を横目に、いつも通り描き続けていた彼が放った「戦争はいかん。五秒で灰だ。」<sup>189</sup>という言葉が再びここで響く。

## 2. 怒りと弔い

原爆によってミリキタニの母方の一家は全滅し、また姉の和子さんを除いた兄弟は皆戦死してしまったという。強制収容所に送られた彼は、そこでも多くの人々が亡くなっていくのを目の当たりにしてきた。彼にとって、絵を描く行為は、戦争の記憶を想起させるとともに、その犠牲者を弔う行為であったのではないだろうか<sup>190</sup>。

ミリキタニが想定しているのは、もうすでに亡くなってしまった家族、友人、戦争で犠牲となった者たちであり、彼らを巻き込んだ集団行為としての弔いなのである。映画の最後のシーンでは、2002年7月に行われた、ツール・レイク強制収容所巡礼ツアーの様子が映し出されている。祭壇に参り、キャッスル・ロック山を背景に収容所をひたすら描き続けているミリキタニは、何が起こったのかを思考し、同時に視覚化し続けるのであった。リンダはインタビューで、「ジミーは、描くことによって、彼自身の戦争の傷を癒していた。」と語った<sup>191</sup>。しかし、映画のなかで巡礼を終えた帰りのバスのなかで、「幽霊はわしに親切だった。」と述べたミリキタニの言葉と創作活動を考慮すると、彼自身の傷を癒すためだけではなく、戦争で亡くなった亡霊たちの存在をうかがうことができる。

---

<sup>188</sup> 映画『ミリキタニの記憶』、監督・製作：マサ吉川、編集：出口景子、石田優子、杉田協士、撮影・スチール：御木茂則 芦澤明子、音楽：SKANK・スカン、日本、2016年、21分。

<sup>189</sup> Hattendorf, 2006.

<sup>190</sup> 歌手の森山直太郎は、『ミリキタニの猫』《特別編》公開にむけて、以下の推薦コメントを寄せた。「彼はまごうことなく自らをアーティストだと言う。過酷にも見える人生の最中で亡くなった友のために“アーティストであり続ける”という行為が唯一の弔いの形なのだ。」出展、『ミリキタニの猫』《特別編》[nekonimirikitani.com/comments.html](http://nekonimirikitani.com/comments.html)、2017年12月26日アクセス。

<sup>191</sup> 筆者によるハッテンドーフへのインタビュー、アメリカ合衆国、ニューヨークのリンダの自宅にて、2014年3月。

彼の創作活動は、死者をも巻き込んでいるのである。川村邦光は、『弔い論』において、生者や死者といった区分けや序列がなく、ひたすら弔い続ける集団の存在について、代理するのではなく終らない弔いとして弔う集団性について論じた<sup>192</sup>。ミリキタニが描き、経験を語ることによって記憶を想起させ、絶えず死者たちを巻き込みながら弔い続けていた記録がこのドキュメンタリー映画に記されている。そして、このドキュメンタリー制作に関わった者たち、鑑賞した観客たちも同様に弔うという行為に巻き込まれているのである。路上で、一人黙々と描き続けていたミリキタニは、集団行為として決して終わらない弔いを続けていたのである。

#### 第4節. 可能性としての行為主体性 (agency)

これまで述べてきたように、強制収容や忠誠審査の背後にある問題は、アメリカという近代国民国家による逃れようのない暴力であり、主権が奪われる事態であった。政府と軍による逃れようのない暴力に抗う契機の一つとして、ミリキタニは絶えず絵を描き続けていたのである。暴力に抗う契機の一つとしての絵を描くことについて、もう少し検討する。その際には、日系三世のビジュアル・アーティスト、スコット・ツチタニの創作活動が手がかりとなる。日系三世の彼自身は収容所経験を持たないものの、親から受け継ぐ強制収容所経験の重荷を抱えているという<sup>193</sup>。その重荷に加えて人種化されたアメリカ社会のなかで生きていくなかで、彼は創作活動を自己発見の行為と考えている。<sup>194</sup>自己発見をしていくプロセスは、自分自身と社会に対する認識、行為主体性 (agency) を再構築する。また、芸術家であるかそうではないかは、周りが決めることでもなく、自分で名乗ることだという<sup>195</sup>。ミリキタニも映画のなかで何度も彼自身を「グランドマスター・アーティスト」と、名乗っていた。彼にとってアーティストであることは、すぐさま語るができないような戦争経験によってもたらされた悲

---

<sup>192</sup> 川村邦光『弔い論』青弓社、2013年、9-44頁。

<sup>193</sup> スコット・ツチタニは、サンフランシスコ州立大学エスニック・スタディーズ研究科アジア系アメリカ人スタディーズのウエスリー・ウエウンテンのクラスでゲスト・スピーカーとして「What can art do?」と題した講演を行った。参与観察、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2016年5月16日。

<sup>194</sup> ツチタニへのインタビュー調査、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2016年9月20日。

<sup>195</sup> スコット・ツチタニへのインタビュー調査、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2016年9月20日。



しみや怒りの感情に対して正気を保つための継続した抵抗であった。アーティストであるとは、終わりなき怒りと弔いととも描き続けるという行為遂行的な営みによって、彼自身の行為主体性 (agency) を絶えず作り変えていたことなのである。また、彼が路上においてたった一人で絵を描き続けた行為は、記憶を想起し続けることにより、死者や不忠誠者として日系人コミュニティからも忘れ去られていった者たちを絶えず浮かび上がらせる運動であった。そこには、経験が時間の経過とともに歴史化され、言説になる一歩手前にとどまり続けるミリキタニの態度があった。それは、従来の愛国主義的ナショナリズムやモデル・マイノリティ像にみられる模範的な日系人像、またそれに対して不忠誠者にみられる日系人像のいずれをも大きく揺るがしながら、決して固定された別の自画像を構成することでもない遂行的なプロセスとしてあるのだ。では、このような遂行的なプロセスは、一体どのような社会性を生み出していくのであろうか。映画制作/上映活動をとおして、様々な人々を巻き込みながら新しい関係性に関かれ、上映運動という形で記憶が共有され、重層的に展開されるプロセスについては、第4章で述べる。また、こうした映画制作/上映活動を、従来の社会運動として捉えるのみならず、ポスト・フォーディズムにおける労働の質的変容の問題として芸術的労働から捉えると、巻き込まれてゆく者たちは各々が行為主体性 (agency) をもち、必ずしも貨幣的価値に還元されない労働には新しい社会性、コミュニティ形成、人間関係を創造していく起点があるのだ。

#### 第4章. 私たちを隔てさせるものは何か 他者との連帯をさぐる

##### 第1節. 映画鑑賞による連帯の発生

アジア系アメリカ人は、アジア系とゆるやかに地政学的認識によって集団化されているが、言うまでもなくかかる地政学的な枠組みでは到底理解に及ばない。加えて、学の高みからカテゴリーに分割された集団性を自明にすると、いまを生きる人々のリアリティをとり逃してしまう。様々な軋轢や差異を抱え込みながらも、アジア系アメリカ人映画祭において、アジア系といわれる人々の間にどのような連帯が発生しているのであろうか。現地で知り合った日系三世、Nさんとの対話から、以下のような語りを聞き取ることができた。日系三世のNさんは、映画祭、キャム・フェス(CAAMFest)で、ベトナム戦争終結後、ボート・ピープルとしてアメリカに渡ってきたベトナム系移民のドキュメンタリー映画をみて以来、ベトナムについて興味を抱き、関連本を読みあさったという。

なぜアメリカには、サイゴン・カフェといったように、サイゴンという地名は現在においても店名などに使用されるのにも関わらず、ホーチンミンという地名は全く使用されないことに疑問が湧いた。ベトナムからアメリカにやってきた人々の中での共産主義者への迫害についてのコミュニティ内の政治を問題化したドキュメンタリー映画が、映画祭で上映されないことに気づいたわ。<sup>196</sup>

ここから何うことができるのは、映画鑑賞によって得た知識と彼女の日常生活が接続することで、さらなる興味、疑問が生まれ、緩やかなベトナム系と呼ばれる人びととの連帯が起こったのではないだろうか。それは、大きなスローガンによって集団化された政治的連帯とは異なる連帯のあり方である。こうして、アジア系アメリカ人自らの視点で歴史経験が映画化され紡ぎ出された知識が、彼女の日常空間を豊かにしているのである。またこうして蓄積された知識は、多民族社会で暮らす彼らにとって他者理解を促し、人間関係構築の一助となっているのかもしれない。というのは、現地で知り合った日系人男性の話によると、初めて会う人に必ず相手のエスニシティを尋ねることが習慣化されているという

---

<sup>196</sup> フィールド・ワークでのインタビュー調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2016年2月19日。

<sup>197</sup>。つまりは、エスニシティを尋ねることで相手の文化といったおおよそのバックグラウンドについての予想をし、より良い関係性を構築しようとしているからである。

日系人の人たちからよく聞く話の一つには、日系人強制収容所の映画は同じようなものが多いという意見である。それにも関わらず、彼らは映画館に足を運び続けている。一つには、家族や自分自身が被った強制収容経験をどうにか理解して乗り越えようとするものがきがあるであろう。キャム・フェス(CAAMFest)、アジア系アメリカ人映画祭で、日系人強制収容所の歴史を扱ったドキュメンタリー映画が上映された。その作品は、典型的なマスターナラティブに沿って日系人の歴史が描かれていた。上映後、日系三世の仲間内でかかる映画に関する感想を言い合っていた。そのなかの一人は、かかるドキュメンタリーを批判するように以下のように語った。

プロパガンダみたい。多分、スポンサーが大手のタイヤ製造企業だからこんな映画になったのかもしれない。<sup>198</sup>

この語りには、1988年にロナルド・レーガン大統領による「市民の自由の法」の署名と損害賠償による補償運動の公的な勝利による、やや手放し的に日系人の功績が描きだされたことへの怒りや納得に及ばない感情が伴った批判として受け止めることができる。

このようにして映画上映をとおして、経験がいろいろな人の身体を通過することが、知や経験を共有するということではないのではないだろうか。それはまた知識生産に関わって、重要とみなされなかった者たちの歴史経験や文化が忘却されていくなかで、こうした上映会とその後の広がり社会を再構成していく起点となっているのである。支配的な大きな政治は、それが団結であれ分裂であれ、人々の間に大きな衝撃を伴って影響を与える傾向にある。そのような空間への抗いは、複雑に絡み合った状態、つまりはリアルな社会の網において、人々の行動による予測不能な結合、分断を丁寧に辿ることで見出すことができるの

---

<sup>197</sup> フィールド・ワークでのインタビュー調査実施、ロサンゼルス、アメリカ合衆国、2012年2月。

<sup>198</sup> フィールド・ワークでのインタビュー調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2016年2月。

である。

ところで60年代以来、現在に至るまで日系人強制収容所の歴史についての映画は、収容所の歴史をさぐるドキュメンタリーや収容所の生活を再現したドラマといった多様な表現方法で制作されてきた。例えば、バート・タケウチ(Burt Takeuchi)監督による、二世退役軍人へのインタビューが集められた、二世兵士の戦場の記憶に関する作品ベラ・ウィズ・アーナー(*Valor with Honor*, 2008)<sup>199</sup>や、アン・カネコ(Anne Kaneko)監督による、442部隊<sup>200</sup>に入隊し、ヨーロッパ戦線で戦死してしまった二世兵士、スタンリー・ハヤミの日記をもとに、強制収容所、兵役の経験を描いたア・フリッカー・イン・エターニティ(*A Flicker in Eternity*, 2012)<sup>201</sup>がある。上映会に訪れた日系コミュニティの人々から、「日系人の映画は同じような内容ばかりでしょ。」というセリフをよく聞く<sup>202</sup>。しかしながら、彼らは映画祭やコミュニティ主催の上映会に足を運び続けている。何度も、おそらく年配者にいたっては、何十年に渡って、映画をとおして自分や家族の経験を吟味し続けているのである。彼らが映画制作、及び鑑賞を絶えず続けている理由は、自分が何者かを知る、考えること。加えて、彼らを取り巻く多民族社会において度々起こる危機にあると考えられる。危機から身を守るためだけではなく、危機による他者との間の分断を防ぎ、隣にいる人々の痛みを理解するためである。9.11やパンデミックといった大きな社会的危機から、コミュニティ間の関係性を揺るがした慰安婦像設置まで、いろいろな社会問題に向き合いつつ、異なる意見や史的背景を持つ隣にいる人々と共に生きる方法を絶えず探っているのである。

## 第2節. 映画祭空間の祝祭性

60年代、アジア系アメリカ人によって歴史経験を獲得することが目的の一つとしてはじめられた映画制作/上映運動であるが、かかる活動のなかに欠くこ

---

<sup>199</sup> Takeuchi, Burt *Valor with Honor*, Torasan Films, 1 hour and 25 minutes, 2008.

<sup>200</sup> 第442連隊戦闘団(442nd Regimental Combat Team)442部隊は、第二次世界大戦時、ヨーロッパ戦線での戦いが評価され、アメリカ国家に忠誠を尽くした日系人部隊として、英雄視されてきた。山本茂美、「442部隊の真実-日系アメリカ人最初の上院議員ダニエル・イノウエの自叙伝を中心」、金城学院大学論集、人文科学編、第10巻第2号、2014年を参照せよ。

<sup>201</sup> Kaneko, Anne *A Flicker in Eternity*, 25min, 2012.

<sup>202</sup> 日系コミュニティのイベントにおいて聞き取り調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2016年5月22日。

とができない要素の一つは、祝祭性である。他方で、映画制作/上映運動活動には、本人、家族あるいは先祖がエスニック・マイノリティであるがゆえに被った堪え難い苦難の歴史経験を改めて受け止めるという感傷的な経験が伴わざるおえない。マークスによって「フィルムの肌」と、たとえられた記憶の問題がある。すなわち映像には移民の経験の記憶が肌のキズのように刻まれているのである<sup>203</sup>。しかしながら同時に、映画際にはコミュニティの人々が集まり、なかには数年間を費やし制作された作品を鑑賞する経験には、悲しみだけではなく、喜びや歓喜の瞬間がもたらされているのである。一般的には、映画作品や公演の鑑賞の際には、受動的な存在としての観客が想定されてしまう傾向がある。しかしながら、映画祭におとすれた観客たちは、能動的に鑑賞することによって、映画祭の空間をつくりあげているのである。

例えば、2014年3月16日、キャム・フェス (CAAMFest) (サンフランシスコ国際ナショナル アジアン・アメリカン映画祭) において、カストロシアターで韓国系アメリカ人グレース・リー (Grace Lee) 監督により 12 年間の制作期間を要し完成に至った、中国系アメリカ人活動家グレース・リー・ボグズ (Grace Lee Boggs) の半生とデトロイトでの社会運動を記録したドキュメンタリー映画『アメリカン・レヴォリュショナリー: ザ・エヴォリューション・オブ・グレイス・リー・ボグズ』 (*American Revolutionary: The Evolution of Grace Lee Boggs*) が上映された。作品上映後には、韓国系アメリカ人のグレース・リー (Grace Lee) 監督とともに、ドキュメンタリー映画の主人公で同姓同名のアクティビスト Grace Lee Boggs が登場した。そこでは、その多くが何らかの社会正義を追求する団体に属する者たちによるスピーチ (Speech Act、一言ずつ自らの主張を表明する) が行われ、会場内は歓声と拍手に包まれた。スタンディング・オベーションが巻き起こり、オーディエンス、コミュニティ、映像制作に関わったスタッフが一体となり、まさしくアクティビズムが生まれている空間であった<sup>204</sup>。

こうした人々が立ち上がり、スタンディング・オベーションが鳴り止まない映画祭の空間は、アクティビズムが巻き起こると同時にどのような効果をもた

---

<sup>203</sup> Marks, Laura U. *The Skin of the Film: Intercultural Cinema, Embodiment, and the Senses*, Duke University Press, 2000, p209.

<sup>204</sup> キャムフェス (CAAMFest) (公式名: サンフランシスコ国際ナショナル アジアンアメリカン映画祭) での参与観察実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2014年3月16日。

らしているのであろうか。抗議活動の持つ威力について述べたスティーブン・シュカイトイスによると、鳴り響くマーチングバンドのリズムや路地の壁に殴り書きされたばかげたスローガンがもたらす集団的な時間をもたらすのは日常の裂け目であるという<sup>205</sup>。加えて、シュカイトイスは、政治的な芸術によって切り開かれる情動の空間に関して以下のように述べている。

麻酔ではなく、直接性と情動構成(affective composition)という、より古くラディカルな美学(aesthetics)が実践されているのである。こうした捉えがたい瞬間に、ラディカルな想像力の自己定位と運動が生じる。それは美学的な政治における情動構成をつうじて展開されるものであり、その美学の概念がもとづいているのは芸術的な構成の内容よりも、集団的な創造のプロセスから生じる関係や経験である。この美学は生産の諸関係に焦点を合わせるが、そのことが産み出された作品を理解する助けとなるからではなく、そこに明白な自己定位のプロセスがあり、政治的な芸術が可能となる空間が創り出されているからである。集団的な生を可能にするフォーラム-例の間主観的な理解としての政治が芸術をつうじて分節化される場-の存在が想定されているというよりはむしろ、われわれはここで情動の空間を目の当たりにしている。それは共にある空間であり、さまざまな結合、議論、共同性が出現するのに不可欠な前提条件となる結合である。これが美学的な政治であるのは-かならずしもその作品が直接に表現している内容によるものではなく-、それが演じる役割によって、重苦しい日常生活から秘翔する線が描き出され、音と経験の交雑のうちに、新たな諸関係や可能性が創造される空間が出現するからである。<sup>206</sup>

シュカイトイスの言葉を受けると、ドキュメンタリー映画『アメリカン・レヴォリュショナリー』(*American Revolutionary*)の上映は、集団的な創造作業の結実としての映画によって、集団的映画鑑賞という新たな経験がもたらされたと捉えることができる。そして、かかる経験をとおして、映画の素晴らしさ、力

---

<sup>205</sup> シュカイトイス、スティーブン「情動構成の美学-観客を消滅させ、群衆をうながす」西川葉澄(訳)、『VOL 03 Volume One : Anti-Capitalism / Art Volume Two: No! G8』萱野稔人(編集)以文社、2008年、51頁。

<sup>206</sup> シュカイトイス、前掲載論文、2008年、51頁。

強さはもとより、鑑賞者それぞれのなかにある情動が喚起され、日常との間にズレを生じさせ、なにかが動き出すモーメントが堆積する空間が作りだされているのである。かかる意味において、映画祭には、集団的創造のプロセスとともに、それぞれのアイデンティティ（必ずしもエスニック・アイデンティティとは限らない）にはたらきかける作用がもたらされていると考えられうる。こうした映画祭の空間は、日常の裂け目がつくりだされた一時的な空間であり、この意味でベイが一時的自律ゾーン（Temporary Autonomous Zone）と呼ぶ空間と重なるのである<sup>207</sup>。何かが動き出すモーメントが堆積した空間は、映画制作/上映活動への商品化の波を一時的に打ち消す。かかる空間において、スクリーンから運ばれたイメージに感化された者たちからはじまる未決の社会が準備されはじめられているのだ。またかかる意味において、映画祭の空間がもたらす効果は、以下の上野によるパーティーがもたらす日常への効果と同種であるだろう。

パーティーは決して秩序の安全装置ではなく、シーンやフロアから持ち帰ってきた「何か」が日常を少しずつでも浸蝕してゆくようなはたらきを担っているという点である。<sup>208</sup>

### 第3節. 映画祭：作り手がオーディエンスとなり、オーディエンスが作り手となる

第1章で述べたように、現代アートの世界では、天才的な芸術家によって創造される芸術が人間の最も純粋な表現であり、創造性が究極の価値であるとされている。かかる意味にしたがって考えると、映画祭に訪れる者たちは、平凡な存在であり、お金を払って作品を鑑賞する受動的なオーディエンスと一旦指定される。また、受動的な存在である彼らが描いた絵、詩や映画は、取るに足らない価値しかないのみなされうる傾向にある。しかしながら、アジア系アメリカ人映画祭に訪れる者たちは、オーディエンスであると同時に作り手にもなる。かかる意味で、単なる受動的なオーディエンスとしてとどまっていけないのである。例え

---

<sup>207</sup> ベイ、ハキム『T.A.Z. 一時的自律ゾーン』箕輪裕訳、インパクト出版会、1997年。（Bey, Hakim *T.A.Z. : The temporary Autonomous Zone, Ontological Anarchy, Poetic Terrorism*, Autonomedia, 1985.）

<sup>208</sup> 上野俊哉『アーバン・トライバル・スタディーズ パーティ、クラブ文化の社会学』、月曜社、2017年、77頁。

ば、サンフランシスコ在住、台湾系アメリカ人バラリー・ソー(Valerie Soe)監督による映画『ラブ・ボート タイワン』(*Love Boat: Taiwan*)は、台湾系アメリカ人を含む大学生たちが、台湾留学をとおして自分たちのルーツの探求した青春時代にまつわるドキュメンタリー作品である<sup>209</sup>。上映後、当時台湾留学プログラムに参加していた者たちは舞台上に登壇し、当時の青春の思い出話を交えながら、制作、上映についての思いを語った<sup>210</sup>。青春の記録がこうして今一度映画化されたことによって、当時の友人たちとの間には再び交流がうまれていた。観客席には、この映画に登場した学生たちが、幾分歳をとった姿で和気あいあいと横一列に座っていた<sup>211</sup>。時を経て、思い出が映画化されると同時に上映活動が契機となって、再びここでコミュニティ形成がなされたのである。それは、当時の留学プログラムの参加者と映画のクルーのみならず、上映会場に訪れたオーディエンスを含む緩やかなコミュニティである。かかるコミュニティは、特定のエスニシティを軸にした集団性とは異なる。ここには、集団行為としての映画上映/観賞において、歴史の再解釈をとおしてもたらされた集団が発生しているのである。さらには、かかる歴史の再解釈行為には、解釈労働(Interpretive Labor, Interpretive Work)としての芸術的労働が伴っているのである。換言すると、作り手がオーディエンスとなり、オーディエンスが作り手となる映画祭では、上映をとおして、他のコミュニティの人々との間に、繋がりや連帯がもたらされ、新たな集団性が発生しているのである。

#### 第4節. 歴史記憶が交差する空間 サンフランシスコ市慰安婦像建設の是非をめぐって

慰安婦の苦しみやこれまでの慰安婦補償運動の積み重ねを脇にのけるかのように、双方の国家権力により強制的に問題を抑え込もうとした日韓合意は、アメリカのオバマ大統領、大韓民国のパク大統領、日本の安倍首相の三カ国首脳会談の実施と同時期に締結された。圧倒的権力によって国家間で繰り広げられる交渉や合意にたいして、スクリーンの前で座ってニュースを見る者、つまり一般人は為す術がない、意見など届かないという気持ちにさせたのではないであろうか。

一方でサンフランシスコ市の慰安婦像建設をめぐって政治的関心を抱いた

---

<sup>209</sup> Soe, Valerie *Love Boat: Taiwan*, 1 hour and 3min, 2019.

<sup>210</sup> キャム・フェス(CAAMFest 2019)での参与観察、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、ロキシー・シアター、2019年5月19日。

<sup>211</sup> 参与観察、同上、2019年5月19日。



人々は、自らのルーツに関わる一大事として受け止めた。それぞれが抱く感情と発せられる様々な意見や動きは、アジア系アメリカ人社会に大きく揺さぶりをかけた。旧日本軍による慰安婦被害者が家族の一員である者たちに限らず、直接的な被害を受けていない人々も、皆真剣に慰安婦像建設の是非に対する意見を表明するなどし、また職場、コミュニティ・イベントの場、家庭内といったそれぞれの日常で議論を交わし合っていた<sup>212</sup>。慰安婦像建設の是非に関する公聴会に限らず、人々の日常会話でやり取りされる対話においても、大きな政治だけでは説明することができない、あるいは大きな政治を動かし得るかもしれない小さい政治の可能性を見出すことは、とりわけ重要な作業であると考えられる。なぜなら、私たちが耳にする情報は、国家間で交渉された結果が動かしがたい事実として伝えられると同時に、一方で、人々にはそれぞれ個人が抱く感情や意見があり、そこには現実をいかようにも動かす可能性が備わっているのである<sup>213</sup>。

2015年9月17日、サンフランシスコ市役所で開催された公聴会には、像建設の是非を巡ってカリフォルニア州のみならずアメリカの他の地域から訪れた在米日本人、在米韓国人、韓国系アメリカ人、中国系アメリカ人、日系アメリカ人といったアジア系住民、サンフランシスコ・ベイエリア在住の市民たちが集まった。サンフランシスコにおいて巻き起こった慰安婦像建設の動きは、言うまでもなく、帝国主義、植民地支配、ポストコロニアリズム、冷戦構造、グローバリズム、人種主義といったように様々なディメンションから考察する必要がある。しかし本研究には限界があるため、サンフランシスコ市の慰安婦像建設をめぐる展開された議論空間とローカルな人々の日常に焦点を縛りアプローチすることによって、サンフランシスコに暮らすアジア系アメリカ人のポリティクスと可能性について検証していく。

まず、現地社会を調査してすぐに気がついたことの一つには、サンフランシスコ・ベイエリアにおいて、慰安婦像建設に対して賛成の意を示している賛成派は社会正義を追求、サポートし、ポリティカル・コレクトの側に立っているという暗黙の了解が広がっていることであった。一方で、慰安婦像建設に反対する人の

---

<sup>212</sup> 筆者による参与観察およびインタビュー調査実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ市、2015年9月。

<sup>213</sup> よって、公共空間としてのサンフランシスコ市による公聴会だけではなく筆者による個人的なインタビューから得たデータをもとに執筆した。

中には、日本帝国の慰安婦制度自体がなかったとする極端な意見を述べる人たちもいた。現地で聞き取り調査を行うにつれて賛成派にも反対派にも、それぞれの意見は実に様々なグラデーションを帯びており、自らのルーツや立場が結びついていることが明らかとなった。以下で言及していく。

一部の日本の極右と呼ばれている人たちと同じく極端な意見を表明する者もいれば、まったく別のベクトルから考え、建設反対の意を表明している者もある。反対派といえども、一括りではなく、主張とその根拠は様々である。例えば、サンフランシスコの詩人で活動家であるジャニス・ミリキタニ (Janice Mirikitani) は、慰安婦像建設に反対する意見書を前もって市の公聴会に送付していた。彼女が反対の意を表明した意見書は、慰安婦問題がサンフランシスコの地で再び問題化されることによって、第二次世界大戦時の日系人に向けられた敵国日本が彷彿され、よって敵性外国人 (enemy alien) としての眼差しと反日、反日系) 感情 (anti-sentiment) が再び日系人や日系コミュニティに向けられるのではないかといった不安を表明する旨が書かれていた。後日聞き取り調査時に、かかるミリキタニの意見に対してどう考えるか尋ねたところベトナム系アメリカ人男性は、「(ミリキタニは、) 戦時と現在を混同しており、少し怖がりすぎではないか。」<sup>214</sup> という返答が返ってきた。しかしながら、時代が違うという理由で、この女性の懸念というものを、簡単に了解してしまうのは適切ではないかもしれない。この女性の懸念は、まずもって日系コミュニティや彼女自身に向けられるかもしれない、周囲からの圧力、ネガティブな感情に対する不安があると捉えるのは適切である。戦前、戦時のようなレイシズムが繰り返されることはないにしても、これまで緩やかに繋がっていた隣近所の人たちとの関係性が変わるかもしれない、壊れるかもしれないといった不安を抱えていることについて否定できないのである。ここで重要な点は、彼女が抱いた不安は、日本国家の戦争責任が日系アメリカ人に再び問われる事態を察知したことによってもたらされたと考えられる。日本の過激な保守主義者が慰安婦の歴史自体を否定し、慰安婦像建設に反対する態度とは著しく異なるという注釈を入れておく。彼女の慰安婦像建設反対に関する主張には、日系人として日本国家の問題を再び引き受けざるおえない事態が接近した場所から発せられたのである。今回、慰安婦問題が契機となって、サンフランシスコにおいて日系人であるということが再び

---

<sup>214</sup> ベトナム系アメリカ人男性への筆者によるインタビュー実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2015年10月3日。

問われる事態となって現れたのである。加えて、サンフランシスコ、ジャパン・タウンにある日系コミュニティ組織「Kimochi」のディレクターを務める日系二世の男性は、昨年の慰安婦像建設の是非を巡る公聴会で2分間スピーチを行った一人である。2016年5月、彼に慰安婦像を巡るコミュニティの一連の動向について、尋ねたところ以下のように語った。

韓国系や中国系といったアジア系のコミュニティは、いつもは協力して何かすることが多いのだけどね。イベントやお祭りなんかを一緒にやるために頻繁にやりとりして協力している。でも、慰安婦像の時は、違ったねえ。何も知らされないままことがすすんでいから、何もできなかったよ。一言声を掛けて欲しかったよ。慰安婦像建設に反対することはないが、私たち日系人が何十年も前に旧日本軍が犯した犯罪を我々にどうすることができるというのか。<sup>215</sup>

男性はがっかりした様子で日系人コミュニティが置かれている状況の複雑さを懸念していた。彼の話から、様々な史的背景を持つ人々が暮らすサンフランシスコ・ベイエリアが持つ特有の場所性や、そこでの人々との付き合いや暮らし方といったものを見受けることができる。そして、再び彼らがエスニック・マイノリティ、日系人であるがゆえに日本国家の問題から逃れられない存在であることが浮かび上がる。換言すると、彼らは、アメリカ人としてアメリカで暮らしながらも、自分の出自に関わる民族性や国家の問題を背負い、引き受けなければならないということである。アメリカ社会においてエスニック・マイノリティであるがゆえに責任が問われ続けられているのである。そして同時に、サンフランシスコで暮らしていくために、他のコミュニティと隣にいる人とどう付き合うか、どう一緒に生きていくかということが彼らの日常において極めて重要な論点なのである。

こうして個人の様々な意見に着目し検証すると、慰安婦像建設に対して賛成する＝社会正義 (social justice) の側に立っている者として了解する一方で、慰安婦像建設に反対の意を示す者たちは、そうではない側の人々として了解してしまうのは、早急な理解のあり方であることが浮かび上がるのではないであ

---

<sup>215</sup> 日系アメリカ人男性への筆者によるインタビュー実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2016年5月21日。

ろうか。慰安婦像建設賛成がリベラル、ラディカルであり、ポリティカル・コレクトの立場とし、建設に賛成が当たり前になっている現実的な状況を踏まえて、考察していくことにする。

慰安婦像設置に関わって、何が起きているのか。上で述べたように、一つには過去の歴史記憶がいま再び想起されているのである。これは個人的な経験に限らず、集団としての経験も含まれている。というよりかは、両者は交錯し合い、入り混じっているのである。このような交錯した歴史記憶ではあるが、人々の話題となる、あるいは今回のように市議会で議論の対象となる際は、一旦公共の歴史、集合的記憶として取り扱われるようにならざるおえない側面をもつ。公共の歴史、集合的記憶について米山は以下のように述べている。

公共の歴史や集合的記憶とは、さまざまな体験がひとしく表象される物語でもなければ、普遍的な社会的合意といったものでもない。むしろ、差異が絶えずせめぎあい、交渉しあう、そのような「場」である。

216

よって、歴史記憶をめぐるポリティックスとは、記憶とは、誰のいかなる記憶であるかということをめぐって常に包摂と排除がせめぎあう交渉の場である。そこには、絶えず誰の痛みや死という経験が、追悼、賠償に値するのか、あるいはしないのかという公共空間をめぐる争いに関係している。公聴会での証言であれ、大学やコミュニティでの映画上映であれ、歴史記憶を想起すること自体が、サンフランシスコの政治空間を創り出している要素となる。そして、かかる空間では、様々な史的背景を持つ人々がひしめき合う日常空間に戦争経験が現在進行中の問題として絶えず問われ続け、それぞれの記憶が重複、横断、分裂し続けている。

#### 第5節. 日系人兵士をめぐるリハビリと解放の言説

次に日系コミュニティの映画上映活動の考察から、日系人の戦争記憶と日本帝国の戦争犯罪のアメリカ化に関して述べることにする。現在日系人の置かれている状況や彼らのメンタリティの形成は、戦後アメリカによる日本への処遇

---

<sup>216</sup> 米山リサ『暴力・戦争・リドレス 多文化主義のポリティックス』、岩波書店、2003年、102頁。

と日本とアメリカの狭間で生き抜くしかなかった日系の過去の経験から大きな影響を受けていることは言うまでもない。よって、かかる関係性とコミュニティの動向、個人的な思い等は、検討すべき要素であるといえる。ニチ・ベイ・ファンデーション(Nichi Bei Foundation)によって開催された「追憶の日」について、現地調査から明らかとなったことを含めて考察をすすめていくことにする。

「追憶の日」Day of Remembrance (The annual Films of Remembrance – commemorating the wartime forced relocation of the Japanese American community into American concentration camps)とは、文字どおり第二次世界対戦時の日系人強制収容所の経験をコミュニティで共有することを目的としたイベントである。プログラムのメインイベントとして、日系人二世兵士の戦争体験を扱ったドキュメンタリー映画ハーバート・ヤマムラ・ストーリー(*The Herbert Yanamura Story*)が上映された<sup>217</sup>。この作品では、ある一人の元日系人兵士の経験が想起されている。この日系人兵士は、第二次世界大戦の末期、沖縄戦に従軍した。戦場において、追い詰められた沖縄住民たちは、ガマと呼ばれる場所に身を寄せ、アメリカ軍の上陸、攻撃と、沖縄の住民を防衛しようとはしない日本兵による略奪等から逃れようとしていた。そこで想起された経験は、拡声器を使って日本語でガマに身を隠している住民に降伏を呼びかけた日系人兵士であり、その日本語の呼びかけによって自決を思いとどめ、ガマから出てきた沖縄住民の姿が描かれていた。この日系人兵士の経験は、沖縄への侵略者であるにも関わらず、沖縄の住民を防衛することはない荒廃した日本兵に対して、救済者としてのアメリカ軍に属した日系人兵士の経験として想起されていた。また、勇敢な日系人兵士に対して、救出される側の沖縄住民という構図を見受けることができる。

ドキュメンタリー映画上映後に、日系コミュニティの集まりが開催された。ここでは、何人かの若い世代の方たちは、ドキュメンタリー映画を振り返り、「日本兵に見捨てられた沖縄の住民を救ったというように、彼らの祖父たちによる勇敢な行いに賛美を表していた。戦争の記憶が世代を超えて伝えられる際に、どのようにポリティックスが働いているのか。誰のどんな経験が、どのように記憶されるのか、あるいは何が排除されてしまうのか。そして、そこにはどのようなメンタリティが維持され、どのような記憶のポリティックスが働いているのであ

---

<sup>217</sup> Bocchieri, Alexander and Hayashi, Stacey *The Herbert Yanamura Story*, 25 min, 2015.

ろうか。ここで、アメリカ軍、日系人兵士の日本語の呼びかけによって死を免れた沖縄の人々の経験を否定する意図は全くない。しかしながら、このように記憶の想起のされ方について問題を感じずにはいられなかった。ここから考えるべきポイントは、現在の日系コミュニティ内部における二世兵士の記憶の認識のされ方をおして垣間見ることができる人々の感情、記憶の想起のされ方である。また、どのような経験をしたかということと、ある経験がどのように記憶されているのかと、いうことを区別する必要がある。しかしながら、想起されるとなると、両者の区別はなくなってしまう。加えて、上で述べたような想起のあり方と、彼らのメンタリティは、もちろんアメリカ社会でのレイシズム、同化による圧力の影響を否定することはできない。米山による、戦後冷戦期、アメリカの自由と民主主義の保護の拡大という名の下で構築されていった対日戦争を「よい戦争(good war)」とした戦争記憶のあり方への批判は以下の通りである。

さらに重要なことは、米国の対日戦争が良い戦争として記憶されており、アメリカの戦争の記憶と不可分に結びついていることです。<sup>218</sup>

さらには、米国の対日戦争は、日本人をはじめとするアジア人を解放し、復興させた「良い戦争」であったという記憶が、いわゆるポスト冷戦時代にも維持されている。<sup>219</sup>

上で述べたように、日系人兵士が無力な沖縄の人々を救ったと想起された戦争記憶は、米山によって指摘されたアメリカの対日戦争が、日本人とその他のアジア人を解放し、治癒・更生した(リハビリ)「よい戦争 (Good War)」であったという神話と重なり合うのである<sup>220</sup>。またかかる神話に対して、「アジア系アメリカ人は交渉しなければならない。」と、米山は続けて指摘した<sup>221</sup>。よって、無批判に英雄として日系人兵士の経験が想起されるとき、アメリカの自由と民主主義神話に加担してしまうのである。また同時に、想起された日系人兵士の戦争

---

<sup>218</sup> Yoneyama, Lisa *Traveling Memories, Contagious Justice: Americanization of Japanese War Crimes at the End of the Post-Cold War*, *Journal of Asian American Studies*, Volume 6, Number 1, 2003, p58.

<sup>219</sup> Yoneyama, *Ibid*, 2003, p59.

<sup>220</sup> また、このようなりハビリと解放の言説は、現在のイラクやアフガニスタンへのアメリカ政府/アメリカ軍による介入に適応されている。

<sup>221</sup> Yoneyama, *Ibid*, 2003, p59.

動員の経験の賛美は、アメリカ国家によるとりわけアジア諸国にたいする「第三世界の解放者」としての役割を果たしたという神話を助長するのである。加えて、かかる日系兵士の賞賛は、日本帝国の戦争犯罪のアメリカ化 (Americanization of Japan War Crime) に接続されうる。つまりは、ナショナリズム言説への回収を意味する。加えて、戦後の処理の問題において、かかるアメリカ化は勝者と敗者というように、より一層の二極化を引き起こしてしまう可能性を伴う。戦後処理、自国の侵略・加害への否認に向かう日本と、過去から現在に至って継続中のアメリカ軍による介入の正当化といったように。そのようなベクトルではなく、日本、日本人は侵略戦争、戦争加害に向き合い、責任を負い然るべき対応を取り続けるに他ならない。同時に、日本の戦争責任を日系人に転嫁することもまた違うのである。

#### 第6節. 戦争動員が常態化した社会

アジア・太平洋地域における第二次世界大戦後、アメリカ合衆国のヘゲモニーとその支配的語りは、旧日本軍による植民地支配、侵略戦争といった日本の戦争犯罪をアメリカによる解放とリハビリの神話へと塗り替えていった。アメリカの戦闘行為の正当性と戦後のアジア地域を共産主義から守るという大義のもと進められたアジア地域の占領に対する正当性を支えてきた。また、アメリカ主導の戦後秩序の登場は、日本の保守主義者たちと共犯関係において、進められてきたことを忘れてはならない。また同時に、韓国は、日本の植民地支配からアメリカの支配下へと置き換えられていった。

ここでもう一度、サンフランシスコにおける慰安婦像建設是非に関するトピックに戻すことにする。日系アメリカ人兵士としてのアメリカ軍での過去の戦争動員に関する記憶のあり方は、今日の慰安婦像建設をめぐるポリティクスからそれほど遠くないところに存在している。ここからもう一步すすめて考える必要がある。日本帝国の戦争犯罪のアメリカ化 (Americanization of Japan War Crime) は、慰安婦像建設をめぐるポリティクスを巡る困難さ、あるいは二極化を推進する力となって影響を与えているのである。つまり、アメリカ軍の一員として戦った日系部隊への賛美は、アメリカの戦争介入を賛美する「よい戦争 (Good War)」の神話へと横滑りするがゆえに、韓国を救済する、つまりここでは慰安婦像建設に賛成することに対する正当なる根拠へとつながるのである。

アメリカ軍による軍事介入は、自由と民主主義を世界に普及させるという絵

空事のイデオロギーによって正当化される面がある。また軍事介入には、まずもってアメリカ人兵士の存在が不可欠となる。現地でコミュニティの人々に関わるなかで、「戦争はよくない、平和がいいに決まっている。」、あるいは、「戦争を世界からなくすなんて個人がどのような意見を述べたとしても変えることはできないよ。」と、いった言葉をよく耳にする。では、アメリカ軍入隊に関わる人々の動機やメカニズムはどのように稼働しているのでしょうか。現地調査をすすめるうちに、軍に志願した者たちの話を聞く機会があった。軍への志願及び入隊と、上で述べたアメリカの軍事介入の正当化を容認する言説の間には、幾多にもなる層があり、両者を単純化し、接続させることは危険である。しかしながら、両者は無関係ではなく関連しているがゆえに、考察するに値すると考えられる。

私が聞き取り調査を行ったケースでは、60年代、オランダ-インドネシア系アメリカ人(Dutch-Indonesian American)の若者たちのなかには、インドネシアからアメリカへの移住後まもなくベトナム戦争へ従軍したものが多数いたという。彼らの多くは、アメリカ人として社会的に認められることを望んでおり、加えて将来の金銭的に余裕のある暮らしを思い浮かべた結果、入隊を志願したのであった<sup>222</sup>。アメリカ合衆国への移住と、アメリカ軍への戦争動員は、時折重なり合っている。とりわけ、移住してまもない若者たちは、経済的、社会的により安定した生活、及びステータスを獲得しようと入隊を決意する傾向にあった。日系人の経験が例証したように、兵士になることによって、アメリカ人として認められるわけではないのにも関わらず、同化圧力を受けざるおえない者たちは、あたかもそれを達成できるかのように捉えてしまう傾向があるのだ。こうして、アメリカ帝国主義、そして世界中に展開するグローバル・ミリタリズムは、部分的にはこうした移民の若者たちによって支えられてきたのである。

こうした絶え間ない戦争動員が繰り返されている社会、サンフランシスコにおいて慰安婦像建設の是非をめぐって、建設を支持することは、救済されるべき対象としての韓国の人々を救うことを意味し、日本帝国の戦争犯罪のアメリカ化(American Justice of Japanese War Crime)との関連が切り離せない関係にあることを否定できない。では、サンフランシスコにおける慰安婦像をめぐるアジア系住民の反応に関わる議論や運動が、アメリカのナショナルな言説として

---

<sup>222</sup> 筆者によるインタビュー調査実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2017年2月19日。



の歴史記憶、世界正義のアメリカ化(Americanization of World Justice)に包摂されない議論の道筋をいかにして見出すことができるのであろうか。つまりはナショナルな言説による包摂を防ぎ、その上で被害者の声を汲み取る努力が必要とされているのだ。

入隊への志願やアメリカの軍事行為を容認する風潮を支えている力学とは何か。あるいはどうしてこのようなメンタリティが形成されてしまうのであろうか。一つの手がかりとして、アジア系アメリカ人の米国での彼らに対する処遇を考えることは、有効であるように思われる。彼らに関わる文化的、政治的、経済面といったあらゆる側面において、常に祖国とアメリカとの関係性が問われる事態は否定し難い。法律的にはアメリカ国民であるにもかかわらず、彼らの出自は、絶えず問われてきた。彼らの出自に関わって、祖国とアメリカ国家との関係性の悪化がみられた場合、つまりは有事の事態になると彼らのアメリカ国家への忠誠が問われるのである。第二次世界大戦時の日系人や、9.11後のイスラム・アラブ系の人々への処遇が示すように、あからさまな国家的暴力が行使されるのである。いくらアメリカに長い間暮らしていても、アメリカの出生証明書を保持していたとしても、市民権の有無にも関わらず、国家や社会から何者かを問われることを免れることはない。これは、国家権力にかかわる暴力の問題領域でもある。かかる社会からの圧力や暴力に晒されながら、生活の安定とアメリカ人として認められることを望んだ若者たちの多くは、兵役に志願すると考えられうる。

#### 第7節. 国家間の問題として終わらせないために

様々な歴史的背景を持つ人々が暮らしているサンフランシスコにおいて、慰安婦像建設に関わるポリティックスについて検証してきた。上ですでに述べたように、慰安婦像建設に賛成の意を示す根拠の背景には、日本帝国軍による性犯罪に対する謝罪と日本政府への補償の追求がある。しかしここで立ち止まって考えなければならない問題点というのは、アメリカという場所で慰安婦問題が公共の議論となっているがアメリカ国家とかかる権力の存在が不在となっていた点である。アメリカの国家権力に言及した意見は公聴会で発せられなかった<sup>223</sup>。ここに、サンフランシスコにおける慰安婦像建設の是非をめぐる困難さがあ

---

<sup>223</sup> サンフランシスコ市役所で開催された公聴会での参与観察、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2015年9月17日。

る。日本帝国による戦争犯罪のアメリカ化(Americanization of Japan War Crime)を阻みながら、戦時の慰安婦の記憶を想起させ、議論することは実に困難であることが浮かび上がる。かかる歴史的問題を韓国および中国と日本との間の政治問題として捉えることは、過去および現在継続中のアメリカの軍事介入の正当化容認の危険性を伴う。加えて、公聴会の場を先導した韓国系や中国系以外の地域を出自とする被害者の存在の不可視化を助長する傾向にある。

また、慰安婦像建設に反対する人の中には、日本帝国の慰安婦制度の存在自体を否定する者もいた。彼らの存在や主張は、慰安婦像建設の是非に関わる対立をより二項対立的な性質へと推し進める側面がある。そして極端な意見ゆえに混乱をもたらし、より一層アメリカ国家の存在の不在化を推し進めてしまう。

慰安婦像建設をめぐる議論をきっかけとして、なされるべきは旧日本軍による性暴力被害者の出自に関わらず、彼女らの声をあげる状況を確保することが重要である。しかしながら、実際のところ彼女らの声は、すでに地元のエスニックコミュニティ間にある軋轢をはじめとし、地政学的ナショナルな枠組み、ジェンダー規範といった様々な規範に包摂されてしまっている。では、かかる困難さを伴いながらも、ここからどのような可能性を見出すことができるのであろうか。サンフランシスコの慰安婦像建設をめぐる議論において、日本帝国による戦争犯罪のアメリカ化(Americanization of Japan War Crime)を阻みながら、出自に関わらず正当な補償を求めていくことはできるのか。あるいは、日本帝国による戦争犯罪のアメリカ化(Americanization of Japan War Crime)を阻むとは、一体どういうことなのであろうか。

#### 第8節. 他者へと連帯してゆく記憶

市の公聴会の後もなお、サンフランシスコのアジア系アメリカ人社会では慰安婦像をめぐる話題が人々の間で盛んに議論、共有されていた。筆者が、大学やコミュニティのイベントに参加した際、人々の間で交わされていた話題の中心は慰安婦像の設置であった。そんななか、ある一人の女性と出会い、経験をシェアして頂いた。その女性というのは、私の友人の母親であった。彼女は、インドネシア、オランダ、ベルギー、チャイニーズの混血(ユーラシアン)であり、オランダにルーツを持つが故に、インドネシアの独立戦争後、国外退去の対象となった。そして、難民としてポーランドに移り住んだが住宅不足が原因となり、60年代初頭、アメリカ、サンフランシスコの地に移住した。彼女の夫は、化学の工

ンジニアとして、移住後一ヶ月も経たないうちに就職先が決まり、そこで漸く生活が安定したという。難民としてアメリカに移住し約60年が経過した現在、アメリカ国籍はなく、オランダ国籍保持者として生活している。現在は、なんとかオランダ政府から支給される年金を頼りに暮らしている。彼女は、戦時期、家族とインドネシアで暮らしていた時に、日本軍によって慰安所に連れて行かれそうになった経験がある。幸いにも彼女の母親が、彼女を病人だと日本軍に嘘をつき追い払うことができたため、連行されずに済んだという。加えて、ポーランドに約5年間難民として暮らしていた彼女は、過去の日本軍による性奴隷行為に対し、ポーランドの日本領事館前で抗議運動に参加した。近頃、メディア等で日本軍による慰安婦問題が報道される際には、日本では一般的に韓国慰安婦問題と報道されている。また、サンフランシスコの慰安婦像設置の決議をめぐって、被害者女性について言及される際は、その被害者の出身国は朝鮮、中国が大半を占めている。しかしながら、この一人の女性の証言から見出すべき点は、日本軍による性奴隷の被害者は、戦時における旧日本軍による侵攻範囲と重なっていることである。慰安婦問題を韓国、中国と日本の間の歴史問題として囲い込んでしまえば、他の地域で被害にあった女性たちの存在を忘却してしまう危険性が伴うのである。

この女性の半生、つまりは難民として最初に滞在したポーランドから最終的にはアメリカに移住し、数十年が経過した現在、サンフランシスコで行われた抗議運動への賛同を考慮すると、彼女の人生を翻弄させたポリティックス、つまりはオランダ、インドネシア、日本に跨る過去の植民地支配、戦争の記憶が、サンフランシスコの地において過去の堆積物として現れ出し、現在の抗議運動へと合流したのである。そして、次の世代の担い手となる彼女の娘へと、かかる抗議活動の意思は受け継がれていった。

ところで、こうした抗議活動が言説化され、アメリカ社会の議論のなかに取り込まれていく際に何が起きうるのであろうか。米山の指摘によると、アジア系アメリカ人が米国における諸権利を獲得するにつれて、アジア系アメリカ人として主張することができるようになるが、それと同時に許された歴史的土俵、つまりは、上で述べたようにアメリカの戦争介入を賛美する「よい戦争」(the Myth of “Good War”)と「解放」(Rehabilitate)を前提にした議論の土俵にのせられてしまう可能性がある<sup>224</sup>。かかるナショナリズムの言説による包摂を妨げなが

---

<sup>224</sup> Yoneyama, *Ibid*, 2003, P60.

らも、様々な個人的な経験に基づいた意思や抗議活動を尊重することが重要である。

アジア系アメリカ人は、アメリカの主流社会が要請する秩序への追従が常に期待され、同化圧力にさらされている。そして、人種主義的社会構造下において、秩序への追従や同化圧力は、アジア系アメリカ人の内側に犠牲者としての意識をより強く抱かせることを推進してしまう傾向を持つ。それによって、犠牲者としての被害者意識をより強く抱いた者たちは、他者の苦闘に鈍感になる。同化への圧力は、強力なイデオロギー作用を伴い、つまりは良きアメリカ市民になろうとする傾向が強化される。様々な文化活動や芸術的労働が行われ続けているにもかかわらず、アジア系への同化圧力によってかかるメンタリティーの形成は依然として継続されている。そして、人々の感情に関わって、こうしたメンタリティーの形成は、いうまでもなくコミュニティの風潮に影響を与え、サンフランシスコの政治空間を構築する要素の一つとなっている。

また、上で述べたように、繰り返すが、日系人の過去の戦争の記憶が想起される時、ナショナルな言説枠組みに包摂される危険性がつきまどっている。サンフランシスコにおける慰安婦像建設に対する支持表明は、実は日本帝国の被害国家としての韓国の救済、並びにアメリカの正義(American Justice)の正当化と切り離せない関係のなかにあるのである。冷戦期に拡大したアメリカの覇権は、アジア諸国のみならず、アメリカ国内のアジア系アメリカ人コミュニティの政治に至るまで影響を及ぼしていった。よって、こうした覇権拡大とイデオロギーに包摂された政治空間におかれながらも抗い、二元論的意見に収斂するのではなく、これまで取り残されてきた被害者を積極的に可視化するための努力が必要とされている。また、かかる障壁を突破するための尽力は、サンフランシスコの地であるからこそ実行可能であるとも言えよう。何故ならば、アジア系アメリカ人の間で発生する交渉のプロセスにおいて開かれる政治空間のなかにかかる可能性は開かれているからである。

上で述べたオランダ-インドネシア系アメリカ人女性(Dutch-Indonesian American)の存在は、サンフランシスコにおいて慰安婦の歴史認識が日本と韓国系、中国系の問題として収斂されている状況において、通常、可視化されずに取り残されてきた者たちの声が広められることを促す。そして、これまでのポリティクスとは異なる別のベクトルが動き出す新たな抗議活動の開始となりうるのである。加えて、それは公共の空間としての市の公聴会よりも、人々のやりとり

が盛んにある日常の社交空間において、かかる可能性の芽が散らばっていると言えよう。サンフランシスコの地で、彼女らの出会いは傷と傷が会うことを意味し、緩やかな傷の連帯がはじまりだす。つまりは、傷が接合 (articulation) し合うと同時に、傷の意味が別の意味へと変わりだす瞬間、そこに新しい政治の可能性があるのである。ナショナルな枠組みに包摂されることを妨げながら、抗議活動を展開し、補償の追求をおこなうプロセスは、アジア系にむけられたレイシズムと同化の圧力及びモデル・マイノリティ神話を跳ね除け、被害者意識 (Victimization) の妨げにつながる。よって、こうしたプロセスの総体は、アジア系アメリカ人自身の闘いなのである。

上で述べたようなコミュニティ間の軋轢や連帯を経て 2017 年 11 月 22 日、サンフランシスコ市エドウィン・リー市長は、第二次世界大戦時、旧日本軍によって強制された女性たちを象徴する慰安婦像の設置を正式に受け入れた。朝鮮半島と中国とフィリピン出身の若い女性 3 人を形取った像は、外側に向かって手をつなぎ、和になり立っている。傍らには、公に自身の体験をはじめて語ったキム・ハクスン氏の像が建てられた<sup>225</sup>。

さて、いわゆる歴史的な記念碑の建立は、昨今の賠償政治の文脈において盛んになっているが、本当の意味で歴史的モニュメントを建てるのが過去の歴史経験を吟味し、分断された歴史経験を乗り越えることにつながるのであろうか。記念碑の建立は、新たな歴史認識の権力やヒエラルキーをつくりだしてしまうという危険性が孕んでいることは否定できない。誰のソーシャル・ジャスティス (Social Justice) が一番正しいのかを競い合い、そして他の意見はそれほど重要な意見とはみなされないという事態の発生は否定できない。コミュニティに代表される意見や動向も大切ではあるが、そのみならず、それぞれの意見に注意深く目を凝らしてみると、コミュニティ間の微妙なポリティクスや、かかる隙間で葛藤する人々の声の重要性に気づかされる。記念碑が建てられる際には、正義、不正義にしる、いずれかの権力作用が大きく働いた結果であることを受け止めなければならないのかもしれない。重要なのは、運動のシンボルが権力化してしまうことの回避である。度々、記念碑が権力の象徴化した状況を受けて、デイビット・グレーバーは、こう問いかけた「誰が普遍的な事実や自然といったものについて、モニュメントをつくるであろうか？」<sup>226</sup>

---

<sup>225</sup> <https://www.bbc.com/japanese/45755385>

<sup>226</sup> Nika Dubrovsky and David Graeber, *Another Art World, Part 3: Policing and*

## 第5章. サンフランシスコ・ベイエリアにおける社会運動と起業活動

### 第1節. IT産業と都市のジェントリフィケーション

#### 1. フィールド・ワークから浮かび上がった問題意識

アジア系アメリカ人の調査のために訪れたサンフランシスコ・ベイエリアの南部には、ITグローバル企業がひしめき合うシリコンバレーが広がっている。筆者は、以前からシリコンバレーという場所に関心があり、さらには下で述べる一人の起業家にコンタクトを取る目的もあったことから、起業家が暮らすテック・ハウスに滞在した。テック・ハウスでは、スタートアップを目指し、昼と夜の境もなくパソコンの前で働き続ける彼らの暮らしぶりに驚かされた。一方、とりわけミッション地区やイースト・ベイ、オークランド市において激しく展開されていた警察による暴力、殺害に対する抗議運動に遭遇した。こうして、筆者は現地調査をとおして、IT産業・起業家と芸術家/活動家という一見して対立する立場にある人たちと出会い、意見交換を行った。そして、調査を重ねるごとに、「サンフランシスコという場所では、なぜ起業活動と社会運動/芸術的抵抗運動がかくも活発なのか？」という問いが浮かび上がった。

#### 2. 都市のジェントリフィケーション

サンフランシスコ・ベイエリアでは、金融業や不動産を主産業とするニューヨーク市を上回る家賃の高騰が示すように、急激な都市のジェントリフィケーションの加速が予断を許さない状況となっている<sup>227</sup>。高騰した地価やレントは、容赦無く社会のセーフティ・ネットに守られていない低所得者層を直撃し、失業者やホームレス人口を激増させてきた。その結果、取り残された者たちの多くは、街のあちこちで警官による取り締まりの格好のターゲットになっている<sup>228</sup>。警察の権限が恣意的に拡大され、明確な根拠のない取り締まりと過剰な防衛による発泡は、とりわけブラックやラティーノの若者の多くを死に至らせた。こうした

---

*Symbolic Order*, 2021. <https://www.e-flux.com/journal/113/360192/another-art-world-part-3-policing-and-symbolic-order/>

<sup>227</sup> Wiener, Anna “In San Francisco, Tech Money Doesn’t Buy Happiness” *The New Yorker*, May 17, 2019.

[https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-](https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr_oNTSxz_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM)

[happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr\\_oNTSxz\\_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM](https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr_oNTSxz_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM)

<sup>228</sup> 筆者は参与観察時に、実際に警官による路上生活者への職務質問が行われている光景を目の当たりにした、アメリカ合衆国、サンフランシスコ市、2014年3月。

警察による暴力は、被害者やその家族はもちろんのこと、ブラック、ラティーノ・コミュニティ全体に深い悲しみ、トラウマと恐怖をもたらせた。筆者は、警察の暴力に対する抗議活動の場に度々足を運ぶにつれて、抗議活動参加者とのやりとりが増えていった。警察組織の制度改革を求める声と同時に、彼らの多くから「テック関係者は貧しい人のことを考えていない。この街を壊そうとしている。」という声を頻繁に聞くようになった<sup>229</sup>。またオークランド・ミュージアムの展示の一部として設けられている壁は、訪問者が自由に意見を投稿することができる。そこには、テクノロジーとシリコンバレーに関する複雑な意見が書かれていた。例えば、以下のような文章が書かれていた。

おかげで人類は希望を失ってしまった。素晴らしいツールですが、基本的な人間性はそれによって大きく損なわれました。私たちは愛に戻ることができますか？<sup>230</sup>

テクノロジーは教育に役立ちますが、大きな影響力を持ち、それは必ずしもポジティブなものではないと思います。メディアが私に最も影響を与えています。17歳<sup>231</sup>

オークランドのジェントリフィ・ケーション<sup>232</sup>

コンピュータ技術には多くの長所と短所があります。コンピューターを使用すると、人々は必要なものや知りたいものを検索できます。この技術は、コミュニケーションに使用されてきました。しかし、テクノロジーは人々を社会生活から引き離す可能性があり、多くの問題を引き起こす可能性があります。<sup>233</sup>

ジェントリフィ・ケーションの深刻化に伴い、暴力による分断、軋轢が蔓延す

---

<sup>229</sup> フィールド・ワークにおける筆者と抗議活動参加者との対話から、アメリカ合衆国、サンフランシスコ市、2016年5月3日。

<sup>230</sup> フィールド・ワークでの参与観察、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2017年2月26日。

<sup>231</sup> 参与観察、同上、2017年2月26日。

<sup>232</sup> 参与観察、同上、2017年2月26日。

<sup>233</sup> 参与観察、同上、2017年2月26日。

る現地社会において、IT 産業従事者とそれ以外の人々の間の溝は、ますます深まりつつある。ここでいう IT 産業従事者とは、サンフランシスコ・ベイエリア、シリコンバレーにひろがる IT 情報産業に従事する労働者であり、かかる意味で特権者階級 (the privileged class) の人々を指す。IT 産業によってもたらされたバブル経済は、明らかに社会的分断を加速させた要因の一つである。階級、人種、エスニシティ、性差、宗教をはじめとした差異による分割型統治からなるアメリカ社会において、加えてシリコンバレーの人材確保の一旦を担う高度専門職移民ビザ発行は外国人労働者の就労を可能にし、かかる制度によって世界中からシリコンバレーに押し寄せた労働者は、競争を激化させ、さらなる分断をもたらしてきた。

### 3. シリコンバレーが持つ場所性

多くの人々がシリコンバレーという場所は、大胆な起業家や中心を持たない企業によって、オープンソースをもたらすソフトウェアが研究、開発され、あたかも自由に創造性に満ち溢れているところであると夢見がちな幻想を抱かれている傾向にある。例えば、桁違いの投資が得られるとシリコンバレーに憧れ、自国では得られないであろうチャンスを得ようとした人々が世界中からやってくる。彼らの目的やステイタスは一様ではなく、新しいサービスの起業を志す者、大手 IT 企業への就職を目指す者、資金調達のみを目的としている者、あるいはシリコンバレーという場所がどのようなところか偵察に訪れた企業から派遣されたサラリーマンや、シリコンバレーでの就職活動を念頭に置きインターンシップ先を探す大学生などがいた。出身国や立場といった社会的な指標においてはグラデーションがみられるが、大抵は野心的であり、新しいビジネスや製品を生み出そうと志す者が大半を占めていた。

シリコンバレー経済に象徴される、スティーブ・ジョブズによって設立されたアップル (Apple) やフェイスブック (Facebook)、ユーチューブ (YouTube) といった IT のグローバル巨大企業である。またコンピューターの出現及び、インターネットの普及は、私たちの生活スタイルや働き方に多大な影響をもたらした、地球規模で大きな変容をもたらしたと評価されている。しかしながら、技術革新の観点から捉えたグレーバーは、インターネットを過剰評価するべきではないとし、それどころかインターネットは私たちの想像力をスクリーンの中に封印してし



まったと捉えた<sup>234</sup>。加えて、米ソによる宇宙開発競争期を振り返り、ソヴィエトによる科学技術開発の頂点とし、以降現在に至るまでラディカルなイノベーションが起きていない事実に着目し、その要因の一つを公私の区別がなくなった官僚型資本主義文化の浸透に見出した<sup>235</sup>。そして、ネオリベラリズムを象徴する「評価 (evaluation)」、「自己実現 (self-realization, self-actualization)」といった言葉使いは、いずれも官僚主義的文化が浸透した社会の感覚を映し出したと指摘した<sup>236</sup>。かかる文化の浸透は、とりわけ研究機関における研究計画書といった書類仕事を増殖させ、実際研究に従事する時間や想像力を減少させ、イノベーションを阻害する。

## 第2節. 社会運動と起業活動

### 1. 社会運動と起業活動

サンフランシスコ・ベイエリアにおいて、なぜ社会運動と起業活動はこれほどまでに盛んなのであろうか。社会運動と起業活動の相関性について考察された研究は、おそらくまだ発表されていない。社会運動と起業活動は、全く逆のベクトルで稼働する活動であると理解されている傾向にある。前者は、社会的不平等や不正義を是正し、よりよい社会を目指すための活動である。そして後者は、野心的で個人主義な性質を帯びており、資金調達といった貨幣的、経済的価値を求め活動であるとされている。実際のところ、起業を開始するにあたって資金調達は第一ステップとされており、よって起業活動は経済優先であるとみなされるのは当然である。

上で述べたように、予断を許さない社会状況にあるベイエリアでは、都市のジェントリフィケーションに対する抗議活動が繰り広げられている。ジェントリフィケーションを誘発した原因は、複数の要素からなり決して単一の要因に還元できないが、金融経済の漸進と都市計画、移民政策といった社会的構造、制度的原因が複雑に絡み合っていると考えられうる。ベイエリアに極端なジェントリフィケーションがもたらされた要因の一つには、IT情報産業の繁栄と、増殖したヘッジファンドに群がる急増したスタート・アップ、起業活動が引き起こしたITバブルである。ITバブルは、レントの高騰をはじめとする物価上

---

<sup>234</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、151頁。Graeber, *Ibid*, 2015, P106.

<sup>235</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、175頁。Graeber, *Ibid*, 2015, P123.

<sup>236</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、191頁。Graeber, *Ibid*, 2015, P133.

昇を誘発し、間もなくして人々は抗議運動を開始した。抗議活動の現場では、「テック企業はもっと税金を払うべきだ。」という声が多く発せられている。確かに、大企業や富裕層への税制度が公平に機能していないのは明らかである。増税がかかる問題解決のためには、必須である。増税といった具体的な経済政策ではなく、他の視点からかかる問題についてアプローチしてみることは可能であろうか。一見すると相容れない社会運動と起業活動について、どのような観点から考察すればよいのであろうか。

上で述べたように、社会背景には、資本をはじめとする、階級、人種、エスニシティ等による分断があると同時に、新しい社会やモノ・サービスを生み出そうとする人々の想像力や創造性といった共通項があるのではないであろうか。換言すると、野心的な起業家と社会正義(Social Justice)を掲げた社会運動家/芸術家を相入れない関係として措定する一般的な見解、想定に疑問を投げかけ、両者を全く相反する存在として扱うのではなく、「新しい何かを社会にもたらしたい」とする両者の間に共通項を見出すことは可能であろうか。よって、本研究は、何らかの問題解決への道筋を考察する類の研究ではない。

## 2. テック・ハウスでのフィールド・ワーク

社会運動を現地で担っている活動家や芸術家からすると、野心に溢れているベンチャー起業家は、社会的問題を気にする素振りもなく、ただ自らのビジョンを追求し、ビジネス活動に邁進しているだけにみえるかもしれない。彼らは、インパクトのあるプレゼンテーションを行うことで資金調達の成功に集中している者たちの類であることは否定できない。しかしながら、筆者はミッション地区の南に位置するマンションの一室にあるテック・ハウスでの滞在をとおして、起業家を志す者たちの暮らしぶりを間近でみて、様々な話を聞きき、毎日限界までパソコンに向き合い、綱渡り的な交渉を繰り返す彼らの生活ぶりをみるにつれて、もう少し違う視点から起業活動の考察ができるのではないかと考え始めた。帯に「働き方を変える」と書かれている本をはじめとした、働き方に関する書物がテック・ハウスの本棚に並んでいた。働き方を変えることは、日本でも実行可能であるが、彼らは、どのような夢を思い描いてこの場所にたどり着いたのであろうか。テック・ハウスに滞在していた彼らの多くは、20代、高学歴、男性がほとんどであった。ある文系学部出身者は、エンジニアと投資家をつなぐ仲介役をビジネスにしようとしていた。また理系でプログラミングの知識がある者は、

IT企業のインターン先を探していた。滞在期間は、まちまちで2、3日といった短期間から、数ヶ月に及んで滞在する者がいた。ビザの種類によって滞在期間が異なる。そのため長期滞在ビザ取得のために、わざわざ行きたくもない語学学校に通っている者もいた。またテック業界主催のイベントに毎日参加し、提供されたケータリングを食べられる限り食べ、なるべく食費にかかる費用を削って生活費を確保している者もいた。スタートアップは、投資による資金調達に頼るため、自己資本がそれほどなくてもはじめられる。しかしながら、家賃が高騰しているベイエリアでの生活費はかなり高い。また、シリコンバレーのスタートアップの生存率は、かなり低い。たとえ起業できたとしても、間も無く倒産する確率は高く、不安定な労働環境であることは否めない。かかる意味において彼らは、プロレタリアートである。彼らは賃金労働者ですらなく、労働からの解放への道ではなく、それどころか際限なく働き続けるしかない環境にたどり着いたわけである。こうした激しい環境で起業を目指し、どうしてもこの地で勝負したいという者が後をたたないのは、どうしてであろうか。起業を目指し奮闘中のS氏は、以下のように語った。

上から言われたことを（仕事で）やることができないのです。そのやり方では多分自分の実力が発揮できないのですよ。だから、こっちで起業しているかな。<sup>237</sup>

自分の実力が発揮できない、つまり自らの能力の発揮を妨げる日本社会への抵抗が、彼をシリコンバレーでの起業へと駆り立てたと考えられうる。彼らの大多数は、大学卒業の学位を有している。日本社会において一般的な大卒者の進路を選ぶと新入社員として会社のヒエラルキーのなかで働くのが通常である。しかし、S氏は、その道は選ばず、渡米に備えて、大学在学中から東京のベンチャー起業界隈で人脈を作り、起業のやり方を学び、スタートアップのトレンド調査を重ねてきたという。東京のスタートアップは、アメリカや中国と比べるとあまりにも小規模なため、早い段階から渡米を目指していたという。

後日、友人の活動家にテック・ハウスで起業を試みる若い起業家について話したとき、彼女は以下のように話してくれた。

---

<sup>237</sup> 筆者によるインタビュー調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2015年3月11日。

彼らは、きっと自由が欲しいのよ。彼らの生活は一見すると大変にみえるかもしれない。でもね、難民としてチベットからオーストラランドにきた人たちと比べると、帰る場所があるという点で全然違うわ。病気になったり、失敗しても帰れる場所があるじゃない。でも、チベットから難民として来た人たちは、そんなセーフティネットなんかないのよ。そこが大きく異なる点だと思うわ。<sup>238</sup>

つまり、彼らにはセーフティネットがあり、失敗しても日本に帰ることができるのである。この意味で起業を試みている若者たちは、すでに特権階級 (privileged) であるのだ。国籍の有無や格差の問題から目を背けることはできない。しかしながら、富める者と貧しい者という問題で終わらせないためには、どう思考できるのであろうか。

### 3. 「グーグル(Google)をぶっ潰す」起業家：フィールド・ノート

ところでテック・ハウスをフィールド・ワークの滞在先に選んだ理由の一つには、シリコンバレーについての興味と2014年年末、偶然テレビでみた起業家の活躍にあった。そのテレビ番組とは、当時グーグル(Google)が主力商品として発売を準備していたグーグル・グラス(Google Glass)に対抗し、「グーグル(Google)をぶっ潰す」と意気込む日本人起業家、井口尊仁がシリコンバレーでの奮闘の様子を取材したものであった。当時、サンフランシスコ・ベイエリア一帯の地域に広がるシリコンバレーという場所が持つ可能性、新しいテクノロジーが開発される場所について関心をいただいていた。

テレビ放送から2ヶ月後、2015年2月、フィールド・ワークのためにサンフランシスコに訪れ、テック・ハウスに滞在した。そこで知り合った日本人起業家にテレビで特集を組まれていた日本人起業家、井口氏を紹介してもらった。早速、井口氏から商品エキスポにブースを出すので、よかったらぜひ来て下さいというメッセージを頂いた。下調べをすると、エキスポの入場料は、1日一人10万円であった。井口氏は、エキスポの入場入り口で、私を彼の通訳兼秘書という名目で直談判するから入場料のことは心配しなくていいという趣旨の説明をし

---

<sup>238</sup> 筆者によるインタビュー調査実施、サンフランシスコ、アメリカ合衆国、2015年3月22日。

てくれた。

3月3日、商品エキスポ当日、入場できるか否か半信半疑で会場に行ったら、入場料は無料になっていた。シリコンバレー界隈の価格設定の無茶苦茶さがはっきりと分かる。入場し、起業家を探した。広い会場には、いくつものブースが並べられ、混み合っていたが、日本人らしき人たちのブースは、すぐにみつかった。早速、井口氏と自己紹介を交わした。そして、近況をこちらから尋ねるまでもなく、ブースのメンバー紹介、商品の説明からエキスポについてまで一通りの説明を受けた。テレビ番組で特集されたグーグル・グラス(Google Glass)に対抗し進められた商品開発は失敗に終わり、井口氏が設立した会社テレパシー(Telepathy)から解雇されたが、その後間もなく新しい会社を設立し、次の商品のアイデアを考えながら、その会社の運営のための資金集めに奔走しているとのことであった。

あたたかく迎え入れられたので、右も左も分からないまま、とりあえず井口氏についていった。商品エキスポには、投資家も多く来場している。目当の投資家を把握している井口氏は、チャンスを逃さず声をかけ、オーバーな自己紹介とともに自分の奇想天外なアイデアをプレゼンしていった。このような光景に、はじめて遭遇した。カルチャーショックであった。井口氏は、お世辞であっても商品の模型とも言えないほどの小さな模型を取り出し、「あなたはカップと話せますよ」と、投資家に言ってみせるのである。ちょうどこの時期、アイ・オー・ティー(Internet of Things)が注目されており、テック業界のトレンドであった。出会ったばかりの私はというと、彼のアシスタントのように振る舞って即興ではじまるプレゼンの補佐をし、写真を撮り、また日本、特に京都の良さをアピールした。起業家と呼ばれる人たちのなかには、通常では頭がおかしいと思われるような奇抜なアイデアを投資家にアピールしている者がいる。なんでも、突拍子もないアイデアを持ち、世界規模で展開する可能性がある起業家を探しているため、必要以上に派手なパフォーマンスによってアピールすることであった。また、投資家の目に留まり、投資を受けずには、ゲームに参加することさえできないという。これは、私が実際に一人の起業家、井口氏の活動に密着し、そこでの出来事の記録の一部である。

#### 4. 起業家は前衛主義になりうるか

社会理論と前衛主義の概念についての考察を深めていたグレーバーは、「アヴ

エンギャルド」が、19世紀初期のフランスの貴族、政治的空想家、著述家、活動家であるアンリ・ド・サンシモンによって考案された造語であることを指摘した<sup>239</sup>。ところでシモンは、産業革命後の世界において、教会に代わって社会で新たな役割を担いうる制度は新しいキリスト教であるという結論に至った。かかる制度のなかで芸術家は、最高の精神的指導者の役割をはたし、実現可能な未来を想像し、人びとに生気をあたえることによって、「アヴェンギャルド」の役割や「真に聖職者的な任務」をはたすことができるのである<sup>240</sup>。つまりは、芸術家がアイデアを考案し、それを受けて産業資本家や科学者が実行するという構図である。ところでこれは、シリコンバレーの通常ならば考えられない、逸脱した経済活動における、起業家と投資家やエンジニアの関係性と似ているのではないだろうか。

実際に起業家たちは、芸術家でいうと前衛的なもの、すなわちイノベーションを起こそうと意気込んでいるが、インターネットを軸にしたサービスに勝るのがシリコンバレーから発明される日はくるのであろうか。失敗に終わった商品開発のテレビ放送の一コマを想起する。グーグル・グラス(Google Glass)に対抗し、もっと特異な機能やデザインの開発を進めようとするものの、プロジェクトは、停滞していった。次第に、経費、主に高額なエンジニアへの給料の支払いが滞っていった。そこで、資金調達のため投資家を呼び、再度交渉を行った時のことである。「それは誰が買うのですか？」という現実的な意見が投資家から投げかけられた。いざ商品開発が難航すると、あるいは投資家の目からみれば商品になる見込みがないとする判断が為されれば、容赦なく投資は打ち切れ、プロジェクトの撤退が余儀なくされた。会社のシリコンバレーからの撤退が決まり、また井口氏のCEOからの辞任が採択された。こうして、起業家のアイデアは、形になるのを待たず夢物語として終わった。井口氏のアイデアは投資家による追加投資の中断によって、達成されることなく終わってしまった。90年代後半、大学で哲学を専攻した後、システムエンジニアとして働くサラリーマンだった井口氏に資金とチャンスを与えたのは東京在住の会社経営者からの投資だったという。脱サラは、彼の起業家人生の始まりであった<sup>241</sup>。もし彼がシリコンバ

---

<sup>239</sup> グレーバー、デヴィッド「前衛主義のたそがれ」、栗原康（訳）『VOL 03 VOLUME ONE : ANTI-CAPITALISM/ART VOLUME TWO : NO!G 8』、萱野稔人（編集）、以文社、2008年、36頁。

<sup>240</sup> グレーバー、前掲載書、2008年、36頁。

<sup>241</sup> 井口氏へのインタビュー調査実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2015年3月6

レーとは異なる社会構造、環境においてチャレンジし続けることができたならば、何らかの新機能を備えたデバイスがうみだされていたかもしれない。彼の生活のための収入源は、短期間で失われた。かかる意味で、ほんの一握りの成功した起業家以外は、非常に不安定なプロレタリアートである。その後、井口氏は再び新たな起業の目処を立てた。他の起業家の話によると、シリコンバレーで企業に属さずに日本人が起業家活動を続けるのは非常に難しく、井口氏のメンタリティが他に類を見ないほど強いという<sup>242</sup>。つまりは、起業家の自助努力にかかっているのである。

### 第3節. 想像力、創造力はどこへ行ったのか

#### 1. イノベーションが起きる可能性がある社会とは

グーグル(Google)、アップル(Apple)、フェイスブック(Facebook)といったグローバル企業が新製品や新サービスを次々に発売し、私たちは何らかのソーシャル・ネットワーキング・サービス(Social Networking Service)に時間を費やす状況が日常化している。携帯電話なしの生活はないといった具合にまで、通信機器とそのサービスは私たちの暮らしの中に溶け込んでいる。グレーバーは、子ども時代に読んだサイエンス・フィクション小説で描かれた21世紀の世界は、実現するどころかその気配さえもなく、せいぜいビデオ電話の民間への普及が現実であり、技術革新は何も起こっていないと捉えた<sup>243</sup>。インターネット・テクノロジーが民間に普及するようになり、一般人がパソコンを持ち歩く時代となったが、それは消費主義に合わせた軍事技術の民間への解放の一部でしかない。グレーバーは、飛躍的なイノベーションが起きず、未だに「空飛ぶ車が発明されない」原因は、金融経済における官僚主義文化の蔓延、つまりは隅々までに浸透した規則やルールによってがんじがらめになった資本主義と官僚主義が合わさった状況にあると捉え、かかる状況下において、民衆の力が抑制させられているがゆえに、テクノロジー革新が起こっていないと述べた<sup>244</sup>。つまり、現在の北米アメリカの社会構造のもとでは、創造性や想像力が十分に発揮されることなく、イノベーションにつながるような詩的テクノロジーは、官僚制的テクノロジーへと変貌し、企業マネジメントが浸透した世界において金融証券化と書類仕

---

日。

<sup>242</sup> インタビュー調査実施、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、2015年3月11日。

<sup>243</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、151-153頁。Graeber, *Ibid*, 2015, pp106-108.

<sup>244</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、167-183頁。Graeber, *Ibid*, 2015, pp116-128.

事の増大をもたらす<sup>245</sup>。いわゆるブルシット・ジョブの増殖である<sup>246</sup>。井口氏の挑戦が志半ばで中断されてしまったように、アイデアが貨幣価値に変換しない未来がみえた瞬間に計画は、投資家によって打ち切られてしまうのである。つまり、投資家は、起業家のアイデアを都合よく買収する存在でしかない。一方、グレーバーは、現在の状況を受けて歴史的反証例としてのスターリン体制下、共産主義の時代を想起した<sup>247</sup>。興味深いグレーバーによる指摘は、ソヴィエトの当時の官僚たちは現在の北米の官僚制とは異なり想像力に欠けた集団ではなく、「仰天の夢を大胆に夢見た官僚たちでもあった」と、評価している<sup>248</sup>。狂乱の統制下であっても、かかる官僚制の管理体制において、失業というリスクを背負はない科学者は、奇想天外な科学実験に従事できたのであった<sup>249</sup>。計画経済下の社会では、科学者、エンジニアたちは、現在のように市場における商品価値を最優先させる必要性に迫られていなかったのである。失業の不安や残業による拘束時間が少なかったため、科学技術開発に関わらず、各地で小さな集団による文化活動も活性化していた。例えば、当時禁じられていたヨガは、地下のヨガ教室によって密かに実践されていた<sup>250</sup>。思い描いた理想の大半は、実現化しなかったが、試みられたという点が重要なのである。加えて、冷戦時代、アメリカでは「既存のテクノロジーを消費目的に転用する方法を発見しよう」と<sup>251</sup>していたが、ソヴィエトは1980年代においてもなお「テクノロジーの創造的利用による世界革命の夢想」に向かって突き進んでいたのであった<sup>252</sup>。

## 2. 想像力、創造力

一般的に起業家と芸術家は、利益を最優先させる前者と、利益には還元しえないとされる情緒や感性を追求し、表現する後者の関係性は、全く別のベクトルに

---

<sup>245</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、171-172頁。Graeber, *Ibid*, 2015, pp120-121.

<sup>246</sup> グレーバー、前掲載書、2020年、17-48頁。Graeber, *Ibid*, 2020, pp1-26.

<sup>247</sup> Nika Dubrovsky and David Graeber, *Another Art World, Part 3: Policing and Symbolic Order*, 2020.

<https://www.e-flux.com/journal/113/360192/another-art-world-part-3-policing-and-symbolic-order/>

<sup>248</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、176頁。Graeber, *Ibid*, 2015, pp123-124.

<sup>249</sup> Dubrovsky and Graeber, *Ibid*, 2020.

<sup>250</sup> Dubrovsky and Graeber, *Ibid*, 2020.

<sup>251</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、163-164、174頁。Graeber, *Ibid*, 2015, pp114-115, 126.

<sup>252</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、176頁。Graeber, *Ibid*, 2015, p123.



向かっていると、それ以上思考することをやめてしまう傾向にある。起業家は、ネオリベリズムの漸進による労働組合の解散、不安定雇用の常態化がもたらしたフリーランスという働き方であることは、確かであると同時に、労使関係から自由になろうと試みる働き方の形態でもある。

少し考え方を変えてみると、たとえ野心的であっても、これまでになかった新しい機械やサービスを作り出そうと試みる起業家と、社会のオルタナティブを生み出そうと試みる芸術家には、何かしらの共通点があるのではないだろうか。なぜ、サンフランシスコ・ベイエリアでは、起業活動と芸術活動がこれほど盛んなのか。新しいテクノロジーやサービスを社会にもたらそうとする起業家と、社会のオルタナティブをつくりだそうとする芸術家は、一見すると逆のベクトルを向いているが、両者の活動の根底には想像力、創造性があるのではないだろうか。クリエイティビティの次元では共通性があるはずの両者であるが、金融経済と官僚主義文化が合わさった社会で、両者の活動の結果を観察せざるおえなくなるため、共通性を見いだすのは困難になってしまう。言うまでもなく、資本主義において貨幣的価値が優先され、資本による商品化が社会の隅々まで浸透しているからである。シリコンバレーから生まれたサービスによる経済の変容をいち早く分析しようとした経済評論家や経済研究者によって、とりわけ、スタートアップから大企業に成長し、多大な影響を与えるようになったエアビーアンドビー(Airbnb)やウーバー(Uber)がもたらした経済効果についてはシェアリング・エコノミーやキグ・エコノミーの観点から、評価、批判されてきた<sup>253</sup>。一方で、起業家活動と芸術活動の関連性を念頭に置いた考察はほとんどされてこなかった。現実的には、資本を求め、スタートアップ・ビジネスを始める起業家と、別の社会の可能性を探る社会運動を担う芸術家は、かなりの隔たりがある点は認めざるをえない。しかしながら、両者に跨る共通項、想像力、創造性に着目して考察することはできないであろうか。グレーバーによる分析では、想像力、創造性の定位に関する歴史的変遷を明らかにした。産業・資本主義革命に伴う官僚制の導入、政治的右派/左派の区分の登場と同時に、創造性の源泉である想像力は、現実の基盤とはなり得ないとし、現実社会の秩序の外部に定位された

---

<sup>253</sup> ライドシェア・フードデリバリーを提供するウーバー社(Uber)に関するシェアリング・エコノミーの観点から分析された考察には、例えば、町田一兵「交通分野におけるシェアリング・エコノミーの考え方に関する一考察」、明大商學論叢、100巻2号、49-62頁、2008年がある。

<sup>254</sup>。換言すると、想像力、創造性は、理性の外部に設定されたのである。かかる文脈において、現実の基盤にはなり得ないとされた想像力は、想像力の超越的概念と措定されてきた。これに対して、実的な想像力は、実際に物を作り、人の世話をする際に発揮される想像力を指す。上で述べたように、かかる実的な想像力は、社会的不平等な環境において、疎外の中で生きるための労働として発揮されている。すなわち解釈労働の領域である。

機械、ロボットが将来人間に代わって仕事を担ってくれるという兆しが70年代後半に一時的に盛り上がりを見せた。昨今、新聞や雑誌には、近い将来なくなる仕事の記事が溢れた。しかし、現在私たちが置かれている状況から伺うことができるように、想像力、創造力の多くはインターネット空間に封じ込められてしまっている。労働の終焉を匂わせたポストモダンの時代感覚は、宇宙開発のような壮大なスケールのイノベーションへと向かう風潮を気薄にし、その代わりにインターネットの普及とともに人々をスクリーンへ追いやっていった。しかしながら、かかる状況下においても、人々は奪われつつある想像力、創造力を取り戻そうと試みている。商品化に抗い、各々の場面において闘争は継続中であるのだ。芸術による社会を変革する試みであろうが、科学技術のイノベーションであろうが、真に想像力、創造性が非疎外的に発揮されるとき、人間や社会にある潜在的な可能性が勢いよく顕在化するのである。それは、人間のアイデアや行いが、暴力的に貨幣的価値に変換され、現在の社会規律を重んじるように命じられたおそろしく窮屈なゲームのなかで展開されざるおえない日常からずれる空間においてまさしく垣間見ることができるのだ。かかる意味において、映画祭や映画の制作過程において、彼らが忘却された過去を理想的な社会に変換し、人々が制限なく、限りなく自由に振る舞い、考え、コミュニケーションをとりあう空間に、想像力、創造性が非疎外的に発揮される瞬間が何度も出現しているのである。

---

<sup>254</sup> グレーバー、前掲載書、2017年、131頁。Graeber, *Ibid*, 2015, p87.

終章.

#### 第1節. 序章について

序章では、まずアジア系アメリカ人による映画制作/上映活動についてのフィールド・ワークの概要について述べた。調査背景では、サンフランシスコという場所性について詳しく論じた。次に、調査対象とした毎年2月に開催される第二次世界大戦時の日系人強制収容経験を追悼する「追憶の日」と、毎年3月に開催されるアメリカ国内最大級のアジア系アメリカ人映画祭「キャム・フェス (CAAMFest)」と、主催者である非営利団体キャム (CAAM, Center for Asian American Media) について詳しく述べた。続いて、調査方法について、本研究の遂行と分析にとって欠くことのできないフィールド・ワークにおける参与観察

と、質的データを得たインタビュー調査と、フィールド・ワークでの滞在先について述べた。主な滞在先は、シリコンバレーへの興味から起業を試みる者たちが滞在するテック・ハウス、2016年2月～3月アーティスト/活動家が暮らすオークランド市にあるシェアハウス、そして現地で知り合ったミドル・クラスの住宅街にある友人の家について詳しく記述した。続いて、第2節では、アジア系アメリカ人コミュニティで、映画を観る、制作することに関する議論を展開した。まず、移民研究や地域研究の有効性と限界があることを指摘した。これまでインフォーマントは観察され、記述される側として措定されてきたが、アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動において、記述される対象とされてきた彼らを書き手/記述者としてとらえ直す有効性について論じた。またこうした転倒は、これまでの学問への見直しを迫るものとなり得る点について論じた。次に、エスニック・マイノリティとメディア表象、および第三世界映画に関わる分類とその問題点について指摘した先行研究についての分析を行った。大衆メディアに対してオーディエンスは単なる受動的な観客ではなく、抵抗的な主体になりうるというホルの研究は論じた。かかるホルの研究を受けた新嶋による研究は、こうしたオーディエンス研究によるアジア系アメリカ人の主体化のメカニズムの解明には至っていないと、暫定的な結論を下した。こうした先行研究に対して、本研究は、アジア系アメリカ人オーディエンスによる能動的に鑑賞する行為に着目し、映画鑑賞行為は、受動的な存在としてのオーディエンスが商品化のフローに接続されてしまうという一般的な想定をくいやぶり、歴史記憶の想起をとおして、コミュニティをつくりだしていくクリエイティで集団的なプロセスであることについて論じた。次に、自らを表象する機会としての映画制作活動について考察した。迫害、排除の対象となってきた者による映画制作は、奪われた歴史的経験、文化、言葉を過去遡及的につくり直す作業でもあると同時に、何よりもそれは未来に投げかけられるべき自己像を創造するという点において極めて重要な集団的協働であることについて論じた。次に、モデル・マイノリティ神話が社会的に構築されてきた過程とその歴史的背景について詳しく分析し、論じた。またモデル・マイノリティ神話に関わって、映画制作/鑑賞がもたらす作用について、とりわけ第2章、第4章で詳しく論じた。

第3節では、戦後福祉政策の隆盛とエスニック・マイノリティの反応について言及した。アメリカ政府による福祉政策は、アメリカ国民を対象としており、エスニック・マイノリティにとっては十分なセーフティネットとはなり得なかつ

た。こうした社会背景において、60年代、アジア系アメリカ人運動が巻き起こり、現在の文化活動の基盤が形成された過程について論じた。また、ネオリベリズムと民営化への流れの中で、草の根の運動から NPO への組織形態の変遷過程と、社会背景について論じた。更には、かかる活動を芸術的労働として捉える理由について論じた。次に賠償政治について言及した。賠償政治の広がりのおかげで、アジア系アメリカ人によるリドレスを求める動きは、アメリカのアジア地域支配に新たな関係性を生み出すと同時に、アジア系アメリカ人に新たな政治性をもたらした点について述べた。つまりは、アジア系アメリカ人は、国内ではエスニック・マイノリティとして従属的な位置であると同時に、アメリカ人でもあることから、アジア系が抱える政治的位置の困難さについて述べた。

第4節では、エスニシティについて論じた。代表的な分析の一つには、客観主義的アプローチの実体論(substantialism)と、主観主義的アプローチの関係論(relationalism)があるが、エスニシティを一般化する試みはいずれも適切ではない点について論じた。加えて、法的権利や制度の獲得は、エスニック・マイノリティが標的となる潜在的暴力の消失を意味せず、法や制度を超える暴力の常態化を問題化することの重要性について述べた。

第5節では、アジア系アメリカ人映画祭に関わって、かかる概要や、映画祭への人々の関わり方、及び、人々がもたらす協働の側面について述べた。

## 第2節. 第1章について

アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動に加えて起業活動について考察した本研究では、とりわけ労働の概念が一つの重要な軸となった。そこでまず第1章では、非物質的労働の概念、及び解釈労働、想像的、創造的労働(Creative Work, Creative Labor)について検討した。労働の領域と不可分な関係性にあるアジア系による映画制作/上映活動について、解釈労働の視点を踏まえた考察の有効性について論じた。1節ではまず、映画制作、鑑賞の双方のプロセスにおける解釈労働の側面について述べた。加えて、シリコンバレーで起業を試みる者たちの労働の側面に着目し、彼らの労働の大半が認知労働に関わる領域の労働であると同時に新しい製品やサービスを生み出そうとする創造的労働の側面を持ち合わせている点について述べた。

第2節では、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行に伴う、産業構造の変容と労働の質的変容の変遷を受けてイタリアの社会理論家たちよっ

て導入された非物質的労働の概念と、かかる概念へのグレーバーによる理論的介入について論じた。先進国における工場労働の衰退とコンピューター、情報、通信部門産業を軸とした第三次産業が勃興は、労働管理の変容をも要請した。こうして管理体制の物理的身体次元から精神次元への移行として受け止められた。

労働の変容を受けて、来たる革命的主体となりうるマルチチュードの概念がネグリとハートによって提唱されてきたが、それに対してグレーバー、崎山、井上によるかかる理論的不足への批判がなされた。また、脳科学的ニューロサイエンスとの接近において検討されてきた一般的知性、集团的知性、群集知について知の形態としてのみならず、企業の組織化にも非中心的ネットワークのあり方が適応されているが、情報 IT 産業が稼働している労働現場では、非中心的ネットワークの組織化は成功していないことについて論じた。加えて、認知資本労働に関わる労働領域に来たる革命を予感していたネグリやハートに対して、グレーバーによる生産/非生産労働についての介入に即して、検討した。まず、賃金が支払われる生産的労働に対して、その労働の多くが女性によって担われているケアに関する労働領域は、非生産的とされ、不払い労働として認識されてきた構図がある。こうした生産的/非生産的労働の区分の背後には、生産的労働は余剰価値をうみだし、非生産的労働はうみださないとする資本主義社会のシステムの問題がある点について論じた。

第3節では、改めて非物質的労働へのアプローチに関わる労働の概念の問題点について述べた。問うべきは、非物質的労働の議論の筋道を立てる際に、物質的か非物質的、生産か消費といった従来の議論の土台であった。物質/非物質、生産/非生産、貨幣的価値/非貨幣的価値といった区分自体を再考するとともに、かかる区分に還元されない労働の領域と可能性についてさらに考察を深める必要がある点について述べた。

第4節以降は、芸術家は労働者なのかという問いを模索し、芸術的労働について検討した。芸術的労働への考察を深めるにあたって、まず私たちの労働に対する概念について問い直し、かかる概念の歴史的形成過程について言及した。神学的要素を伴った労働の価値は、時代の変遷にもかかわらず、依然として現代の私たちの労働に関する概念に根深い影響を及ぼしているのである。加えて、生産者主義から消費主義への移行に着目し、かかる移行に伴って「富の源泉が労働ではなく資本にある」としたイデオロギーが普及した過程について述べた。

第5節では、現代アートがいかに私たちの社会にヒエラルキーをもたらせて

いるかという点について論じた。富裕層とそうではない人々との間に分断をもたらせた現代アートが持つ効果は、無意識的に世界の構造に作用している点について論じた。同時に、芸術それ自体は、社会構造、社会関係を変えてしまいうる潜在的可能性を持ち合わせている点について論じた。

第6節では、芸術的/創造的労働(Creative work, Creative Labor)について論じた。規制緩和がすすむ金融市場と現代アートの世界は、癒着、共犯関係にあり私たちの世界に無意識的に分断やヒエラルキーを持ち込んでいるが、こうした世界に抗う人々の芸術的/創造的労働が持つ可能性について論じた。かかる労働の実践によって絶えず世界をつくり変えている状況について、ニューヨークやサンフランシスコを例に挙げ論じた。加えて、芸術的労働に関わる解釈労働(Interpretive labor)、想像的、創造的労働(Creative work, Creative Labor)は、賃労働の領域と不可分の関係にありながらも、賃労働の領域として収まらない諸価値の領域である点について述べた。

第7節では、芸術作品をめぐる価値と諸価値の抗争に関わって、価値と諸価値について論じた。貨幣的価値で表現された財やサービスは価値の領域であり、他方、貨幣価値によって表現することができない諸価値の領域がある。諸価値は、経済的価値に置き換えられないため価値がある。また、芸術作品は諸価値の領域とみなされているが、現実には数量化可能な価値に置き換えられている。つまりは、諸価値(values)としての芸術作品が、価値(value)つまり貨幣によって買収されている現象について言及した。

第8節では、現代の仕事の定義からみた芸術家の労働について考察した。現在の一般的な現代アートの世界の芸術家とは異なる前衛芸術家のなかには、芸術活動をとおして、生活、交換、生産を変容させる方法を模索する者がいた。また、アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動は、資本主義社会アメリカにおいて、構造的には文化生産の商品化から逃がれられない環境におかれている。しかしながら、彼らの活動には必ずしも貨幣的価値に還元されない人間、社会的関係の構築、集団的組織化、といった要素があるがゆえに、そこには社会変革のモーメントの可能性があると考えられうる点について述べた。

第9節では、フィールド・ワークにおける参与観察及びインタビューから得たデータに即して、人々がどのように映画制作に参加しているかについて論じた。そこには、トップ・ダウン型のヒエラルキーではなく、それぞれがそれぞれの役割を担った方法で映画制作が展開されていたことについて述べた。

第10節では、非物質的労働における Kommunismus について、グレーバーの理論的介入を参照して論じた。非物質的労働の側面を新しい Kommunismus (a new form of communism) において捉え直すと、協働によって価値をつくりだし、賃金制を超えた、より広い射程において労働を捉え直すことができる可能性について述べた。

### 第3節. 第2章について

続いて、第2章では、想起される日系アメリカ人の記憶について検討し、ポスト 9.11 のアメリカ社会において、第二次世界大戦時の日系アメリカ人の戦争経験がいかなる歴史的意義を持ちうるかについて論じた。具体的な考察の対象としたのは、ロサンゼルスを拠点に活動する日系アメリカ人四世の映画監督、タッド・ナカムラ (Tad Nakamura) と、彼が制作したドキュメンタリー映画三部作、*Yellow Brotherhood* (2003)、*Pilgrimage* (2007)、*A Song for Ourselves* (2009) である。ナカムラの作品を分析にするにあたって、まず日系アメリカ人に関する先行研究を批判的に検討した。日系人に関する代表的な先行研究には、世代ごとの経験を特徴づけて論じられた世代論があり、かかる世代論をもとに各世代のエスニック・アイデンティティの変容が論じられてきた。先行研究では、時系列に沿った経験を軸に据えて集団性が分析されてきた。それに対し本研究は、映画において想起される記憶を分析の主軸としたうえで、ナカムラの個人的な経験を加味し、彼によって再解釈、描き出された日系人強制収容所の経験と 60 年代のアジア系アメリカ人の運動経験の意義についての考察をおこなった。

9.11 後のイスラム・アラブ系のなかに自己を発見したナカムラによって、60年代アフリカ系アメリカ人が先頭を切って巻き起こした公民運動を契機とし、アジア系アメリカ人が他のマイノリティと連帯し、立ち上がった運動の記憶が想起されていた。また、60年代の運動において、開始された日系人強制収容所跡地への巡礼は、彼らのルーツを探る点において意義が見出されたのに対して、ポスト 9.11 において実施された巡礼は、人種、民族、宗教といった様々な差異を超えた連帯を促し、不正義に対して立ち向かうことを始める象徴的なイベントとして描かれていた。加えて、強制収容所の経験を過去の一回性の出来事として捉えるのではなく、他のエスニック・マイノリティとの連帯を促す現在の不正



義の象徴として捉えられている点について論じた。

こうしたナカムラを含めた、アジア系アメリカ人による映画制作は、アメリカの主流社会ではなく、何よりもアジア系アメリカ人、日系アメリカ人コミュニティに向けられている。換言すると、主流社会への理解を促進するのではなく、彼ら自身についての理解を深めるという点に重きが置かれているのである。またとりわけ重要なポイントは、こうしたアジア系自身や、コミュニティに向けて制作された映像作品は、上映活動をとおしてコミュニティ形成を促す役割を担っている点にある。一方で、アジア系アメリカ人の映画に関する先行研究は、とりわけハリウッド映画におけるアジア系アメリカ人の表象と変遷を主題とするものが多い傾向にあった。映画表象として分析する研究方法とは異なり、本研究ではコミュニティと映像との関係性のなかで蓄積されていくイメージ、表象を民衆の記憶、歴史意識の問題として扱った。よって、本研究で検討した議論は、かかる点において、これまでの先行研究のベクトルとは異なる考察であるといえる。

#### 第4節. 第3章について

続いて第3章では、日系二世、ジミー・ツトム・ミリキタニ(三力谷 勉)の生涯と、ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』を手掛かりに、想起される戦時の日系アメリカ人強制収容所の経験と忠誠登録の歴史、および芸術の実践、ミリキタニによる創作活動と、ミリキタニとリンダの出会いによってもたらされたドキュメンタリー映画を考察することによって、これまでの日系コミュニティのポリティクスを揺るがしうる可能性について検討した。

ミリキタニの生涯を検証するにあたって、まず第二次世界大戦時、強制収容所においてアメリカ政府によって強いられた日系人に対して問われた忠誠登録審査について検討した。かかる審査の目的は、徴兵と収容所からの出所者を募るためとされたが、思想調査の側面を持ち合わせていた。かかる審査の実施は、それぞれの選択をめぐって嫌悪や軽蔑といった感情を人々の間にもたらし、戦時から現在に至るまで日系人コミュニティに分裂や軋轢をもたらした。また日系人コミュニティに関するフィールド・ワークと聞き取り調査から、依然としてコミュニティ内に残る分断について述べた。というのも、忠誠登録審査において、とりわけ質問 27・28 項は、アメリカへの愛国心を問う内容であり、徴兵を目的として作成されていた。忠誠者とみなされた者たちは、徴兵の

対象となった。戦後、二世兵士はコミュニティの英雄として讃えられた。兵士の功績を賞賛した背景には、日系人自身によって描かれた、愛国主義的で模範的な良きアメリカ市民としての自画像があった。他方、忠誠登録審査に「NO」と答え、または回答すること自体を拒否したため不忠誠とみなされた者たちとその家族は隔離収容所に送られた。さらには、戦中から現在に至ってアメリカ政府への戦争協力を先導した JACL に対して、抵抗した者たちは、コミュニティのトラブルメーカー、非愛国者のレッテルが貼られてきた。そのため、戦後の日系社会において、彼らは不忠誠者であったことを公言し、経験を語り継ごうとした者たちはほとんどいなかったのである。加えて、忠誠登録は、アメリカか日本のどちらに忠誠を誓うかという帰属意識の問題として扱われてきた傾向にあった。一方で本研究は、渡米前、日本の兵学校への入学を拒否し、また収容所での忠誠登録に NO を示し続けた二重国籍保持者のミリキタニに着目した。彼の態度から読み取るべきは、帰属意識の問題ではなく、一貫した戦争への拒絶であったことについて論じた。加えて、忠誠組・不忠誠組の区分けに関わる学知を構成してきた認識枠組みについて批判的検討をおこなった。そこで浮かび上がった問題は、アメリカと日本という国家が措定され、世代論を用いて時代ごとのイデオロギーに沿って忠誠組・不忠誠組について、各々の集団性が分類されてきた点にあった。換言すると、アメリカと日本と国家を措定したうえで、世代別の日系人の意識を掛け合わせた集団化した分析のあり方についての批判である。つまりは、忠誠登録を、国家の帰属の問題、イデオロギーの問題として了解することへの批判である。忠誠登録に関わって問うべきは、国家権力と暴力の問題であることについて述べた。

次に、ミリキタニにとって、絵をかくとは、いかなる意味を持ち合わせているかについて論じた。猫、強制収容所、戦艦、原爆、戦前の故郷・広島風景、同時多発テロにおけるビルの崩壊する様子を描き続けてきたミリキタニにとって、描き続けることは抗い続ける戦術を意味していた。原爆や強制収容所で肉親や友人を亡くした彼は、絵を描くことで亡くなった者たちとの関係性を保ち続けていたのである。よって、彼の作品は、戦争や国家権力の犠牲者、死者たちの記憶とともにある。さらには、描くという実践は、暴力にさらされて亡くなった者たちが再び忘却という暴力にさらされることに対する抗いを意味していた。また、かかる一連の行為は、犠牲者に対する総じて弔う行為であった。加えて、ミリキタニの創作活動における行為主体性に言及した。ニューヨークの路上で

創作活動を続けてきたミリキタニは、日系コミュニティ外部でのリンダとの出会いによって、新たな関係性、社会性を構築してきたのである。上に述べてた論点において、日系研究が自明としてきた事柄の再検討、議論をおこなった。

#### 第5節. 第4章について

第4章では、サンフランシスコ・ベイエリアに暮らすアジア系アメリカ人社会には軋轢や分断がありながらも、いかに人々は団結、連帯しうるかという点に着目し、アジア系アメリカ人映画祭と従軍慰安婦像設置の是非を事例とし分析、考察した。まず、映画鑑賞をとおして、人々の連帯のあり方について、参与観察及びインタビュー調査から得たデータを用いて分析した。そして、かかるデータ分析に即して、映画祭における鑑賞をとおして、異なる史的背景にある人々に対する理解がいかにして促進されうるかについて述べた。加えて、アジア系アメリカ人、日系人が映画祭に参加し続けている理由について論じた。そこでは、社会的危機に絶えず直面し生きざるおえない彼らにとって、映画制作/上映活動が、隣人と平和な関係を保ち、共存する方法を模索する上で重要となっている点について述べた。

続いて、映画祭空間の祝祭性について論じた。上で述べたように、アジア系アメリカ人映画は、彼らの歴史経験を獲得するために始められた活動であるため、作品はエンターテインメント性より、むしろ過去の戦争経験やそれに付随したトラウマや心の傷が伴う。しかしながら同時に、自分たちの歴史に関わる作品を集団で鑑賞するという機会にはやはり喜びや、心からの感謝や自尊心がもたらされているのである。かかる意味で映画祭は、日常とは異なるイベント性を持ち合わせている。2014年、サンフランシスコの中心部に位置するカストロシアターで開催されたアジア系アメリカ人映画祭において、ドキュメンタリー映画アメリカン・レボリューションナリー (*American Revolutionary*) 上映の参与観察のデータに即して、映画祭空間におけるアクティビズムの可能性について論じた。そこには、映画鑑賞をとおして、鑑賞者それぞれの情動が喚起され、日常との間にズレを生じさせ、社会が動き出すモーメントが空間にもたらされているのである。次に、同じくアジア系アメリカ人映画祭で上映されたドキュメンタリー映画ラブ・ボート (*Love Boat*) における参与観察のデータに即して、観客は受動的なオーディエンスとしてに収まらず、オーディエンスであると同時に作り手になる点について論じた。また、かかる活動が、コミュニティ形成の一端を担ってい

る側面について論じた。

続いて第4節から第8節では、サンフランシスコ市慰安婦像建設の是非をめぐるアジア系アメリカ人社会の動向について論じた。2015年9月17日、サンフランシスコ市役所で開催された公聴会での参与観察を踏まえて、過去の戦争責任をめぐるアジア系社会のポリティクスについて論じた。まず、現地社会では、慰安婦像建設をめぐる、賛成する者は、ポリティカル・コレクトとして理解されていた。他方、建設反対の意は、それとは正反対の意見として受け止められていた。しかしながら聞き取り調査をすすめるにつれて、建設反対の意を示す人々には、様々な意見があり、必ずしも慰安婦制度自体を否定する日本の極右の人々の意見と同じではないことが明らかとなった。とりわけ、慰安婦像建設の動きに不安を感じたのは、日系コミュニティの人々であった。というのも、彼らにとって、旧日本軍による性暴力が再び問題として浮上し、過去の戦争犯罪が問われる事態は、戦時の強制収容所の経験を想起させる事態であった。つまり、日系人の強制収容経験は、過ぎ去った過去の経験ではなく、絶えず自分たちに向けられた暴力を予感させる経験であった。こうした歴史認識について、インタビュー調査のデータに即してそれぞれの意見に言及し、アジア系アメリカ人社会の状況について記述した。

続いて、アジア系の人々にとって慰安婦像設置が、過去の戦争記憶を想起させる契機となる点に関わって、とりわけアメリカ軍に従軍し二世兵士として戦った日系人の戦争記憶がコミュニティにおいてどのように共有されているかについて論じた。二世兵士を賞賛する記憶のあり方は、旧日本軍による戦争犯罪のアメリカ化(Americanization of Japan War crime)を容認してしまう点について述べた。すなわち、アジア諸国を救済するアメリカ軍、アメリカ国家の容認へと接続されうる危険性について論じた。加えて、アジア系アメリカ人の若者たちによるアメリカ軍への入隊への動機と、かかるメンタリティを形成する社会的背景について述べた。さらには、慰安婦問題は、しばしば日本と韓国の二国間の歴史問題として捉えられる傾向にあるが、それによって、アメリカ国家権力が不可視化される危険性について論じた。また、アジア系アメリカ人という主体の困難さについて言及した。彼らは、完全なアメリカ人としては認められず、地政学的ポリティクス、主流社会からの同化圧力に絶えず晒されている。しかしながら同時に、不安定な存在ゆえに、未決の可能性を持ち合わせているのである。そして、かかる可能性は、可視化されづらい被害者との連帯のなかにあることについて

論じた。最後に、記念碑設置の側面には、運動のシンボルが権力化してしまいかねない危険性を伴っている点について述べた。

#### 第6節. 第5章について

第5章では、サンフランシスコでフィールド・ワークを重ねごとに浮かび上がった「サンフランシスコという場所では、なぜ起業活動と社会運動/芸術的抵抗運動がかくも活発なのか？」という問いに即して、抗議活動の現場で聞き取った声と、起業家の暮らしぶりや活動に密着し得たデータをもとに論じた。

まずITバブルによって引き起こされたサンフランシスコが抱える急速なジェントリフィケーションについて言及した。物価が高騰し、警察の暴力がエスカレートする社会において、人々による警察組織の改革とIT産業への税制改革を求める声が後をたたない状況について述べた。一方で、起業活動は資金調達がはじめの一步と言われた経済的価値を求めた活動であることは否定できないと同時に、ベイエリアに渡り起業を試みる者たちは、現実には不安定な環境での労働を余儀なくされている状況について論じた。加えて、シリコンバレーでグーグル・グラス(Google glass)に対抗し、「グーグル(Google)をぶっ潰す」と意気込み奮闘した日本人起業家、井口氏に関する調査、商品エキスポでの参与観察及びインタビューから得たデータに即して、起業家は前衛主義になりうるかという点について論じた。

次に革新的なイノベーションが起きない理由は金融経済における官僚主義文化の蔓延にあるとしたグレーバーの議論に即して、起業家井口氏の挑戦が志半ばで中断されてしまった社会構造について論じた。加えて、歴史的な反証例としてのスターリン体制下、共産主義の時代、奇想天外な実験や活発な文化活動に着目したグレーバーの考察に言及した。当時のソヴィエトの官僚は、現在の官僚主義とは異なった世界的革命を目指し稼働する官僚機構であった。つまりは、技術革新について考えた時、全ての官僚機構が否定すべき形態ではなく、計画経済下においては、市場の商品価値を最優先させる必要に迫られることがないため、技術革新が起こる確率が高まるのである。

本研究では、経済的価値を追い求める起業活動であることを了解したうえで、一見すると相容れない関係性にある、起業活動と社会運動について、新しいテクノロジーを社会にもたらそうとする起業家と、社会のオルタナティブをつくりだそうとする芸術家は、一見すると逆のベクトルを向いているものの、両者の活

動の根底には想像力、創造性がある点に着目した。また同時に、現在の金融経済と官僚主義が合わさった社会構造では想像力、創造性が遮られている点について論じた。また、想像力、創造性が遮断されることなく発揮される時、人間の可能性が押し広げられ、芸術による社会変革する試みであろうが、科学技術のイノベーションであろうが、達成されるのである。そして、アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動に関わって、協働のプロセスには非疎外的に想像力、創造性が発揮されるモーメントが間違いなく発生している点について述べた。

#### 第7節. これからの課題

本研究では、アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動について、映画をつくる、集団で鑑賞する、またこうした活動がコミュニティ形成の役割を果たしてきた点について、参与観察およびインタビューから得たデータやフィールド・ノートに即して論じてきた。かかる活動は、労働と不可分な関係にありながらも、他者との連帯、モデルマイノリティ像からの脱却、また社会から押し付けられたエスニシティではなく、プロセスにおいて自らの価値を変換する可能性について論じた。

これからの課題の一つには、アジア系アメリカ人映画祭に、ノミネートされなかった作品とそれに関わる人々についての調査、分析がある。ノミネートされなかった原因の一つは、作品のクオリティの良し悪しに限られるのではなく、ポリテクスの領域に関わる問題にあると考えられうる。例えば、フィリピン系アメリカ人監督、マヒュー・アバヤ (Matthew Abaya) によるバンパリア (*Vampariah*, 2016) である。<sup>255</sup> サンフランシスコ・ベイエリア在住のアバヤ (Abaya) によって制作されたこの作品は、アメリカ国内のみならず香港やルーマニアの映画祭にノミネートを受け、数々の賞を受賞しているが、キャム・フェス (CAAMFest) にはノミネートされなかった。この作品がノミネートされなかった理由の一つには、アバヤ (Abaya) による推測では、アジア系社会のジェンダーロールから逸脱する女性の吸血鬼が主人公であるためとしている。また、映画祭に関わりがある女性によると、選出されなかった理由は、時折、バイオレンスなシーンが含まれている点にあるという分析がなされた。ここから考えられうる原因の一つには、アジア系社会のモデルマイノリティ、模範像やモラルに関わる規範が関わっていると考えられうる。

---

<sup>255</sup> Abaya, Matthew *Vampariah*, I don't care production, 90 minutes, 2016.

ところで、2019年7月21日、サンフランシスコ、イーストベイ、アラメダで、ザ・12th・アニュアル・ヒーローフェス・ベイ・エリア・アクション・フィルム・フェスティバル(The 12<sup>th</sup> Annual HEROFEST BAY AREA ACTION FILM FESTIVAL)が開催された。オークランドからほど近くに位置するアラメダのシェア・オフィスの一角で開催された一夜限りのこの映画祭は、主にベイエリア在住のアーティストによって制作された短編から長編のアクション作品が上映された。小規模の映画祭には、非営利団体の存在やスポンサー企業などはついていなかった。制作者自らがスクリーンの上映準備からレセプションに至るまで全てを担当する。アバヤ(Abaya)の作品、バンパリア(*Vampariah*)の上映はなかったが、彼が俳優として出演していた映画は当日上映された。この映画祭には、パンデミックが起きる前の年、2019年に偶然参加した。2020年以降、現地への渡航が禁止され、かかる映画祭に関わる詳細な調査や参加者への聞き取り調査ができずにいる。イースト・ベイ、オークランド市という場所が抱える政治性を踏まえて、キャム・フェス(CAAMFest)のような比較的規模の大きな映画祭に選出されなかった作品やその背後にあるポリティクスを探ることによって、映画祭の限界と、映画祭から外れてしまった者たちからはじまる可能性について調査、分析していくことが課題の一つとしてある。

## 参考文献

東栄一郎『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで 忘れられた記憶 1868-1945』、明石書店、2014年。

石井修「リドレスとリメンムブランクス-日系米人社会の歴史の記憶」、『明治学院大学法学研究』85号 25-47頁、2008年。

アンダーソン、ベネディクト 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』、(白石隆 白石さや訳)、書籍工房早山、2007年。

石塚 道子、田沼 幸子、富山一郎(編集)『ポスト・ユートピアの人類学』、人文書院、2008年。

和泉真澄「「ゴードン・ヒラバヤシ」キャンプ場について-カタリナ連邦刑務所と日系アメリカ人徴兵忌避者たち-」同志社法学、64-7号、3-21頁、2013年。

上野俊哉『ディアスポラの力を結集する —ギルロイ・ボヤーリン兄弟・スピヴァク』、松籟社、2012年。

-----『思想の不良たち——1950年代 もう一つの精神史』、岩波書店、2013年。

-----『アーバン・トライバル・スタディーズ パーティ、クラブ文化の社会学』、月曜社、2017年。

遠藤孝「アントニオ・ネグリのマルチチュード」、中央大学社会科学研究所年報、第21号 179-197頁、2016年。

オカダ、ジョン『ノーノー・ボーイ』、川井龍介(翻訳)、旬報社、2016年。

岡部一明『サンフランシスコ発・社会変革NPO』、御茶の水書房、2000年。

小田隆史「サンフランシスコ市における移民街区の保全と再建のガバナンス-制度と主体の変化に着目して」、季刊地理学 62巻1号、12-27頁、2010年。

加藤好文「アメリカにおける史跡保存と「巡礼」の文化史的意義 -日系アメリカ人収容所跡地をめぐって」、愛媛大学法文学部論集人文学科編、67-81頁、2010年。

萱野稔人(編集)『Vo1 02 ベーシック・インカム／ドゥルーズ『シネマ』』、以文社、2007年。



萱野稔人（編集）『VOL 03 Volume One : Anti-Capitalism / Art Volume Two: No! G8』、  
以文社、2008年。

川村邦光『吊い論』、青弓社、2013年。

ガロ、カーマイン『スティーブ・ジョブズ 驚異のイノベーション』、井口耕二（訳）日  
経BP、2011年。

クリフォード、ジェイムズ『ルーツ-20世紀後期の旅と翻訳-』、(毛利嘉孝、柴山 麻妃、  
福住廉、有元健、島村奈生子、遠藤水城訳)、月曜社、2002年。(Clifford, James, *Routes:  
Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Harvard University Press,  
1997.)

糸井輝子「戦時転住所からの「再定性」：日系アメリカ人の 忠誠をめぐる一覚書」長  
野県短期大学紀要 47 巻 177-188 頁、1992年。

グレーバー、デヴィッド『負債論』、酒井隆史 監訳、(高祖岩三郎、佐々木夏子訳)、以  
文社、2016年。(Graeber, David *Debt: The First 5000 Years*, Melville House, 2011.)

-----『官僚制のユートピア テクノロジー、構造的愚かさ、リゼラリズムの鉄則』、酒  
井隆史(翻訳)、以文社、2017年。(Graeber, David *The Utopia of Rules s: On Technology,  
Stupidity, and the Secret Joys of Bureaucracy*, Melville House, 2015.)

-----『ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論』、(酒井隆史、芳賀達彦、  
森田和樹訳)、岩波書店、2020年。(Graeber, David *Bullshit Jobs: A Theory*,  
Simon & Schuster, 2018.)

グレーバー、デヴィッド、セドラチェック、トーマス『改革か革命か 人間・経済・シス  
テムをめぐる対話』、(三崎和志、新田智幸訳)、以文社、2020年。

高祖岩三郎『流体都市を構築せよ!—世界民衆都市ニューヨークの形成』、青土社、  
2007年。『ニューヨーク烈伝—闘う世界民衆の都市空間』、青土社、2006年。

高秉權、今津有梨『哲学者と下女—日々を生きていくマイノリティの哲学』、インパク  
ト出版会、2017年。

酒井隆史『完全版 自由論：現在性の系譜学』、河出文庫、2019年。

酒井直樹『死産される日本語・日本人-「日本」の歴史-知性的配置』、新曜社、1996  
坂口博一「トゥール・レーク論」『早稲田人文自然科学研究』、第25号、1984年

崎山政毅、井上康「新たな段階の架空資本の解明に向けた理論的準備（その1）」、『立命館文学』、658、11-28頁、2017年。

篠田左多江「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動②トゥーリレイク収容者—」、『東京家政大学研究紀要』、第29集11-21頁、1989年。

篠田実紀「二分法を越えて John Okada No-No Boy の静かなる挑戦」、『神戸外大論叢』、3号61巻41-67頁、2010年。

ジュニア、アダルベルト・アギーレ、ターナー、ジョナサン・H『アメリカのエスニシティ、人種的融和を目指す多民族国家』、(高杉忠明、ギブソン松井佳子、武田明典、福田守利、吉田光宏、黒崎真、梶本智子、柳沼孝一郎、阪田恭代、菊池達也訳)、明石書店、2013年。

多木 浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』、岩波現代文庫、2000年。

多木浩二、今福竜太(編)『映像の歴史哲学』、みすず書房、2013年。

竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷』、東京大学出版会、1994年。

チョウ、レイ『プリミティヴへの情熱—中国・女性・映画』、(本橋哲也、吉原ゆかり、訳)、青土社、1999年。

鶴見俊輔『日常的思想の可能性』、筑摩書房、1967年。

-----『アメリカ哲学』、筑摩書房、1991年。

-----『鶴見俊輔集〈9〉方法としてのアナキズム』、筑摩書房、1991年。

-----『限界芸術論』、筑摩書房、1999年。

ドゥルーズ、ジル『シネマ1 運動イメージ』、(財津理、齋藤 範訳)、法政大学出版局、2008年。

-----『シネマ2 時間イメージ』、(宇野 邦一、江澤健一郎、岡村民夫、石原陽一郎、大原理志訳)、法政大学出版局、2006年。

トーパー、ジョン『歴史的賠償と「記憶」の解剖 ホロコースト・日系人強制収容・奴隷制・アパルトヘイト』、(藤川隆男、酒井一臣、津田博司訳)、法政大学出版局、2013年。

富山一郎『暴力の予感』岩波書店、2002年。

-----『増補 戦場の記憶』日本経済評論社、2006年。

-----『始まりの知：ファノンの臨床』法政大学出版局、2018年。

ナカノ、メイ『日系アメリカ女性、三世代の100年』、(サイマル・アカデミー訳)、サイマル出版会、1991年。

中村理香『アジア系アメリカと戦争記憶—原爆・「慰安婦」・強制収容』、青弓社、2017年。

新嶋良恵「マス・メディア表象研究におけるカルチュラル・スタディーズの意義—スチュアート・ホールの文化的アイデンティティ理論をてがかりに」、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 No. 64、85-98頁、2014年。

-----「アジア系アメリカ人表象にみる新保守主義：モデル・マイノリティ表象をめぐって」、慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要、社会学心理学教育学、人間と社会の探求、No. 72、1-18頁、2011年。

野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』、世界思想社、2007年。

バウマン、ジグムント『コミュニティ 安全と自由の戦場』、奥井智之（訳）、ちくま学芸文庫、2017年。

福島真人「差異の工学—民族の構築学への素描—」、東南アジア研究 35 卷 4 号 pp. 898-913、1998年。

複数文化研究会『〈複数文化〉のために ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』、人文書院、1998年。

ベンヤミン、ヴァルター『ベンヤミン・コレクション〈1〉近代の意味』、(浅井 健二郎、久保 哲司訳)ちくま学芸文庫、1995年。

ポラニー、カール（原著）『大転換—市場社会の形成と崩壊』、吉沢 英成（訳）、東洋経済新報社、1975年。

マイヤー、ディロン『屈辱の季節 根こそぎにされた日系人』、吉沢 英成（訳）、新泉社、1978年。

町田一兵「交通分野におけるシェアリング・エコノミーの考え方に関する一考察」、明大商學論叢、100 卷 2 号、49-62 頁、2008 年。

マラッツィ、クリスティアン『資本と言語—ニューエコノミーのサイクルと危機』、水嶋一憲(監修)、柱本元彦(訳)、人文書院、2010 年。

港千尋『革命のつくり方』、インスクリプト、2014 年。

南川文里『日系アメリカ人の歴史社会学—エスニシティ、人種、ナショナリズム』、彩流社、2007 年。

ミューラー、E.L.『祖国のために死ぬ自由、徴兵拒否の日系アメリカ人たち』、(飯野正子、飯野 朋美、小沢 智子、北脇 実千代、長谷川 寿美訳)、刀水書房、2004 年。

ミハンセン、リアム・ブラトゥ『映画と経験 クラカウアー、ベンヤミン、アドルノ』、(竹峰 義和、滝浪佑紀訳)、法政大学出版局、2017 年。

村上由美子『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』、朝日新聞社、1993 年。

村川庸子「日系アメリカ人のアイデンティティ研究の一試論 第二次世界大戦中の「忠誠登録」を中心に」、環境情報研究第 3 号、61-88 頁、1995 年。

メッザードラ、サンドロ『逃走の権利：移民、シティズンシップ、グローバル化』、北川眞也(訳)、人文書院、2015 年。

安富歩『経済学の船出 一創発の海へ』、NTT 出版、2010 年。

山倉明弘「アメリカ市民権の使用と乱用—日系アメリカ市民戦時強制収容を中心として—」、『関西学院大学社会学部紀要』、104 号 7-18 頁、2008 年。

山本茂美、「442 部隊の真実—日系アメリカ人最初の上院議員ダニエル・イノウエの自叙伝を中心」、金城学院大学論集、人文科学編、第 10 卷第 2 号 167-177 頁、2014 年。

山本剛郎「日系人の強制立ち退き・収容に関する実態分析」、『社会学部紀要第』、104 号 19-43 頁、2008 年。

山本泰三(著作、編集)、他 12 名『認知資本主義—21 世紀のポリティカル・エコノミー』、ナカニシヤ出版、2016 年。

山本泰三「非物質的労働の概念をめぐるいくつかの問題」、四天王寺大学紀要 第 52 号

69-86 頁、2011 年。

柳田由紀子「二世兵士激戦の記録、日系アメリカ人の第二次世界大戦」、新潮新書、2008 年。

ヨシカワ マサ、ジミー・ツトム・ミリキタニ『ピース・キャッツ 「ミリキタニの猫」』、ヨシカワ マサ（編著）、ジミー・ツトム・ミリキタニ（画・文）（イラスト）、武田ランダムハウスジャパン、2007 年。

ヨシカワ マサ『猫とアートと戦争と…（そして尊厳） ミリキタニの猫《特別編》』、湖畔八丁目、2016 年。

米山リサ『暴力・戦争・リドレス 多文化主義のポリティクス』、岩波書店、2003 年。

米山リサ『広島 記憶のポリティクス』、（小沢 弘明、小田島勝浩 訳）、岩波書店、2005 年。

ロウ、リサ「グローバル近代におけるアジア系とアフリカ系のディアスポラ」浜邦彦（訳）、『ディアスポラと社会変容 アジア系・アフリカ系移住者と多文化共生の課題』、（武者小路公秀監督、浜邦彦、早尾貴紀編）、国際書院、2008 年、49-60 頁。（Lisa Lowe, *The Intimacies of Four Continents*, Duke Univ Press, 2015.）

Appadurai, Arjun, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Univ of Minnesota Press, 1996.

Angelis, Massimo De, *The Beginning of History: Value Struggles and Global Capital*, Pluto Press, 2007.

Bey, Hakim T.A.Z. : *The temporary Autonomous Zone, Ontological Anarchy, Poetic Terrorism*, Autonomedia, 1985.

Butler, Judith, *Frames of War: When Is Life Grievable?*, Verso, 2009.

-----*Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence* Verso, 2020.

Chuh, Kandice “Guest Editor’s Introduction: On Korean Comfort Women” *Journal of Asian American Studies* Johns Hopkins University Press Volume 6, Number 1, pp. 1-4, 2003.

----- “Discomforting Knowledge: Or, Korean “Comfort Women” and Asian Americanist Critical Practice,” *Journal of Asian American Studies* Johns Hopkins University Press Volume 6, Number 1, 2003, pp.5-23

Clifford, James, and Marcus, George E., *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, 2010.

David Harvey, *The New Imperialism Clarendon Lectures in Geography and Environmental Studies*, Oxford University Press, 2005.

-----*Spaces of Global Capitalism: A Theory of Uneven Geographical Development*, Verso, 2019.

Fujitani, Takashi, White, Geoffrey M., Yoneyama, Lisa, *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(S)* (North Carolina: Duke University Press, 2001.

Graeber, David, *Toward An Anthropological Theory of Value: The False Coin of Our Own Dreams*, Palgrave Macmillan, 2001.

----- *Fragments of an Anarchist Anthropology*, Prickly Paradigm, 2004.

----- *Turning Modes of Production Inside Out: Or, Why Capitalism Is a Transformation of Slavery*, *Critique of Anthropology* Vol26, No. 1, pp 61-85, 2006.

----- *Possibilities: Essays on Hierarchy, Rebellion, and Desire*, A K Press Distribution, 2007.

----- *Direct Action: An Ethnography*, A K Press Distribution, 2009.

----- *Revolutions in Reverse: Essays on Politics, Violence, Art, and Imagination*, Minor Compositions, 2011.

----- *The Democracy Project: A History, a Crisis, a Movement*, Random House, 2013.

Hamamoto, Darrell Y., Liu, Sandra, *Counter visions: Asian American Film Criticism, Asian American History & Culture*, Temple University Press, 2000.

- Hann, Chris and Hart Keith, *Economic Anthropology*, Polity, 2011.
- Hardt, Michael and Negri Antonio, *Empire*, Harvard University Press, 2001.
- *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*, Penguin Books, 2005.
- Jessop, Bob, *The Changing Governance of Welfare: Recent Trends in its Primary Functions, Scale, and Modes of Coordination*, *Social Policy and Administration*, Vol. 33, No.4, pp.348-359, 1999.
- Kang, Laura hyun yi, "Conjuring "Comfort Women": Mediated Affiliations and Disciplined Subjects in Korean/American Transnationality," *Journal of Asian American Studies* Johns Hopkins University Press Volume 6, Number 1, pp.25-55, 2003.
- Kim, Elaine H., "Korean Americans in U.S. Race Relations: Some Considerations" , *Amerasia*, Vol 23, No.2, pp69-78, 1997.
- Knapp, Michael and Flach, Anja and Ayboga, Ercan and Graeber, David, and Abdullah, Asya, *Revolution in Rojava: Democratic Autonomy and Women's Liberation in the Syrian Kurdistan*, Pluto Press, 2016.
- Maeda, Daryl Joji, *Rethinking the Asian American movement*, Routledge, 2011.
- Marks, Laura U., *The Skin of the Film: Intercultural Cinema, Embodiment, and the Senses*, Duke University Press, 2000.
- Maurizio Lazzarato, "Immaterial labor" In Virno, Paolo, Michael Hardt, *Radical Thought in Italy, A Potential Politics*, University of Minnesota Press, 2006.
- Mezzadra, Sandro and Neilson, Brett, *Border as Method, or the Multiplication of Labor*, Duke University Press, 2013.
- Miyakawa, Edward T., *Tule lake*, Trafford on Demand Pub, 2002.
- Naficy, Hamid, "Receiving /retrieving Third (world) Cinema: alternative approaches to spectator studies and critical history," R.Guneratne, Anthony and Wimal Dissanayake(ed.), *Rethinking Third Cinema*, Routledge, 2003.
- Said, Edward W. *Orientalism*, Penguin Classics, 2003.

Sassen, Saskia, *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton Univ Press, 2001.

Thomas, Dorothy Swaine and Nishimoto, Richard S., *The Spoilage Japanese-American Evacuation and Resettlement During World War II*, University of California Press Berkeley and Los Angeles, 1969.

Visweswaran, Kamala, "Race and the Culture of Anthropology," *American Anthropologist New Series, Vol. 100*, No. 1, pp. 70-83, 1998.

Wiener, Anna "In San Francisco, Tech Money Doesn't Buy Happiness" *The New Yorker*, May 17, 2019. [https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr\\_oNTSxz\\_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM](https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr_oNTSxz_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM)

[https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr\\_oNTSxz\\_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM](https://www.newyorker.com/news/letter-from-silicon-valley/in-san-francisco-tech-money-doesnt-buy-happiness?fbclid=IwAR0low5qYup5BGt9xIUr_oNTSxz_SODq3vp9ImrFx6Xlq6sxq8PVue4KyoM)

M

Wong, Cindy Hing-Yuk *Film Festivals: Culture, People, and Power on the Global Screen*, Rutgers University Press, 2011.

Wu, Jean Yu-wen Shen and Chen, Thomas C. *Asian American Studies Now: A Critical Reader*, Rutgers University Press, 2010.

Xing, Jun, *Asian America Through the Lens History, Representations, and Identities*, AltaMira Press, 1998.

Yoneyama, Lisa, *Traveling Memories, Contagious Justice: Americanization of Japanese War Crimes at the End of the Post-Cold War*, *Journal of Asian American Studies*, Volume 6, Number 1, pp57-93, 2003.



DVD

マサ吉川 (監督、製作) 『ミリキタニの記憶』、出口景子(編集)、石田優子、杉田協士、御木茂則、芦澤明子(撮影・スチール)、SKANK・スカン(音楽)、日本、2016年、21分。

Aderer, Konrad, *Resistance at Tule Lake*, First Run Features, 1 hour and 18 min, 2017.

Bocchieri, Alexander and Hayashi, Stacey, *The Herbert Yanamura Story*, 25 min, 2015.

Lee, Grace *American Revolutionary: The Evolution of Grace Lee Boggs*, Cherry Sky Pictures, 1 hour 22 minutes, 2013.

Lee, Grace, *American Revolutionary: The Evolution of Grace Lee Boggs*, Cherry Sky Pictures, 1 hour 22 minutes, 2013.

Hattendorf, Linda, *THE CATS OF MIRIKITANI*, Stars: Linda Hattendorf, Jimmy Mirikitani, 1h 14min, Filming Locations: New York City, New York, USA, 2006.

Kaneko, Anne *A Flicker in Eternity*, 25min, 2012.

Nakamura, Tadashi H. *Yellow Brotherhood*, 18 min., Los Angeles, CA: Visual Communications, 2004.

----- *Pilgrimage*, 22 min., DIGITAL VIDEO, *Pilgrimage* was made possible in part by grants from the California Civil Liberties Public Education, UCLA in LA Community Partnership Program and the California Wellness Foundation, *Pilgrimage* is a production of the downtown community media center. A partnership of Little Tokyo Service Center and UCLA Asian American Studies Center's Center for Ethnocommunications, 2006.

----- *A Song for Ourselves*, 35 min., the Center for Asian American Media, Nathan Cummings Foundation, Ford Foundation and California Civil Liberties Public Education Program with additional support from the UCLA Alumni and Friends of Japanese Ancestry Endowed Chair and UCLA Asian American Studies Center, 2009.

Takeuchi, Burt *Valor with Honor*, Torasan Films, 1 hour and 25 minutes, 2008.

Soe, Valerie *Love Boat: Taiwan*, 1 hour and 3min, 2019.

BBC News Japan (News Media)

Board of Governors of the Federal Reserve System (Government agency)

Center for Asian American Media (Non-Profit Organization)

Visual Communications (Non-Profit Organization)

Dubrovsky, Nika and Graeber, David, *Another Art World, Part 1: Art Communism and Artificial Scarcity*, 2019.

----- *Another Art World, Part 2: Utopia of Freedom as a Market Value*, 2019.

----- *Another Art World, Part 3: Policing and Symbolic Order*, 2021. (The David Graeber Foundation)

Los Angeles Times (News Media)

The New Yorker (News Media)

Nichi-Bei Week (News Media)

WIRED (News Media)